

大宰府史跡

学業院中学校整備に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



1997

太宰府市教育委員会

太宰府市の文化財 第36集

大宰府史跡

学業院中学校整備に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



1997

太宰府市教育委員会

序

太宰府市立学業院中学校は、太宰府市で最も早く創立した中学校で、現在まで50年の歳月が流れました。長い年月の間に教育材料も変化し、グラウンドの使い方も様々に工夫されるようになってまいりました。太宰府市ではこうした事象に対応するため、既存のスペースを整備すると共に隣接地を買収し、拡張整備も行っているところであります。

今回ここに報告します発掘調査は、上記のような事柄に伴って工事着手前に実施したものであります。なかでも大宰府史跡第170次調査は特別史跡大宰府跡の蔵司跡に近接し、重要な遺構が残存していることが考えられていた地点です。

調査の結果、大宰府成立に近い時期の金属生産に関する遺構群が出土し、周辺の調査を含めると大宰府の役所の一つであります「匠司（たぐみのつかさ）」が所在していた地点である可能性が高まってまいりました。さらにも出土遺物では、全国的にも出土数が稀とされます木製の印章が発見され、当時の役人の生活の一端が窺われるものとして注目されております。

こうした重要な遺構や遺物の発見から、グラウンドの整備に対して若干の設計変更を加え、大半を保存できることが可能となりました。

こうした多くの成果を掲げることができましたのも、ひとえに連日調査に従事されました作業員の皆様をはじめ、関係者の努力の賜と考えております。

つたない報告ではありますが、広く活用されることを期待いたしますと共に文化財保護への理解がよりいっそう深まることを念じております。

平成9年3月

太宰府市教育委員会

教育長 長野治己

例 言

1. 本書は、太宰府市立学業院中学校のグランド等の整備に関連して発掘調査を行った大宰府条坊跡第119次調査及び大宰府史跡第170次調査の報告書である。
2. 遺構の実測には、国土調査法第Ⅱ座標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG, N. (座標北)を示し、本文中に記される遺構の角度及び距離等もこれを基準としたものである。
3. 遺構の実測及び写真撮影は各調査担当者が行い、調査区全景の空中写真は空中写真企画が行った。また遺構全体図は、写真測量による図面作成をアジア航測株式会社に委託した。
4. 遺物の実測は大宰府条坊跡第119次調査が黒木美幸、大宰府史跡第170次調査では狭川真一、山村信榮、高橋学、森田レイ子、山本麻里子、上村英士、鶴味加代子、酒井三保子、相川寿美子、白水文恵、松隈里恵子が行った。なお実測区の点検には中島恒次郎の協力を得た。また写真撮影は狭川が行った。
5. 図版の浄書は宮崎亮一が行った。
6. 採集土壌の分析はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
7. 出土した金属製品の保存処理は、下川可容子が行った。
8. 本書に掲載した写真のうちFig. 2・3及び写真図版扉に使用したものは、学業院中学校から提供を受けた。
9. 本書の執筆は、自然科学分析報告にバリノ・サーヴェイ株式会社及び中島恒次郎による報告文を掲載し、付論を松川博一が担当したほかは、狭川が行った。
10. 本書の編集は狭川が担当した。

.....

本書に掲載した遺構番号は表記の方法が2地点で異なっている。

大宰府史跡の場合は、調査回数が九州歴史資料館の付すものと一連のものであることから、遺構番号もそれに従った。これにより当該調査地に与えられた番号は4256番から4325番であり、これを仮番号に振り分けた (Tab. 3 参照)。

大宰府条坊跡では太宰府市が従来から使用している方法で記載し、遺構種別の前に次数を冠している。種別以下は仮番号を反映させた通し番号である。

目 次

I. 周辺の遺跡とその概要	1
II. 調査経過と組織	6
III. 歴史科学分析	
(1) 大宰府史跡第170次調査	11
(2) 大宰府史跡第170次調査出土の木印をめぐって	98
(3) 大宰府条坊跡第119次調査	113
IV. 自然科学分析	
(1) 大宰府史跡第170次調査の自然科学分析	121
(2) 大宰府史跡第170次調査出土資料の蛍光X線分析	127
V. 総括	137

I. 歴史的 position と環境

今回報告する調査箇所（以下、調査地と称する）は、太宰府市立学業院中学校の敷地内にあり、この場所のすぐ東側は国指定特別史跡大宰府跡の西端に該当する。特別史跡大宰府跡の西側には葦司跡と推定される地点があり、小さな舌状の低丘陵を隔てて調査地が存在している。この立地から調査地付近が史跡指定地に含まれていないのが不思議なくらい歴史的環境には恵まれている。また中学校の西側には隣接して太宰府市立水城小学校があるが、この敷地からは「遠賀團印」と刻した銅製の印章（国指定重要文化財）が出土している。

調査地がこうした位置にあたることから、大宰府跡を中心とした歴史を発掘調査の成果を中心にして簡単に振り返ってみることで、調査地の歴史的 position を確認しておきたい。

大宰府が現在の指定地に建設されたのは7世紀後半と考えられている。この時代は我が国が律令政治の基礎を固める重要な時期で、畿内では大化の改新（645年）の後、中大兄皇子が実質的な政権を手中にし、天智天皇となった後も精力的に国内の政治を整備してゆく。対外的には百済滅亡に際して救援軍を派遣し、唐・新羅の連合軍と白村江で一戦を交えるが、軍の組織力の弱さを露見したばかりであっさり敗北を迎える（白村江の戦い/662年）。この結果に対して朝廷では、対外防衛について百済の亡命者を登用し国内の軍事基地を整備する。この折りに建設されたのが水城（664年）・大野城・基肆城（665年）などの古代山城群で、西日本の特に瀬戸内海沿岸に分布する朝鮮式山城あるいは神籠石式山城は概ねこの時期に近接して建設されたことが知られている。また大宰府のある盆地の南側でも水城に類似する遺構が発見されており、これらと大野城、基肆城、小水城およびその取り付く山並を取り入れて、日本的な羅城が建設されたのではないかとする説があり興味を引かれる⁽¹⁾。

天智の晩年、その弟の大海人皇子は皇位継承権を放棄して吉野に隠遁するが、天智の死後、その子の大友皇子と皇位継承を巡って内乱を起こし勝利する。いわゆる壬申の乱（672年）である。これは単に皇位継承が大海人皇子に移行したというだけの歴史事象ではなく、畿内及び西日本の豪族をうまく取り込んだ大海人の勝利であり、中央集権国家確立に向けての真の第一歩と言えるものである。これによって大海人皇子は即位して天武天皇となり、天皇家は名実ともに豪族の頂点に立ったのである。

天武はすぐさま政治改革に動き出し、都を近江から飛鳥にもどし（飛鳥浄御原宮）様々な豪族抑制策を打ち出す。そして浄御原律令の編纂を行い、我が国律令政治の基礎を作り上げるのである。さらに飛鳥の北の地に我が国初の本格的都城である藤原宮の建設にも着手するのである。天武の生前には藤原宮は完成しなかったが、天武の死後、妻の鸕野讃良皇女は即位して持統天皇となり、天武の残務を精力的に進めるとともに694年には完成した藤原宮へ遷都するのである。

このように、大宰府が現在地に移されたのはこうした激動の時代である。当初の大宰府（政庁第Ⅰ期）は未だ掘立柱建物が並ぶものでまだまだ簡素な構造であったと思われるが、同じ時期に政庁付近だけでなく政庁の南に広がる平野部分でも大規模な整地事業を行っていた形跡が明らかになりつつある⁽²⁾。丘陵及び古代山城に囲まれた空間の整備は着実に進められていたのである。

この政庁は奈良時代に入って朝堂院式の配置となり、屋根には瓦が葺かれ、礎石を使用した大規模な建造物群へと変貌する（政庁第Ⅱ期）。整地層から出土した土器や建物に使用された瓦から、変貌した時期は8世紀第Ⅰ四半期と考えられるようになってきた。さらに詳細な検討結果では同じ第Ⅰ四半期でも後半に属する時期に完成したものと推定され、文献史料の検討を加えることにより筆者は716年に完成したものと考えている。建設を促進した要因は多々考えられるが、当時の大宰帥である多治比池守が帥になる前職が平城宮造営司長官であったことが思い浮かぶ。彼が大宰府に赴任していたのが715～717年の間で、且つ帰任後「妻善政也」（『続日本紀』）とあり業績を讃えられていたことからこの間に完成したものと推定できる⁽³⁾。ただこの時期の大宰府は一夜にして完成したのではなく、基本設計の時期があり、さらに実施設計へと移行し建築、竣工となるわけである。この点で脇殿が四堂構成となることから平城宮中央区の配置に類似し、そこでの機能と大宰府に課せられた機能とが契響という点で一致することに注目し、平城宮中央区が大宰府政庁第Ⅱ期の平面プランに大きな影響を与えたとする意見があり注目される。平城宮中央区の構成が遣唐使として唐から帰国した粟田真人によるものとの意見を受け、粟田が大宰府に帥として赴任している点に着目したことによる⁽⁴⁾。

これらの意見を総合すると、政庁第Ⅱ期のプランは平城宮遷都前後には計画されており、8世紀第Ⅰ四半期後半の716年頃に竣工したと言える。

さて、大宰府には附属する官衙が多数あったことが知られているが、政庁の西側には南を築地で遮蔽し、北の背後に丘陵を抱く蔵司がある。また東側には権列で囲まれた月山官衙群、これらの南側には日吉・不丁の官衙群がある。月山官衙の東側は、府の学校とされる学校院があり、その東側に隣接して府の大寺「観世音寺」が建設されている。最近の調査成果をみると、これらの主要官衙は従来の推定よりもさらに広がり、大宰府政庁の南を東西に流れる御笠川以北の大半が大小の官衙で埋め尽くされていたのではないと思われる状況にある。

政庁南門の前面から御笠川までの間はかなり大きな空間となっており、広場的な性格が考えられている。また御笠川の改修工事中に川底から巨大な礎石が発見され、官衙の正門として位置づけられる朱雀門が存在していた可能性が濃厚になっている。さらに川を渡った南側には大宰府条坊と現代人が呼称している都市遺跡が広がることは確実で、その中央には幅約36mにも達する南北大路が存在することも明らかとなった⁽⁵⁾。この大路は大宰府の性格を考えると、朱雀大路と称してもまったく差し支えないものと言える。

都市空間は現在までのところ朱雀大路から西側におよそ90mの間隔において狭い南北路が3

条確認されている。また政庁から1km以上離れた地点で最近、東西路とみられる遺構が確認され、東西・南北に街路が設定されていた可能性をほのめかしつつある⁽⁶⁾。

調査地は、官衙としての性格よりもこうした都市遺跡の北辺部分と考えられていた地点であるが、隣接する大宰府史跡第160次調査の結果をみると、生産に関連した遺物が多数出土するとともに、南北方向に制約を受けた掘立柱建物が複数出土していることから、生産を司った官衙遺跡の一部である可能性も十分考えられるところとなった。こうした官的性格を帯びた遺構は現在の県道を挟んだ南側の調査でも推定でき、この地域が居住空間とするよりも官衙的性格が濃厚となっている地域であることは興味深い。

これに加えていま一つ注意しておかねばならないのは、軍団印の出土地点に近接することである。

太宰府市内には軍団印を出土した地点が2箇所ある。一つは調査地に隣接する水域小学校敷地内で発見されたもので、先述した「遠賀團印」である。いま一つは「御笠團印」で調査地の背後（北側）にある来木丘陵地のさらに北側で、直線距離では450m程度での位置で発見されたものである。「遠賀團印」出土地については本格的な発掘調査は実施されていないが、「御笠團印」出土地は周辺部も含めて10件余の調査が行われている。調査の結果では軍団に直接関連する遺構は未確認で、御笠軍団の実態は未だ謎のままである。

しかし、調査地に近接して両軍団の印章が出土していることは、この付近に大宰府の軍団（軍隊よりも事務レベル程度かも知れない）が存在していた可能性を示唆するものである。

このように御笠川以北の地域は、奈良時代の大宰府最盛期に官的性格を匂わせる地域であることは確実で、そうした中に調査地が位置づけられることを認識しておきたい。

さて、政庁第Ⅱ期の大宰府は941年、藤原純友の乱で焼失する。従来はこの事件で廃絶したものと考えられていた。しかし発掘調査の結果から、すぐさま第Ⅱ期の規模と同様に再建されたことが判明した（政庁第Ⅲ期）。

この時の遺構は、11世紀後半から12世紀中頃あたりまで存続する。一般的な歴史的背景としてこの時期は律令体制が崩壊に近づき、権門勢力が台頭し、荘園が各地にできる時代である。大宰府も奇進地系荘園で勢力を拡大した安楽寺があり、大宰府自体の勢力は決して大きなものではなかったと考えられる。しかしながら、第Ⅲ期政庁を再建しただけでなく、前面の都市部分も新規の街区に作り直していることが近年の調査で判明しつつある⁽⁷⁾。これが「観世音寺文書」に登場する大宰府の条坊と考えられるものである。この遺構は巨視的には通常の条坊と同様に道路によって街区を形成するものであるが、微視的にみると決して整然としたものではなく、各所で蛇行し、また交差点は段違いになっていたりする。しかし、これによって区切られた区画はある一定の面積を確保していたようである。

それほどの測量技術を有しているながら、街路が蛇行したりする変則的な景観は、この時期の街路の設定が前代の街路に制約を受けていることに要因があると考えられる。つまり、奈良時

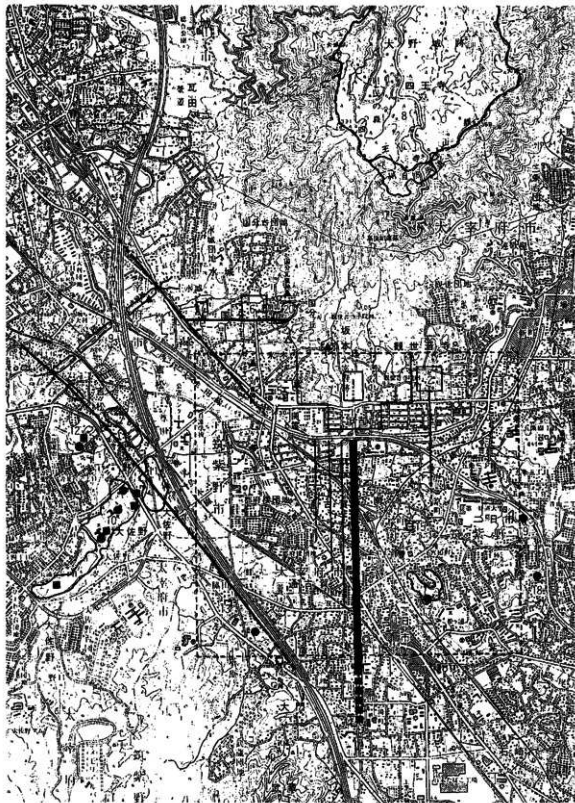


Fig.1 太宰府市周辺遺跡分布図（1/30000、主として奈良時代の遺跡に限った）

代（政庁第Ⅱ期）に設定された街路遺構にほぼ重なって当該期の遺構が発見されている事実がある。

このことから、極端な立ち退きを求める行為や時間と費用が莫大にかかる土木工事（御笠川の流れを変更するなど）を極力押さえ込んだことが想像され、それでいてなお且つ面積を主体に街区設定を行ったことから、こうした変則的な街区が出現してきたものと推定したい。大宰府自体の事業と推定されるとは言え、在地に根付いた土地所有者たちの意見が反映された結果ではなかろうか。

このような街区のある町も奈良時代に比べて大きくなっていることは事実である。鷺田川以西の地域では奈良時代には開発の手が及んでいなかったと推定されるが、平安時代後期には街路らしき遺構が発見されている。東側では街路は未発見ながら、当該期の住宅街と想定される地域は安楽寺（現在の太宰府天満宮）付近にまで広がっていたことが判明しつつある。西側はさておき東側は、大規模荘園をかかえ勢力を誇っていた安楽寺に吸い寄せられるように都市が広がっていったようにも思える。

- (1) 阿部義平「日本列島における都城形成」『国立歴史民俗博物館研究報告』36 1991 国立歴史民俗博物館
- (2) 狭川真一「大宰府成立期の遺構と遺物」『古文化談叢』第30号 1993 九州古文化研究会
- (3) 狭川真一「大宰府の造営」『古文化談叢』第31号 1993 九州古文化研究会
- (4) 山村信榮「大宰府成立論」『牟田裕二君追悼論集』1994 牟田裕二君追悼論集刊行会
- (5) 狭川真一「大宰府朱雀大路」『文化財学論集』1994 文化財学論集刊行会
- (6) 大宰府条坊跡第178次調査（1996年度 宮崎亮一・狭川調査担当）未報告
- (7) 狭川真一「大宰府条坊の復元」『条里制研究』6 1991 条里制研究会

Fig. 1 の遺跡名一覧

- | | | |
|-----------------------|------------|------------|
| 1. 大宰府跡 | 7. 筑前国分尼寺跡 | 14. 塔原鹿寺 |
| 2. 観音寺 | 8. 大野城跡 | 15. 鈴石寺跡 |
| 3. 大宰府条坊跡
（破線は推定城） | 9. 水城跡 | 16. 峯塚遺跡 |
| 4. 阿蘇軍団推定地 | 10. 宮ノ本遺跡 | 17. 峯火葬墓 |
| 5. 逸賢軍団推定地 | 11. 前田遺跡 | 18. 米塚火葬墓 |
| 6. 筑前国分寺跡 | 12. 鐘振遺跡 | 19. 結々遺火葬墓 |
| | 13. 杉塚鹿寺 | 20. 辻遺跡 |

●墳墓 ■須恵器窯 ▲瓦窯 (◆は調査地点)

II. 調査経過と組織

今回報告する2件の調査は、太宰府市立学業院中学校の施設改築あるいは増築に伴うものである。各調査に伴う事業については各々の調査の項でその概要を述べるが、学業院中学校の歴史について最初に概要を記載しておく。

学業院中学校の歴史

学業院中学校が設置されたのは昭和22(1947)年で、新学制六・三制定に伴って新制中学校誕生と同時に、現在の太宰府市の前身となる筑紫郡太宰府町と水城村によって太宰府町水城村学校組合立学業院中学校として開校した。当初、両町村にはこれに投じる財政的余裕がなかったことから、宮村女子商業学校(宮村高等女学院)の一部を借り受ける形でスタートした。学級数は1年4学級、2年2学級、3年1学級の計7学級で生徒数317名という状況であった。翌23年には隣接する水城小学校の一部も借り受けることとなったが、仮校舎、仮運動場、二部授業というみじめな状況は回避できなかった。しかし当時の村長、村会議員、郵便局長の思いつきにより、宮村女子商業学校を寄付してもらうこととなったのである。

宮村女子商業学校は昭和16年に、宮村吉蔵が女子教育のため元県庁中庭にあった産業組合学校を不用品として払い下げを受け、現在地に移築し、講堂と4つの教室を設立したことにはじまる。宮村吉蔵は滋賀県出身で博多織の「松居」を退職したのち、福岡松屋(現在のマツヤレディース)と大牟田松屋を興した人物である。女学院設立の背景には松屋の将来の女店員を育てるという目的があり、裁縫や家政科を中心に教えていたようである。

村長らの無謀な要請にもかかわらずその熱意に動かされたのか、ついに昭和24(1949)年、宮村財団から現在地にある校舎と用地の大部分の寄贈を受けるとなり、ここに現在地における学業院中学校が発足することとなった。翌昭和24年には5月9日を開校記念日と定め、さらに翌昭和25年には運動場の拡張、27年には校旗、校歌の制定が行われた。

この後、昭和30年3月太宰府町と水城



Fig. 2 本館移築完成間近(昭和15年9月)



Fig. 3 第一期工事竣工(昭和17年3月)

村は昭和28年10月に施行された町村合併促進法により合併し、太宰府町立学業院中学校となり現在に至るのである。太宰府町の人口急増により、昭和54年には太宰府中学校を新設分離し、昭和57年の市制導入の後、昭和60年には太宰府西中学校を新設し分離した。この間、教室の増築、体育館・プールの竣工など学内の整備は順調に進められた。最近の整備ではここに報告する発掘調査の契機となったテニスコート（バレーコート兼用）が平成4（1992）年7月に完成、校門や校庭等の景観整備事業を平成5年3月に完成させ、平成8年4月には用地買収により野外バレー・バスケットコートを完成させた。そして同年10月には創立五十周年記念式典が催された。

敷地内の発掘調査

校舎建て替えやグラウンド整備などに際して発掘調査を事前に実施するようになったのはごく最近のことである。いずれも試掘調査の形で実施し、遺構の確認があったのはここに報告する2件である。これ以外に行った試掘調査はテニスコート建設地区と併せて実施したもので、グラウンドの整備に関するものである。

グラウンド内にトレンチを5本設置し調査を行ったものであるが、第4トレンチを除いて現在の地表から20cm程度は真砂土による整地で、それ以下は谷地形に堆積する砂または粘土が検出されたにとどまる。第4トレンチでは旧地表までが深く1.6m余りの盛り土が施されているが、それ以下は暗青灰色粘土の堆積であり他のトレンチと同様の所見である。ただし第5トレンチでは西端において西側に落ち込む灰色土を検出し、その中に奈良時代頃とみられる瓦が混入していた。遺構溝の可能性が考えられるが調査を実施するまでには至っていない。

この折りの試掘調査の所見を総合すると、従来の地形は北及び東に高く、南に低くなるものとみられ、南側では過度の盛り土がなされている（Fig. 2の写真を見ても南側と西側には盛土による整地が成されているのが分かる）が、北側では旧地表面は大きく削平を受けていることが予想された。現在の校舎建設に際して大きな改変の手が加わっている可能性が指摘できる。

調査組織

発掘調査並びに整理報告に関わる年度及び組織は以下のとおりである。

（平成3／1991年度）……………大宰府条坊跡第119次調査

総括	教育長	長野治己		
庶務	教育部長	中川シゲ子		
	文化課長	佐藤恭宏		
	埋蔵文化財係長	富田 謙		
	文化振興係長	大田重信		
	主任主事	岡部大治	川谷 豊	
調査	主任技師	山本信夫	狭川真一	城戸康利
			緒方俊輔（調査担当）	
	技 師	山村信榮（事前審査・試掘調査担当）		

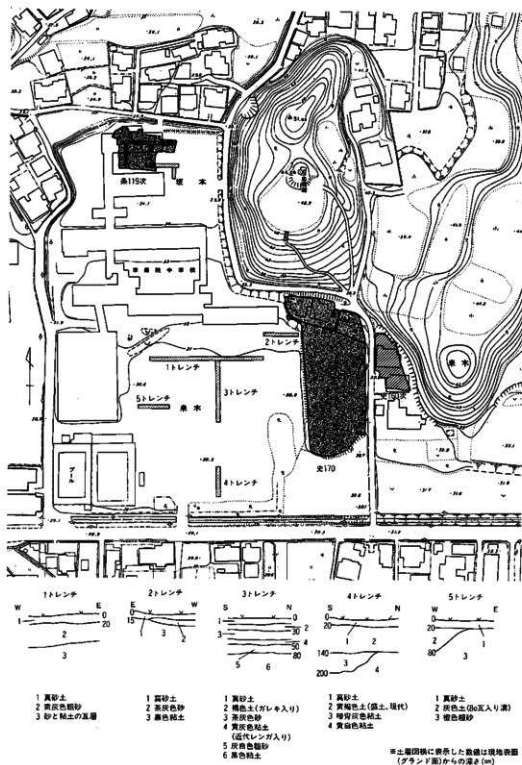


Fig. 4 学院中学校敷地内調査地点 (1/2000) 及び試掘調査所見

中島恒次郎 塩地潤一

技師（囑託） 田中克子（3年10月1日～）

（平成7 / 1995年度）……………大宰府史跡第170次調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	白木三男
	文化課長	花田勝彦
調査	文化財保護係長	高田克二（～7年5月31日） 和田敏信（7年6月1日～）
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治 川谷 豊
	主 事	今村江利子
	技術主査	山本信夫
	主任技師	狭川真一（調査担当） 城戸康利 山村信榮 中島恒次郎 重松麻里子（～7年6月30日）
	技 師	井上信正 高橋 学（調査担当）
	技師（囑託）	下川可容子

（平成8 / 1996年度）……………整理報告作業

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化課長	津田秀司
調査	文化財保護係長	和田敏信
	文化振興係長	大田重信（～8年6月30日） 田中利雄（8年7月1日～）
	主任主事	岡部大治 川谷 豊
	主 事	今村江利子
	技術主査	山本信夫
	主任技師	狭川真一（整理担当） 城戸康利 山村信榮 中島恒次郎 井上信正
	技 師	高橋 学（整理担当） 宮崎亮一
	技師（囑託）	下川可容子 森田レイ子

調査参加者（順不同・敬称略）

牛島イワヨ	白水いせの	田中勝江	徳永モモエ	中島タカ子	中島タキノ
原田経子	松島順子	南美智子	神田サダ子	谷 夏樹	洲鎌猛雄
上村英士	山本あや	栗山ヒロ子	斉藤サヨ子	藤原重登	山下譚子
吉田正子	松田千代子	小島園春	中尾芳孝	中尾ユリ子	井上富士子
安武 稔	副島栄子	山脇 昇	山脇香由子	渡辺不二也	渡辺ミサヲ
末石喜一	城戸邦典	高原改良子	陶山正夫	萩尾泰祐	田部澄博
岩男澄子	宇田川操子	岸 邦子	早田ミツル	田中千恵子	川原田美千代
中嶋さなみ	箕原壽美江	宮田恵子	村山龍子	吉岡豊子	金子章子
坂田美都子	中嶋美代子	江島スミエ	大迫フミ子	市原初子	近藤秋枝
谷 由紀子					

整理参加者（順不同・敬称略）

山本麻里子	鶴味加代子	酒井三保子	相川寿美子	白水文恵	松隈里恵子
黒木美幸	小西晴代	武堂年子	藤野由貴子	垣花道子	瀬戸口みな子
原野正子	吉田勝子	久保喜代香	菊武淑子	中村房子	横山美津子
小島和子	占部民子	林美知子	田崎道子	安芸朋江	

なお調査及び整理に際して次の方々から有益なご教示を得た。記して感謝申し上げる次第である。（順不同・敬称略）

石松好雄・栗原和彦・倉住靖彦・横田賢次郎・小田和利・小川泰樹（九州歴史資料館）
大澤正己（たたら研究会） 平川南（国立歴史民俗博物館） 東野治之（大阪大学）
御厨義道（太宰府市史編纂室） 大西清右衛門

III. 歴史科学分析

(1) 大宰府史跡第170次調査

太宰府市立学業院中学校ではこれまで各種の整備事業を進めているが、今回は東側隣接地の宅地及び水田を買収してテニスコートやバスケットコートを充実させるものである。この工事に先立つものとして、太宰府市教育委員会が発掘調査を行った。調査地番は太宰府市観世音寺3丁目363ほかで、調査面積は2,430㎡である。調査地は大宰府政庁跡から西へ約400mの位置にあり、その成果として掘立柱建物10棟、柵列12条、竪穴住居1棟、井戸4基のほか、土城や溝、ピットなどが検出された。調査主体は異なるが、調査地点が大宰府史跡第160次調査に隣接することから、調査名を大宰府史跡第170次調査として実施することとした。現地での調査は平成7年4月17日から10月19日まで実施し、狭川真一、高橋学が担当した。

(1) 層位など

調査区の大半は堆積土で形成されており、場所によって堆積の状況が異なり、遺構面を形成する層も各所で異なっている (Fig. 5～8)。

調査区を細かく見ると、SB4300の所在する北西付近は調査前も他所より一段高く、台地状を呈しており、花崗岩風化土の地山がすぐに顔を出し遺構もその面から穿たれている。上面には包含層は認められず、この部分が近年まで宅地であったことを考えると、遺構面は若干ながら削平を受けているものとみられる。またこの地点の北側をみると丘陵がすぐ近くまで迫っており、この台地状を呈する部分は丘陵の南斜面を造成してできあがったものと解釈できよう。

この東側は当初は小さな谷地形を呈していたようで、複雑な堆積状況を示している。その範囲は今回の調査区でいえば北側の1/6程度である。地山は赤褐色粘質土でSB4160の西端と考える遺構などはこの面から穿たれている。その上層には茶色粘土(茶灰色粘土)層が被り、南端では茶褐色土がその上に形成されている。この両土層の上面は一つの遺構面を形成していたとみられ、SX4256・SK4263な

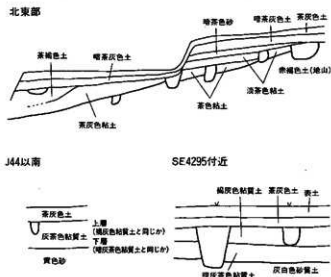


Fig. 5 大宰府史跡第170次調査土層模式図

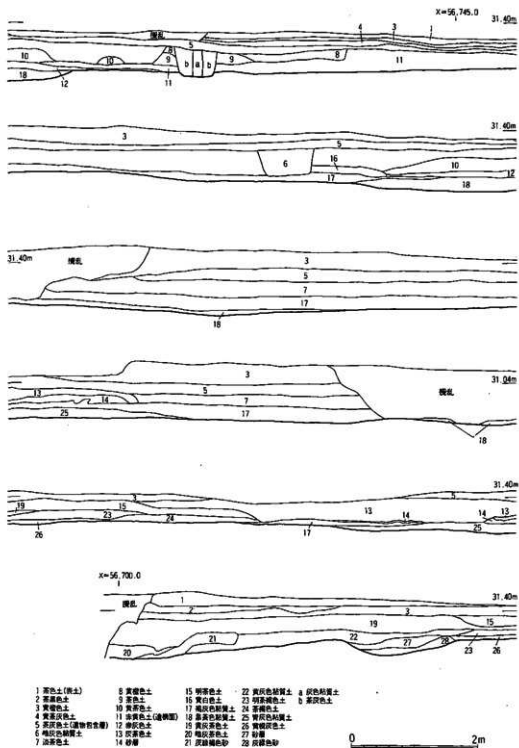


Fig. 6 調査区西壁土層観察図 (1/60)

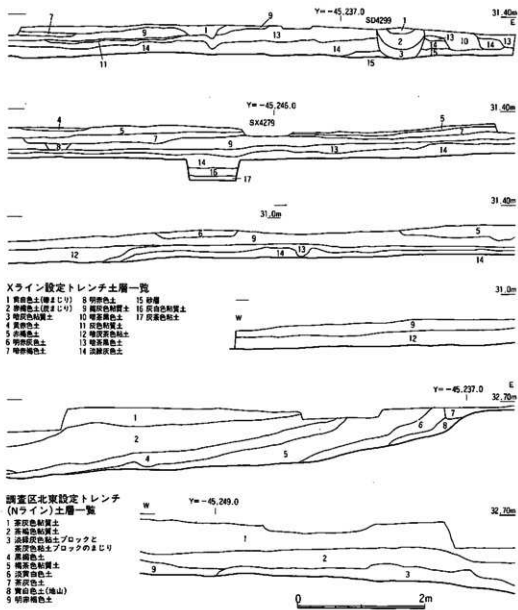


Fig.7 調査区内トレンチ土層観察図 (1/60)

どはここから穿たれている。さらにこの上層には淡茶色粘質土がある。これはSD4262を境に南では削平されたためか認められない。この層の上から穿たれる遺構としてSK4257・SK4261などがある。淡茶色粘質土の上層には暗茶色砂質土があるがあまり広がりはなく、さらにその上面に被る暗茶灰色土は調査区北東の一角全体を覆っている。この層は後世の段差が出来てから被ったもので、SD4262がその段差の境に存在し、それを覆っていることからSD4262を挟んで連続しないものの、一連の土層と考えておきたい。これらの層を最終的に覆うのは茶灰色土で、これは今回の調査区全体に認められるものである。こうした土層の堆積は茶灰色土を除い

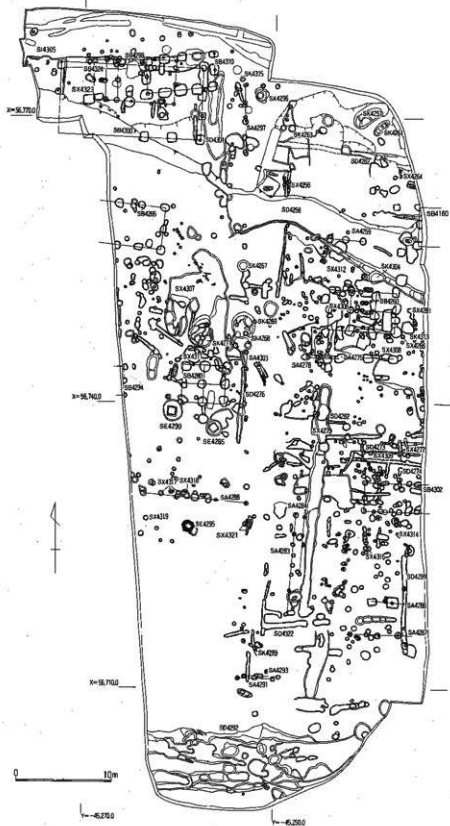


Fig. 8 大宰府史跡第170次調査遺構配置圖 (1/400)

て、基本的には北から南に向かって堆積しており、南に至るに従って厚くなっている。

これ以外の調査区（先述のエリアを除いた大半の部分）では、調査区北部にみられた堆積とは異なり、概ね水平に近い堆積である。SE4295付近で設定したトレンチの観察では茶灰色土の下に褐灰色粘質土があり、ここで報告する遺構の大半はこの層から穿たれている。その下には暗灰茶色粘質土、灰白色砂質土の順で堆積している。褐灰色土中には大きな自然木（樺）が混入していた。

(2) 遺構

掘立柱建物

SB4160 (Fig. 9・10, Pla. 9) 第160次調査で確認されていた東西棟の建物で、今回はその西端部分を確認した。前回の所見では桁行の端間がやや広い建物と認識されており、それに基づいて復原すると梁間2間、桁行7間で東西の両端間をやや広くし、その他はほぼ等間で割り付けられていると推定される。これにより復原される建物規模は、東西12.25m、南北4.56mとなる。桁行から計測した振れはN-91°10'-E程度で、柱掘り方は不整形ながらほぼ略方形のものが多く、長さ0.7~1.2m、残存する深さ0.3~0.8m程度である。なお柱掘り方qの底部が他に比べて低く、逆にaで浅いことが気になるが、ここでは一つの建物として報告しておく。

SB4260 (Fig. 9・10, Pla. 6・7) 2×3間の東西棟総柱建物と理解して報告するが、柱筋がうまく通らない部分もあり、再考を要する。この復原では桁行7.0m、梁間4.3mで各柱間は等間では復原できない。振れは桁行でN-93°30'-E程度で、柱掘り方は不整形で略方形のものや円形のものもあり不揃いである。掘り方の残存する深さは0.2~0.3m程度である。

SB4265 (Fig. 9・10, Pla. 8・9) 2×2間以上の東西棟建物で調査区の西側に延びている。桁行4.55m以上、梁間4.42m（柱心心間）で各柱間は等間ではなく、SB4160と同様に桁行の隅間がやや広い建物となる可能性が考えられる。柱掘り方は略円形で0.8~1.0m、深さ0.2~0.3m程度である。柱痕跡を確認できるものがあり、それによると柱径は0.1~0.2m、建物の振れは桁行でN-96°50'-E程度である。

SB4280 (Fig. 11・12, Pla. 10・11) 2×2間の総柱建物で、SE4290に切られている。建物の規模は東西4.5m、南北4.0mで各柱間は等間と推定される。掘り方は略円形が中心で0.9~1.1m程度で、柱掘り方iで柱痕跡を確認しており、それによると柱の直径は約0.13mである。建物の振れは、桁行でN-92°30'-E程度である。東側に隣接する柵列SA4303とは2.14mの間をおいて平行して配置されており、SD4276とあわせて関連する遺構と判断される。

SB4294 (Fig. 9・12, Pla. 12) 調査区境に接して検出されたため東西方向の規模は不明で、南北2間の柵列の可能性も残されている。柱掘り方は長さ0.5~0.6mの略円形で、柱間は1.53m等間、柱痕跡から柱の直径は0.15mであることがわかる。建物の振れは、梁間でN-0°-Eである。

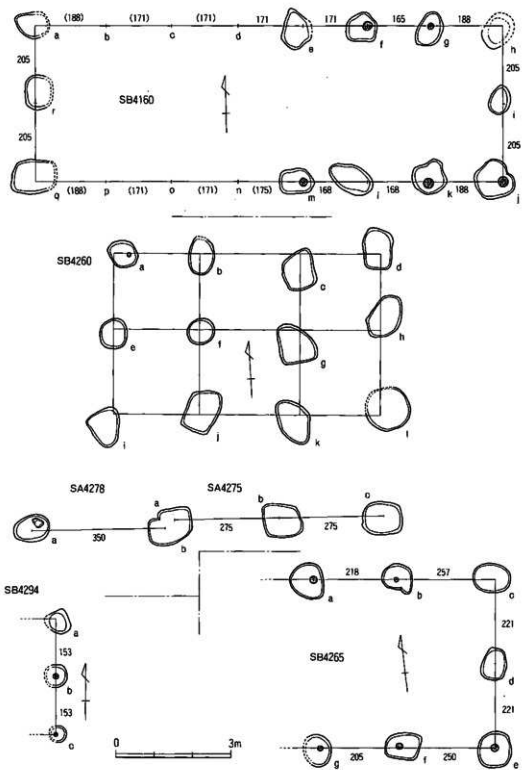


Fig. 1 SB4160 · 4260 · 4265 · 4294 · SA4275 · 4278実測図 (1/100)

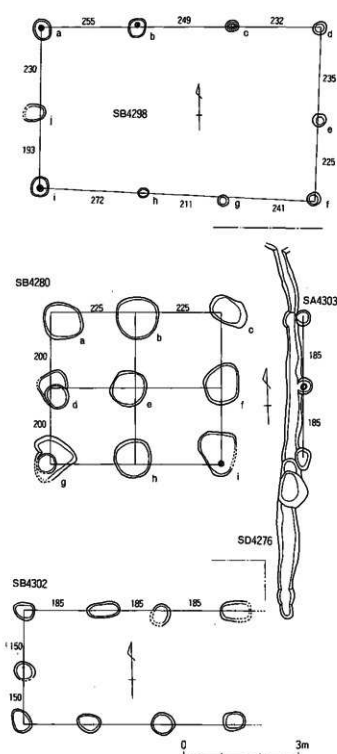


Fig.11 SB4280・4298・4302・SA4303・SD4276
実測図 (1/100)

SB4300 (Fig.12・13, Pla.13
～15) 5×3間で大規模な掘立
柱建物である。柱心距離では桁
行14.90m、梁間7.48mにもおよ
び、床面積は111.452㎡(約33坪)
である。検出遺構の内北辺にあ
たる柱掘り方は幅1.1～1.5mの溝
状を呈し、柱痕跡のみが遺構面
上に顔を出している状況であ
った。他の柱列では東北隅の掘り
方fが南北に長い長方形を呈し
ており、北側に寄った状況で柱
抜き取り痕跡が認められた。他
の柱掘り方は通常の掘立柱建
物と同様に隅丸方形のプランで
検出された。通常の柱掘り方の
規模は一辺約1mで、遺構面の
削平から検出された深さは一
定しないものの底部の標高は桁
行方向でほぼ安定し、南にやや
深い状況を示している。北辺の
掘り方は幅1.1～1.5m、深さ約
0.2mの溝を穿ち、柱を立てる
部分のみ一辺1m程度の方形に掘
りくぼめ、そこに柱を立てたも
ののみみられる。掘り方内の埋
土はあまり複雑ではなく、数層
が確認された程度であるが、
北辺のものでは溝部分を含めて
単一層であったことから、一
気に埋め戻されたことが知ら
れる。この溝状を呈する掘り方
は当初は全辺を巡っていたもの
と考えている。柱の直径はその
痕跡から0.15～0.25mで、建
物規模からすればやや細い感
じがする。また上

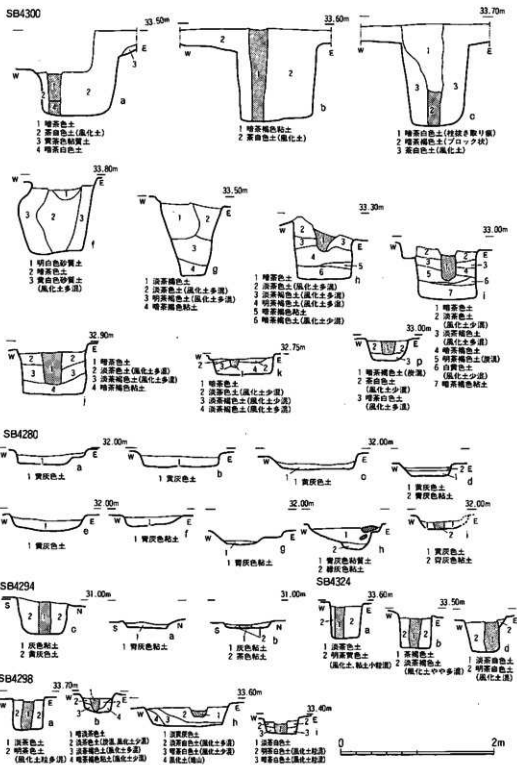


Fig.12 SB4280・4294・4298・4300土層観察図(1/50)

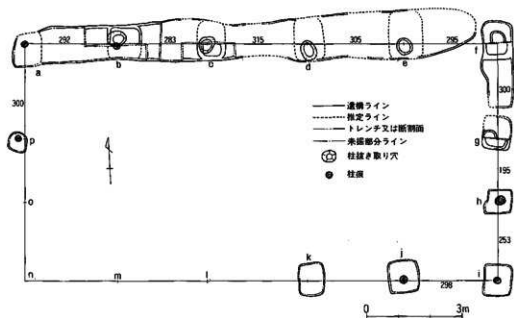


Fig.13 SB4300実測図 (1/120)

面で検出した柱痕跡は一律に不整形で土層観察から得た柱径よりも大きく、掘り方 f や g の観察結果を踏まえると大半が抜き取られたものと考えておきたい。この点で掘り方 b の柱痕跡は北側に引き倒したことから南側が半円柱のスタンプ痕となり、そこに後の埋没土が侵入したために当初の形状が保たれたように見えているものと考えている。建物の振れは桁行方向で N-92°25'-E 程度である。なお、この建物は SB4310・SI4305 に切られており、調査区内におけるこの付近では最も古く位置づけられる遺構である。

SB4302 (Fig.11) 2×3 間以上の東西棟で、東側は調査区の外に延びている。柱間は桁行で 1.85m 等間、梁間で 1.50m 等間に推定される。柱掘り方は不整形円で 0.5~0.9m である。建物の振れは桁行方向で N-91°45'-E 内外である。整理中に認識したことから土層観察資料が欠落している。

SB4310 (Fig.14・16, Pla.16~17) SB4300 に重複し、それよりも後出する掘立柱建物である。2×4 間の東西棟建物で、桁行 7.20m (北側柱心心距離)、梁間 3.55m (西側柱心心距離) を測る。柱間はほぼ等間ながら柱筋はうまく揃っていない。とくに北辺では東隅の掘り方 e の柱がやや南にずれている。また桁行、梁間各々はほぼ平行しているものの、両者は直交せず、平面的にはややいびつな平行四辺形を呈している。柱掘り方はすべて隅丸方形で 0.8~1.4 m、深さは 0.3~0.7m で、柱痕跡から柱の直径は 0.15~0.30m であることが知られ、柱は比較的丁寧に埋め戻されている。建物の振れは桁行北辺のデータから N-97°-W で、建物ではこれのみが西に振れている。

SB4324 (Fig.14, Pla.11) SB4300・4298 に重複して検出された 1×2 間の小規模な建物

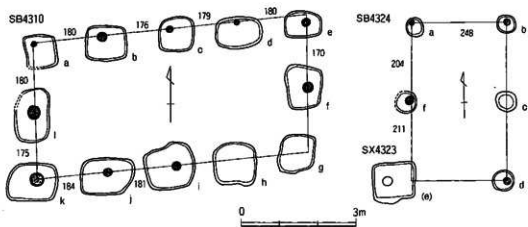


Fig.14 SB4310・4324・SX4323実測図(1/100)

である。東西の長さ2.48m、南北4.15mで、掘り方は略円形で直径は0.5~0.6m、柱の太さは0.12~0.18mである。南西隅の掘り方はSX4323によって失われている。建物の振れはN-1°15'-E内外である。SB4300より後出するが、SB4298とは切り合わず前後関係は不明である。

SX4323 (Fig.14・16, Pla.20) SB4324の南西隅にある方形で1.20×0.95mの柱掘り方である。掘り方内の西寄りに柱痕跡が確認され、直径約0.25mであったことが知られる。なお土層断面観察では柱痕跡が二重になって認められたが、上位のものは別遺構の可能性もある。

柵列

SA4259 (Fig.15・16, Pla.19) SB4160の西側で検出された東西方向の柵列で、全長5.20mの3間である。遺構の振れはN-94°-E前後である。

SA4275 (Fig.9・16, Pla.19) SB4260の南側にある東西方向の柵列で2間で構成される。柱間は2.75m等間に推定される。SB4260にほぼ平行しているものと考えられる。なおSA4278と掘り方の一部が切り合っており、SA4278が新しい。

SA4278 (Fig.9・16, Pla.20) SB4260の南側にある東西方向の柵列で1間で構成される。柱間は3.5mと推定される。SB4260にほぼ平行しているものと考えられる。なおSA4275と掘り方の一部が切り合っており、こちらが新しい。

SA4283 (Fig.15) 調査区中程で検出した南北5間の柵列で、長さは10.45mである。柱掘り方は略円形のピットで、直径0.35~0.55mである。遺構の振れはN-5°20'-Eを前後するものである。SA4284にほぼ平行している。

SA4284 (Fig.15) 調査区中程で検出した南北3間の柵列で、長さは8.80mである。柱掘り方は略円形のピットで、直径0.3~0.4mである。遺構の振れはN-5°05'-Eを前後するものである。SA4283にほぼ平行している。

SA4286 (Fig.15・16, Pla.18・20) 東西1間以上の柵列で東側に延びる可能性があるが、後世の段落ちで削平されている。柱掘り方は略方形ながら両者の大きさは大きく異なるが、柱

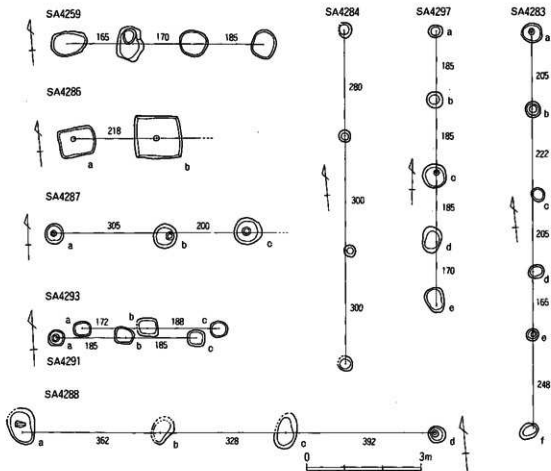


Fig.15 SA4259・4283・4284・4286・4287・4288・4291・4293・4297実測図(1/100)

の直径は両者とも0.15mである。短いながら遺構の振れは $N-93^{\circ}55'-E$ 前後に求められる。

SA4287 (Fig.15・16, Pla.18) SA4286の両側にある東西方向の棚列で2間分検出した。遺構はさらに東に延びる可能性があるが、後世の段落ちで削平されている。柱掘り方は略円形で直径0.50~0.75m、検出できた柱痕跡から柱の直径は0.15m程度に復原される。遺構の振れは $N-91^{\circ}40'-E$ 前後である。

SA4288 (Fig.15) 東西3間の棚列で、10.82m分を検出した。遺構は西へさらに延びる可能性がある。柱掘り方は略円形で直径0.35~0.65mと不揃いである。遺構の振れは $N-95^{\circ}05'-E$ 前後である。これより以南にはSE4295以外に目立った遺構はなく、棚列の意味を示唆するようである。

SA4291 (Fig.15, Pla.18・19) 東西2間の棚列で、1.85m等間。柱掘り方は略方形乃至は円形で0.45m前後である。遺構の振れは $N-91^{\circ}45'-E$ 内外である。SA4293とほぼ平行するが、こちらが新しい。

SA4293 (Fig.15・16, Pla.18・19) 東西2間の棚列で、長さ3.6m。柱掘り方は略方形乃至

SB4310

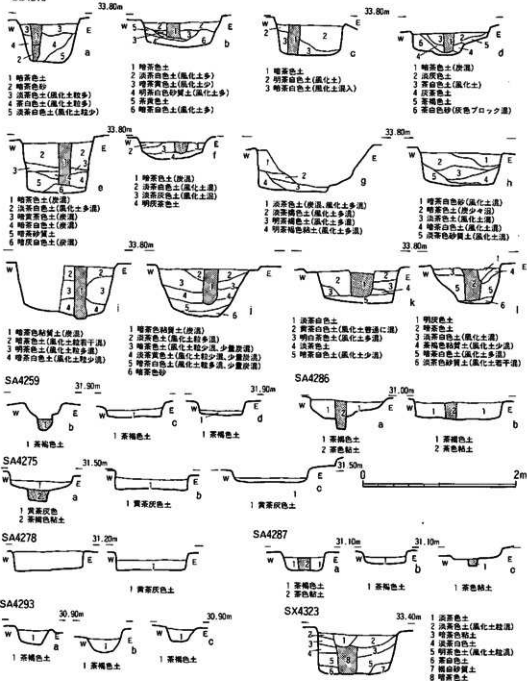


Fig.16 SB4310・SA4259・4275・4278・4286・4287・4293・SX4323土層観察図(1/50)

至は円形で0.45~0.55m前後である。遺構の振れはN-91°35'-E内外である。SA4291とほぼ平行するが、こちらが古い。柱痕跡は確認できなかった。

SA4297 (Fig.15) 調査区北部で検出したもので、南北4間の棚列と考えられる。柱間は南の1間を除いて1.85m等間とみられ、振れはN-1°-W程度である。柱掘り方は略円形で直径0.40~0.65mである。

SA4303 (Fig. 11) 南北2間でSB4280とは2.14mの間をおいて平行する。柱間は1.85m等間で、掘り方は略円形で直径0.45m程度である。遺構実測図では隣接する溝SD4276と切り合っているように見えるが、検出段階では重なっておらず両者が同時に存在していた可能性が高い。なおさらに北へ1間延びる可能性も残されている。

竪穴住居

SI4305 (Fig. 17, Pla. 20~22) 南側は段落ちで、西側は調査区外にあって全体像は明らかではない。現存南北長3.65m、東西長4.34m、深さ0.40mを測る。北辺中央付近に竈の跡がありその付近の壁が円形に外方へ張り出している。張り出しの規模は、住居北辺壁から外側へ0.25m、幅1.1m程度で、床面に近いところで0.1mほど奥へ窪んでいる。ここから南(住居内側)へおよそ0.5mの位置に長さ0.4m、深さ0.15mほどの小さな窪みがあり、内部に赤褐色の焼土が詰まっていた。またその上面には黒色の炭層が1.35×0.88mの範囲で広がっていたことから、この窪み付近に移動式竈を据えたものと推定できる。

壁溝は各壁の直下に沿うように検出され、幅0.15m内外、深さ5cmで竈部分と隅部分には存在しない。柱穴は床面の北寄りて2個確認した。プランは略円形で直径0.4~0.5m、深さ0.25

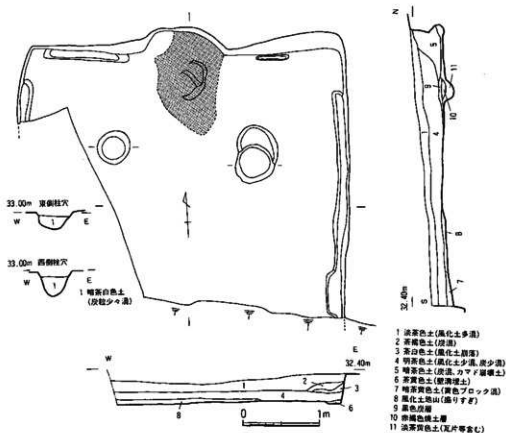


Fig.17 SI4305実測図・土層観察図(1/50)

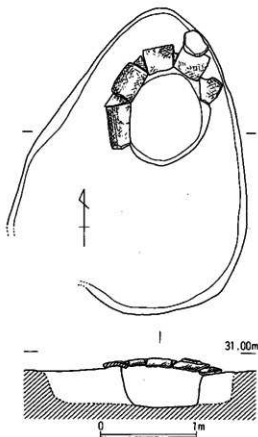


Fig.18 SE4270実測図 (1/40)

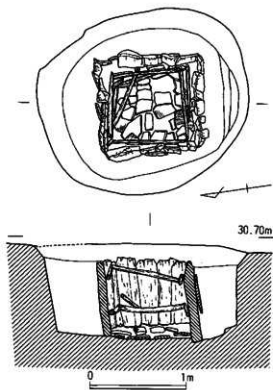


Fig.19 SE4290実測図 (1/40)

～0.35mである。埋土は暗茶褐色土の単一層で柱痕跡は確認できなかった。貼床はない。

SB4300を切っており、床面からSB4300の柱掘り方が2個検出された(Pla.13下)。

井戸

SE4270 (Fig.18, Pla.23) 南北3.2m、東西2.45mの不整形を呈する掘り方の北寄りに、南北1.05m、東西0.85m、深さ0.35mで略円形のプランを有するものである。上面には平瓦を打ち割ってプランの周囲に並べている。瓦積み井戸の底近くが残存したものと判断している。

SE4285 (Fig.19, Pla.25・26) 径約1.72m、深さ0.88mで円形の掘り方を有し、内部には一辺約0.9mで方形の枠が据えられていた痕跡が確認できた。推定枠内の埋土は青灰色粘土で、その上面には明灰色土が堆積していた。

SE4290 SB4280を切っている井戸で、南北2.21m、東西1.95mのややいびつな円形の掘り方を有し、内部には0.9×0.8m(内法)、深さ約0.8mの方形の枠を据える。枠は断面形状が長方形ないしは略三角形を呈する角材を5～6本立てと並べ、内側を横桱で固定するものである。横桱は5cm内外の自然木を簡単に加工した程度のもので各々は臍組で固定される。四隅に支柱は確認されなかった。また枠内の底部には平瓦の破片を敷き並べていた。

遺構の埋土は採検出前の崩壊土が灰色土、枠内の大半は暗青灰色粘土で多くの遺物が混入していた。その直下に腐植土層が形成され、底には青灰色砂が若干堆積していた。これらの土層は腐食土層付近までが使用段階の堆積とみなされ、暗青灰色粘土層は廃棄に伴う埋土と解釈している。裏込めは灰色粘質土（黒灰色粘土のブロックを含むもの）であった。

SE4295 (Fig. 20, Pla. 23・24) 瓦積みの井戸である。内法の直径は検出上面で0.8m、深さは0.85mで、底部付近は平瓦の凹面を内側にして立て並べ枠とするもので、7枚で構成されている。瓦の倒れ込みを防止するために内側の4箇所に径3cm程度の杭を打ち込んでいる。底部分の中央には0.37×0.33m、深さ0.17mで円形のプランがあり、曲物を据えていた痕跡の可能性はある。立てた平瓦の枠から上で検出面に至る0.4mの間は平瓦を中心に瓦の小口部分

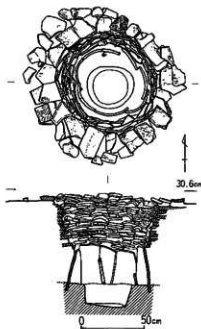


Fig.20 SE4295実測図 (1/30)

を内側に向けて積み上げており（ごく少数ながら側面を向けるものもある）、一部に軒平瓦も用いられている。段数は場所によって異なるが概ね10～12段程度である。

埋土は瓦を積む部分の大半が灰褐色土、その直下に若干砂層が堆積し、立てた瓦部分では灰褐色粘質土が堆積していた。

この遺構の掘り方は精査したにもかかわらず明確に検出することはできなかった。グランド下に保存が可能になったことにより瓦を取り除く作業をせず、周囲にトレンチを設定して断ち割り作業も実施したが判然としなかった。不明確ながら瓦末端に接するように存在していたのではないかと想定している。

土坑

SK4257 (Pla. 26) 調査区北東隅で検出したSK4261に隣接する土坑で、淡茶色粘質土層から穿たれる。長さ4.0m、幅1.7m、深さ0.35～0.70m程度で楕円形を呈している。遺物は埋土中に散在した状態で出土した。

SK4261 (Pla. 26) SK4257の東側にある土坑で、淡茶色粘質土層から穿たれる。長さ2.1m、幅0.85m、深さ0.3～0.65m程度で長楕円形を呈している。埋土の主体は茶色土であるが、底部付近に白黄色砂質土が堆積していた。

SK4263 (Pla. 27) 0.72×0.75m、深さ約0.1mで略円形のプランを有し、土坑の周囲が火熱により赤変する。内部は炭が多量に詰まっていた。茶色粘土層から切り込む。

SK4267 (Pla. 27) 1.15×1.20m、深さ約0.35mで略円形のプランを有する。埋土の上位から鬮羽口が出土した。

SK4268 南北長4.25m、東西長1.75m、深さ0.2m内外で瓢箪形を呈する。南に延びるSD4276より新しい。

SK4269 1.7×1.5m、深さ0.4m程度で略円形を呈する。埋土は灰茶色粘土である。

SK4271 SE4270に切られる土坑で、当初は2つの遺構が切り合っていると判断したが、調査の結果堆積土の違いと判断したため一つとして報告する。南北3.35m、東西2.45m、深さ0.2m内外で、不整形なものである。土坑底部は凹凸が著しい。埋土は茶灰色土が主体である。

SK4289 0.9×0.65m、深さ約0.1m。

SK4296 SB4300のある台地のすぐ東側で検出され、地山（花崗岩風化土）から穿たれている。1.35×1.45m、深さ約1.5mを測る。検出面でのプランは不整形ながら底部付近は円形を呈している。井戸の可能性も残される。

SK4304 1.75×1.4m、深さ0.6mで不整形円形を呈している。SD4258に切られている。

SK4313 SB4260の東側に隣接している。1.3×1.35m、深さ0.15mを測る。

SK4315 SB4310等の東側、SA4297aの北側に所在する土坑で、0.53×0.48m、深さ0.21mを測る。埋土中から鋳型とみられる破片が出土した。

溝

SD4258 東西方向の溝で途中で曲がっている。検出長22m、最大幅1.15m、深さ0.1～0.2mで東側が低い。水田の段差の裾に沿って見つかっており、水田造成段階のものと思われる。

SD4262 調査地北端で検出された東西方向の溝で、検出長14.3m、幅0.5～0.8m、深さ0.1m以下のものである。埋土は暗灰色土である。検出状況では茶色粘土層が穿たれるが、水田の段差の裾に位置し、淡茶色粘質土には覆われていないことから時期的に新しい遺構となる可能性が高い。

SD4273 (Pla.28) 長さ7.0m、幅0.15～0.3m、深さ5～10cm程度で底には凹凸がある。SX4272に切られている。

SD4274 (Pla.28) 検出長8.0m、幅0.35m内外、深さ5cm程度で、東側は調査区外に延びている。SD4273とは心間で1.0mの距離をおいてほぼ平行している。

SD4276 (Fig.11) SB4280の東側にあり、建物東端の柱列から約1.8mの距離をおいて平行して配置されており、SA4303とあわせて関連する遺構と判断される。なおSA4303との切り合い関係はない。北の端をSK4268に切られるが、検出長9.7m、幅0.3～0.55m、深さ0.1m程度で南流する。

SD4282 (Pla.28) SX4278を切っている溝で、検出段階から連続してないが当初は一つの遺構と判断して報告する。検出した全長6.5m、幅0.2～0.3m、深さ5cm程度である。SD4273とは途中に類似の溝を挟んで平行する。

SD4292 (Pla.29) 調査区南端で検出した東西溝で、底部で流れが2本になっている。検出長22.5m、幅は検出面で6.2～7.0m、深さ0.2～0.6mで西が低い。埋土は最上層に黄褐色土

があり、2本の流れの両方を覆っていた。この黄褐色土を除去すると2本の流れが確認されることがいずれも類似する粗めの砂の堆積層で、切り合い関係を明らかにすることはできなかった。両者とも最下層は青灰色砂層であった。

SD4299 調査区東南端で検出した南北方向の溝で、長さ10.45m、幅0.4~0.6m、深さ5~10cmを測る。

SD4301 SB4300・4310の両者を切っている南北溝で、長さ9.3m、最大幅2.5m、深さ0.2~0.65mを測り、埋土は淡茶色土の単一層である。

SD4322 長さ4.5m、幅0.55m、深さ0.5~0.6mを測る。

暗渠状遺構

SX4256 (Fig. 21, Pla. 26)

調査区北東部に位置し、茶褐色土に切り込んでいる。周辺の遺構の状況からみて何故にここに暗渠を必要としたかは判然としない。検出長2.1m、内法の幅0.2mを測り、深さ0.2m程度の溝を穿ちその上部に人頭大の石を並べたものである。側石は西側で4個、東側で6個残存し、天井石は中程に1個が残存していた程度である。天井石を被せた時の内高は0.25mである。溝は北に高く南に低い。遺構の南側は段落ちによって失われている。

その他の遺構

SX4264 (Pla. 30) 茶灰色粘

質土層を除去した段階で検出されたもので、検出段階では東西2.8m以上、南北2.7mの範囲に焼土の分布が確認され、これを遺構と仮定した。しかし、焼土を除去すると北側でわずか数cmの段を検出したにとどまり、若干の土器片が出土したのみで、性格を特定するまでには至っていない。

SX4266 0.38×0.42m、深さ0.21mで略円形のプランを有するピットである。

SX4272 SD4273を切るピットで、径0.5m、深さ0.25mを測る。

SX4277 SB4302と重複して検出されたピットで、径0.4m、深さ0.48mを測り、底部に瓦片を敷いている。

SX4279 長さ24.6m、幅0.7~1.3m、深さ0.1~0.2mを測る溝状の落ち込みである。埋土

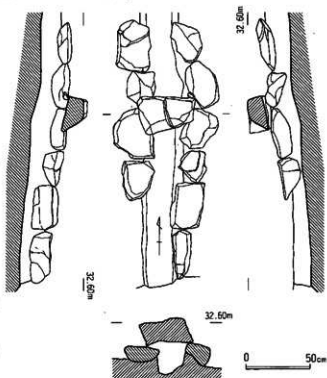


Fig.21 SX4256実測図 (1/30)

は灰赤褐色土の単一層で、検出段階のプランは随所に乱れがありこれを含めて同一の埋土で検出されたことから、溝と特定することを避けた。

SX4281 (Pla.30) 検出段階ではL字形に検出されたが、掘り下げると小さな略円形の土坑状のものが運んでいるように見受けられた。これらを含めて一つの遺構としたが性格は明らかではない。埋土中から鞆羽口が出土している。

SX4308 0.62×0.48m、深さ0.2mのピットである。

SX4307 SK4271の北側にある溜まり状の遺構で、東西6m、南北8m程度、深さ0.1~0.15mを測る。暗茶灰色土の埋土で、SK4271に切られている。形状が不定形なこと、底部に至ると木の根状の残骸がみられることから、整地に際して伐木し、株まで除去した跡の可能性もある。なおSA4303の東側で堆積土中から、樟の原木が見つまっているが、整地の際に伐採され一緒に埋め戻されたものかも知れない。

SX4308 SA4275の柱掘り方bを切っている横長のピットで、長さ1.4m、幅0.3~0.35m、深さ0.1mを測る。

SX4309 SD4273を切るピットで、径0.45m、深さ0.14mを測る。

SX4311 SK4271とSB4280の間にある窪み状の遺構で、両者との切り合いはない。東西2.7m、南北1.8m、深さ0.7m程度で不整形である。

SX4312 SB4260の北にあるピットで、径0.3m、深さ0.13mを測る。

SX4314 生産用具を出土したピットで、径0.25m、深さ約0.1mを測る。

SX4316 0.85×0.52m、深さ0.25mを測る。ピットの中央やや東寄りに径0.25mの柱痕跡が確認されたが周辺に関連するピットは見当たらなかった。

SX4317 一部の遺構がSA4288を切るピット群である。

SX4318 SA4288b・c間にあり、SX4317に近接するピットである。1.1×0.7m、深さ約0.1mを測る。

SX4319 SA4288・SE4295に近接する径0.5m、深さ0.1mのピットで、埋土中から円面硯の破片が出土した。

SX4321 SE4295の西にあるピット群。

(3) 出土遺物

土器・陶磁器

SB4160出土土器 (Fig.22)

土師器

甕(1) 口径16.0cm。外面は調整不明、内面はケズリである。柱掘り方q出土。

SB4260出土土器 (Fig.22, Pla.31)

須恵器

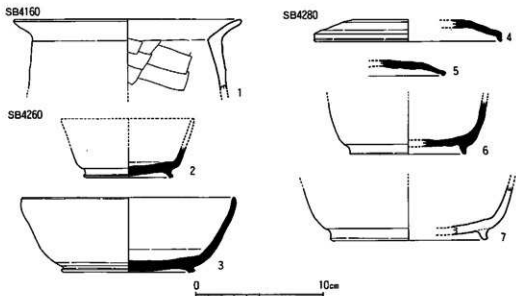


Fig.22 SB4160・4260・4280出土土器実測図(1/3)

坏c(2) 高台径7.0cm。底部はヘラ切りである。柱掘り方f出土。

碗c(3) 口径16.8cm、器高5.9cm、高台径10.4cmを測る。底部はヘラ切りされる。柱掘り方g出土。

SB4280出土土器 (Fig.22、Pla.31)

須恵器

蓋3(4・5) 両者とも天井部は回転ヘラケズリされる。4は柱掘り方c出土。5は柱掘り方b出土。

坏c(6) 高台径9.2cm。底部はヘラ切りされる。柱掘り方g出土。

土師器

坏c(7) 高台径12.3cm。柱掘り方k出土。

SA4275出土土器 (Fig.23)

須恵器

蓋2(1) 小片の資料で口径の復原は困難である。柱掘り方c出土。

製塩土器

焼塩壺(2) 外面は指圧痕がみられ、内面はナデである。

SA4280出土土器 (Fig.23)

須恵器

蓋c3(3) 口径14.0cm、器高3.1cm以上。調整痕跡から摘みの付くものと判断した。天井部

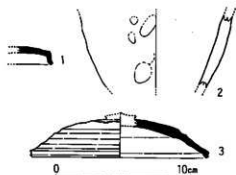


Fig.23 SA4275・4280出土土器実測図(1/3)

はへら切りののちナデである。

SI4305出土土器 (Fig.24、Pla.31)

須恵器

蓋 3 (1) 口径13.0cm。口縁端部は明瞭な三角形を呈する。

坏 (2) 口径16.0cm。体部の調整はヨコナデである。

土師器

甕 (3) 口径17.0cm。外面は縦方向のハケ目、内面はケズリである。

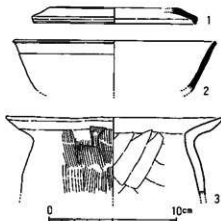


Fig.24 SI4305出土土器実測図 (1/3)

SE4270出土土器 (Fig.25)

土師器

碗c (1) 高台径6.0cm。丸底坏cの底部の可能性もある。

SE4285出土土器 (Fig.25、Pla.31)

須恵器

蓋c 3 (2・3) 口径10.0・18.8cm。2の端部は明瞭な三角形を呈する。天井部はヨコナデである。3の天井部は回転へらケズリである。両者とも調整痕跡から摘みが付く資料と思われる。2は明灰色土層、3は枠内からの出土である。

坏c (4) 小さくて台形状を呈する高台の径は7.0cm。

短頸壺 (5) 口径10.0cm。内外面とも少量の炭化物が付着している。

甕 (6) 口径18.0cm。

SE4290灰色土出土土器 (Fig.27、Pla.33)

土師器

皿a (1) 口径13.0cm。器高1.3cm、底径9.6cmを測る。底部はへら切りである。

須恵器

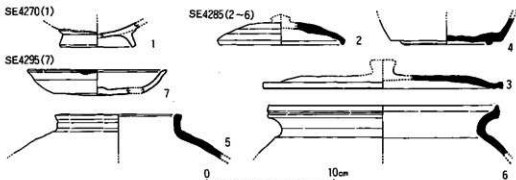


Fig.25 SE4270・4285・4295出土土器実測図 (1/3)

大碗 c (2) 高くやや外方に開き気味の高台は径11.4cm。底部内面は研磨された形跡がある。

SE4290枠内出土土器 (Fig. 26, Pla. 32)

土師器

环 a (1~7) 口径13.0~15.6cm、器高3.2~3.9cm、底径7.2~9.1cmを測る。底部はヘラ切りで、ナデを施すもの(1・2)、板状圧痕が残るもの(6)などがある。体部はヨコナデで内面底部は不定方向のナデである。ただし1・2・7はヨコナデが内面底部にまで及んでいる。また、5の外底部付近には煤が付着している。すべて茶灰色乃至は茶白色系の色調を呈している。

环 d (8・9) 口径13.4・16.0cm、器高4.0・4.2cm、底径7.4・7.7cmを測る。体部外面の下半から底部にかけては回転ヘラケズリ、他はヨコナデである。外面底部を除いた全面に回転ヘラミガキ(ミガキ a)が施される。

碗 c (10) 口径18.1cm、器高7.1cm、高台径9.0cmを測る。体部外面の下半から底部にか

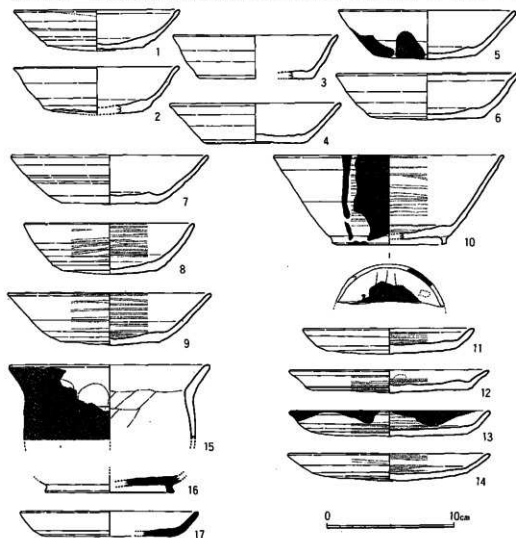


Fig. 26 SE4290枠内出土土器実測図 (1/3)

て回転ヘラケズリ、内面底部はナデ、他はヨコナデである。外面底部以外にはミガキ a が施される。また外面底部には焼成後に練刻があり、墨痕が付着している。墨痕は体部外面を下から上に向かって流れているような状況が観察され、土器を伏せて高台内に少量の墨を入れ、高台部分で筆を馴染らしたことにより外面に流れたのではないかと想定できる。

皿 a (11~14) 口径13.5~16.0cm、器高1.8~2.2cmを測る。外面の体部中程から底部にかけては回転ヘラケズリ、体部はヨコナデである。11の外面を除いて体部にはミガキ a が施される。13の口縁部付近には煤が多量に付着している。

壺 (15) 口径15.8cm。外面には多量の煤が付着している。

須恵器

環 c (16) 高台径10.1cm。底部はヘラ切りされる。

皿 a (17) 口径14.0cm、器高2.0cm。底部はヘラ切りされる。

SE4290掘り方出土土器 (Fig. 27, Pla. 33)

土師器

蓋 a 3 (3) 口径16.4cm、器高2.0cm。天井部は回転ヘラケズリで、内面にはミガキ a とみられる痕跡がわずかに認められる。

環 d (4) 口径16.2cm、器高4.0cm、底径7.8cmを測る。全面にわたって回転ヘラミガキ (ミガキ a) が施される。

須恵器

蓋 3 (5) 口径14.0cm。天井部はヘラ切りのち粗いナデである。

椀 (6) 口径16.0cmに復原される。体部の調整はヨコナデである。

SE4295出土土器 (Fig. 25, Pla. 31)

土師器

環 a (7) 口径11.0cm、器高2.0cm、底径6.8cm。底部はヘラ切りされる。口縁端部に煤が付着している。

SK4257出土土器 (Fig. 28, Pla. 33)

土師器

小皿 a (1) 口径7.0cm、器高1.1cm、底径5.0cm。底部は糸切りである。

環 a (2・3) 口径13.4・14.0cm、器高2.5・2.6cm、底径9.1・9.6cm。底部は糸切りされる。

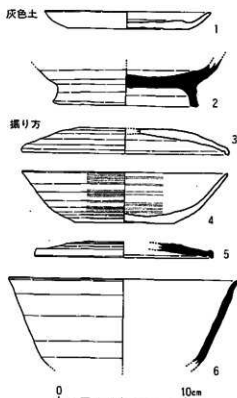


Fig. 27 SE4290灰色土・掘り方出土土器実測図 (1/3)

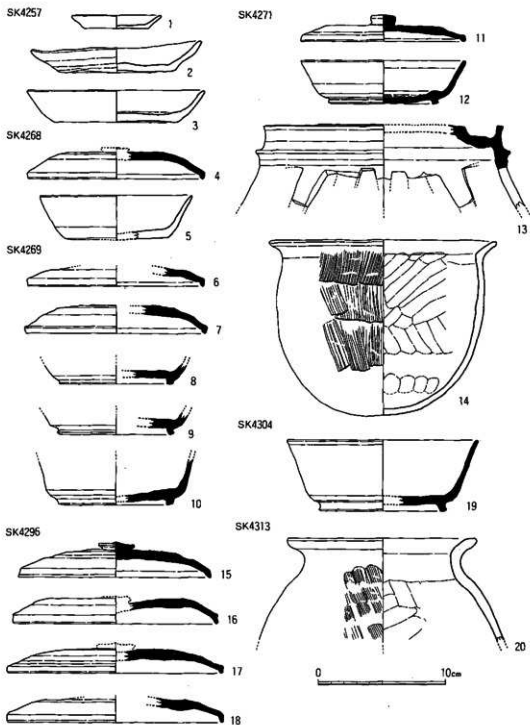


Fig.28 SK4257・4268・4269・4271・4296・4304・4313出土土器実測図(1/3)

2には板状圧痕が残る。

SK4268出土土器 (Fig.28、Pla.33)

須恵器

蓋 3 (4) 口径14.0cm。天井部はヘラ切りされる。調整痕跡から摘みの付く資料とみられる。
土師器

環 a (5) 口径12.0cm、器高3.5cm、底径8.1cm。

SK4269出土土器 (Fig.25, Pla.33)

須恵器

蓋 3 (6・7) 口径14.0・14.4cm。7の天井部は回転ヘラケズリされる。

環 c (8~10) 高台径8.8~9.2cm。底部はヘラ切りである。

SK4271出土土器 (Fig.28, Pla.34)

須恵器

蓋 c 3 (11) 口径13.0cm、器高2.1cm。天井部は回転ヘラケズリされ、ボタン状の摘みが付く。

環 c (12) 口径13.0cm、器高3.4cm、高台径8.7cm。底部はヘラ切りされる。

円面硯 (13) 山部径12.8cm、海部外周径18.8cm。山部の上面は研磨されている。脚はやや外方に開き気味で縦方向の透かしがある。

SK4271下層出土土器 (Fig.28, Pla.34)

土師器

壺 (14) 口径18.0cm、器高13.9cm。外面は縦方向のハケ目、内面はヘラケズリである。内面の底部には指圧痕が多数残っている。

SK4266出土土器 (Fig.28, Pla.34)

須恵器

蓋 c 3 (15~17) 口径15.1~17.0cm。15の天井部はヘラ切りされ、宝珠形の摘みが付く。16・17は調整痕跡から摘みが付く資料と判断され、いずれも天井部は回転ヘラケズリである。

蓋 3 (18) 天井部は回転ヘラケズリである。

SK4304出土土器 (Fig.28, Pla.34)

須恵器

環 (19) 口径15.0cm、器高5.6cm、高台径10.0cm。底部はヘラ切りされる。

SK4313出土土器 (Fig.28)

土師器

壺 (20) 口径15.0cm。外面は縦方向のハケ目、内面はケズリである。

SD4258出土土器 (Fig.29, Pla.35)

肥前系染付

皿 (1) 高台径4.0cm。軸は暗白灰色に発色するが、体部下半以下には施釉されない。見込みは幅1.4~1.7cmで円形に軸を欠き取る。

SD4262出土土器

(Fig. 29, Pla. 35)

須恵器

蓋 3 (2~4) 口径
10.4~14.2cm。天井部の
調整は2がヘラ切りのち
粗いナデ、3・4は回転
ヘラケズリである。4は
調整痕跡から擴みが付く
資料とみられる。

SD4276出土土器

(Fig. 29, Pla. 35)

須恵器

坏 c (5) 口径14.0cm、器高5.0cm、高台径9.6cm。底
部はヘラ切りである。

SD4282出土土器 (Fig. 29)

須恵器

蓋 3 (6) 口径14.0cm。天井部は回転ヘラケズリである。

SD4292黄褐色土層出土土器 (Fig. 30, Pla. 35)

土師器

坏 a (1) 口径13.6cm、器高3.2cm、底径8.4cm。底部
はヘラ切りされる。

須恵器

坏 c (2) 口径14.2cm、器高5.0cm、高台径9.1cm。底
部はヘラ切りされる。

甕 (3) 高台径10.0cm。底部は制作時に薄くなりすぎたためか粘土を補足して補修してお
り、外面ではナデにより丁寧に消されているが、内面ではその痕跡が明瞭である。

SD4292砂層出土土器 (Fig. 31・32, Pla. 35・36)

土師器

坏 d (1) 口径15.1cm、器高3.6cm、底径7.1cmを測る。体部下半から底部は回転ヘラケズ
リで、体部外面から内面底部にかけてミガキ a を施す。

小鉢 (22) 手捏ねで作られたミニチュアで、外面には指圧痕が明瞭に残る。口径4.0cm、
器高2.6cm。

須恵器

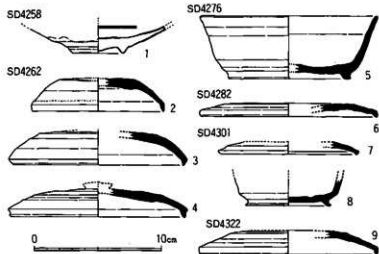


Fig. 29 SD4258・4262・4276・4282・4301・4322
出土土器実測図 (1/3)

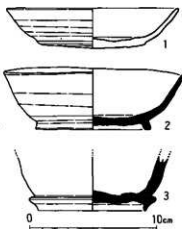


Fig. 30 SD4292黄褐色土層
出土土器実測図 (1/3)

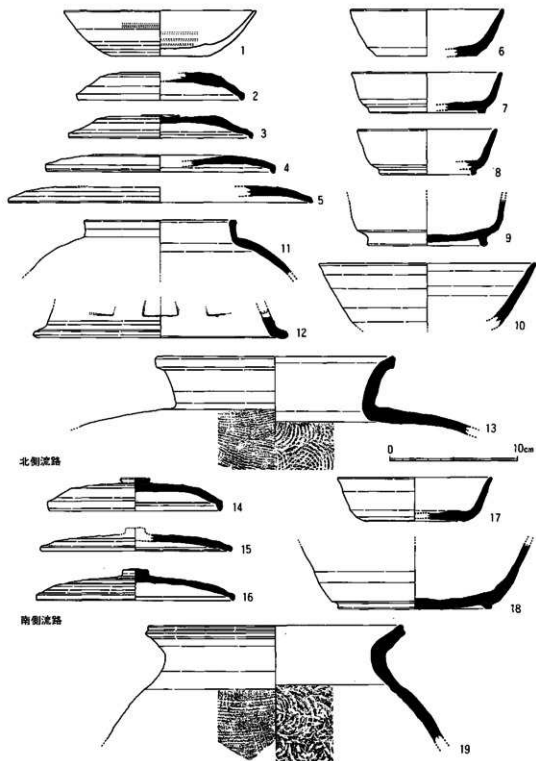


Fig.31 SD4292砂層出土土器実測図1 (1/3)

蓋 3 (2・4・5) すべて天井部は回転ヘラケズリされる。2の内面は研磨され、硯に転用されていたことが窺える。

蓋 c 3 (3) 口径14.4cm、器高1.8cm。押しつぶされた形状の摘みが付く天井部は、回転ヘラケズリされる。

環 a (6) 口径12.0cm、器高3.7cm、底径7.8cm。底部はヘラ切りののち粗いナデである。

環 c (7~9) 底部はヘラ切りされる。

環 (10) 口径7.1cm。体部はヨコナデである。

短頸壺 (11) 口径12.0cm。体部はヨコナデされる。

甕 (13) 口径18.0cm。体部外面は平行叩き目、内面は同心円状の当て具痕跡が残る。

円面硯 (12) 脚端部径20.0cm。脚部に縦方向の透かしがある。

弥生土器

壺 (20) 口径20.0cm。口縁部は粘土の貼り足しによって肥厚させる。胎土には多量の砂粒が含まれている。風化が著しく調整不明。

甕 (21) 口径22.0cm。胎土には多量の砂粒が含まれている。風化が著しく調整不明。

両者とも板付式とみられる。

SD4292北側流路砂層出土土器 (Fig.31、Pla.36)

須恵器

蓋 c 3 (14~16) 口径13.6~15.6cm。14は扁平な宝珠形摘みが付き、天井部は回転ヘラケズリされる。15は内面が研磨されており、硯に転用されていたものとみられる。16はボタン状の摘みを有し、天井部はヘラ切りののち粗いナデである。

環 a (17) 口径12.2cm、器高3.4cm、底径7.9cm。底部はヘラ切りされる。

碗 c (18) 押しつぶされた形状の高台の径は12.2cm。体部下半は回転ヘラケズリ。底部はヘラ切りののち粗いナデである。底部に「×」のヘラ記号がある。

SD4292南側流路砂層出土土器 (Fig.31)

須恵器

甕 (19) 口径20.4cm。体部外面は平行叩き目、内面は同心円状の当て具痕跡が観察される。

SD4301出土土器 (Fig.29)

須恵器

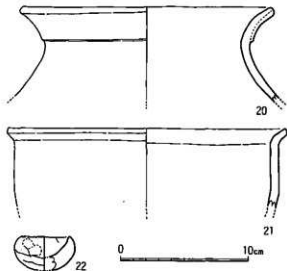


Fig.32 SD4292砂層出土土器実測図 2 (1/3)

蓋 3 (7) 口径11.0cm。天井部は回転ヘラケズリされる。

環 c (8) 外方へ踏ん張った形状の高台は、径6.8cm。

SD4322出土土器 (Fig.29)

須恵器

蓋 3 (9) 口径14.0cm。天井部は回転ヘラケズリされる。

SX4264出土土器 (Fig.33、Pla.37)

須恵器

大蓋 1 (1) 口径24.1cm、現存器高3.2cm。天井部は回転ヘラケズリされ、内面は不定方向のナデ、他はヨコナデである。

SX4266出土土器 (Fig.33、Pla.37)

土師器

環 a (2~6) 口径12.9~14.0cm、器高2.4~2.8cm、底径8.0~9.4cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕がみられる。

SX4272出土土器 (Fig.33)

土師器

小皿 a (7) 口径7.2cm、器高1.5cm、底径4.9cmを測る。底部は糸切りである。

SX4279出土土器 (Fig.33、Pla.37・38)

須恵器

蓋 a 3 (8) 口径11.7cm、器高0.9cm、天井部径7.9cmを測る。天井部外面は回転ヘラケズリされる。

蓋 c 3 (9~11) 口縁端部は明瞭な三角形を呈し、やや押しつぶされた形状ながら宝珠形の摘みが付く。9・10の天井部は回転ヘラケズリ、11はヨコナデである。

環 c (12~14) 外方へ踏ん張った高台を有し、底部外面はすべてヘラ切りののち粗いナデが施される。14にはヘラ記号がある。

皿 c (15) 口径16.4cm、器高3.5cm、高台径11.7cmを測る。底部はヘラ切りののち粗いナデである。

甕 (16) 口径20.0cmで、外面は平行叩き目、内面には当て具痕跡が認められる。

SX4306出土土器 (Fig.33)

須恵器

環 c (17) 高台径9.9cm。体部はヨコナデである。

SX4307出土土器 (Fig.33、Pla.38)

須恵器

蓋 c 3 (18・20) 口径14.4・19.6cm、器高4.4・1.8cmで宝珠形の摘みが付く。天井部はヘラ切りされる。

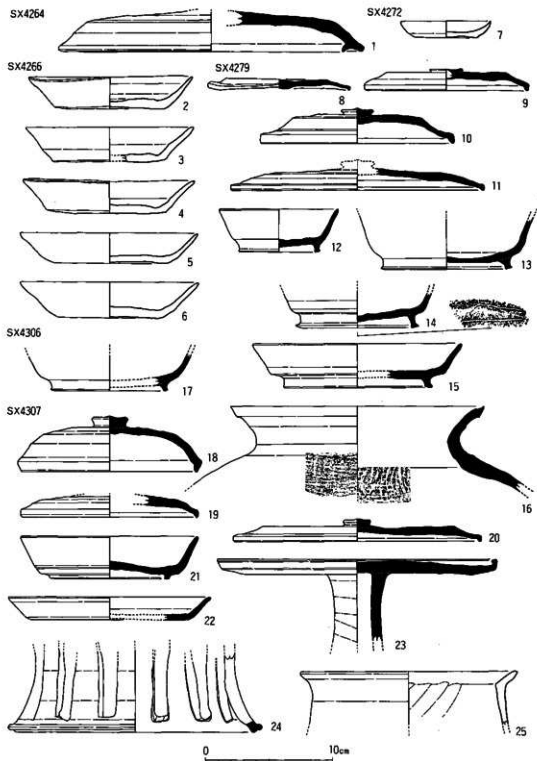


Fig.33 SX4264 · 4266 · 4272 · 4279 · 4306 · 4307出土土器実測図 (1/3)

蓋 3 (19) 口径14.0cm。天井部は回転
ヘラケズリされる。

坏 c (21) 口径14.0cm、器高3.4cm、
高台径9.4cm。底部内面は研磨された状況
が観察され、転用硯の可能性が考えられる。

皿 a (22) 口径16.0cm、器高1.8cm、
底径12.4cmを測る。底部はヘラ切りされる。

高坏 (23) 口径22.0cm、脚部径3.7cm
前後。坏部裏面は回転ヘラケズリされる。

円面硯 (24) 脚端部径20.0cm。脚部には
縦方向の透かしがある。透かしの幅は
1.0~1.5cm程度で、ヘラにより成形される。

土師器

壺 (25) 口径17.0cm。体部内面はヘラ
ケズリである。この資料のみ遺構底部に検
出されたピットから出土した。

SX4308出土土器 (Fig.34, Pla.39)

須恵器

坏 c (26) 口径14.0cm、器高5.3cm、
底径9.0cmを測る。体部はヨコナデで仕上
げられる。

SX4309出土土器 (Fig.34)

須恵器

坏 a (27) 口径14.0cm、器高3.9cm、
底径8.4cm。底部はヘラ切りののち粗いナ
デである。

SX4311出土土器 (Fig.34)

須恵器

壺 (28) 外面はかなり細かな斜め方向
のハケ目で、内面には当て具の痕跡が残る。

SX4312出土土器 (Fig.34)

須恵器

蓋 3 (29) 口径14.0cm。天井部は回転ヘラケズリ調整される。

SX4317出土土器 (Fig.34)

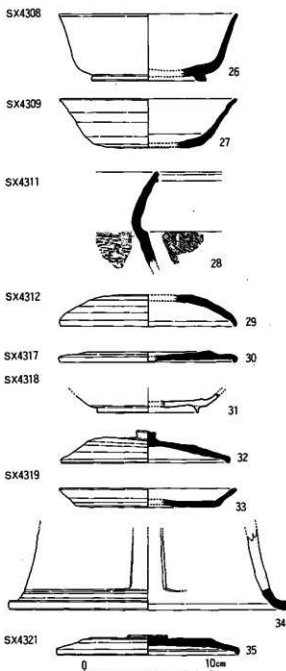


Fig.34 SX4308・4309・4311・4312・4317・
4318・4319・4321出土土器実測図 (1/3)

須恵器

蓋 a 3 (30) 口径14.2cm、器高0.8cmで天井部はヘラ切りののちナデを施す。

SX4318出土土器 (Fig.34、Pla.39)

土師器

坏 c (31) 高台径8.0cm。風化が著しく調整は明らかではない。

須恵器

蓋 c 3 (32) 口径13.4cm、器高2.6cmでボタン状の摘みが付く。天井部はヘラ切りののちナデを施す。

SX4319出土土器 (Fig.34)

須恵器

皿 a (33) 口径14.0cm、器高1.4cm、底径11.2cmで、底部はヘラ切りされる。

円面碗 (34) 脚端部径22.0cmで、脚部に縦方向の透かしがある。

SX4321出土土器 (Fig.34、Pla.39)

須恵器

蓋 c 3 (35) 口径14.4cm、器高1.6cmで天井部に押しつぶされた宝珠形の摘みが付く。天井部は回転ヘラケズリである。

茶灰色土層出土土器 (Fig.35・36、Pla.39~41)

須恵器

蓋 c 1 (1) 口径13.6cm。天井部はカキ目調整され、ヘラ記号がある。

蓋 c 3 (2~5) 口径14.0~16.0cm、器高2.5~3.0cmで、端部を三角形にする。天井部外面は回転ヘラケズリ、同内面は不定方向のナデ、他はヨコナデである。4以外には押しつぶされたような宝珠形摘みが付く。4の天井部には「|」のヘラ記号がある。

蓋 (6・7) 6は摘みの上部に墨書があり「甲」と記される。天井部外面は回転ヘラケズリ。7は端部が長めの三角形を呈するもので、天井部外面はヘラ切りののち粗いナデを施す。

坏 a (8) 口径12.4cm、器高3.5cm、底径8.0cm。底部はヘラ切りののちハケ目状のナデが観察される。

坏 c (9~13) 口径10.8~15.4cm、器高3.9~5.6cm、高台径6.3~9.0cmを測る。高台は小さく押しつぶされたものが多く、底部はヘラ切りで終わるものが多い。

碗 c (14) 外方に踏ん張った形状を呈する高台は径10.0cm。

皿 a (15) 口径13.0cm、器高1.2cm、底径10.0cmで、底部はヘラ切りされる。

壺蓋 (16) 口径14.8cm、器高4.3cm、天井部径13.0cmを測る。宝珠形の摘みを有し、天井部外面は回転ヘラケズリされる。

壺 (17) 胴部最大径13.0cm、高台径8.0cmを測る。胴部中位はカキ目調整、下半は回転ヘラケズリである。

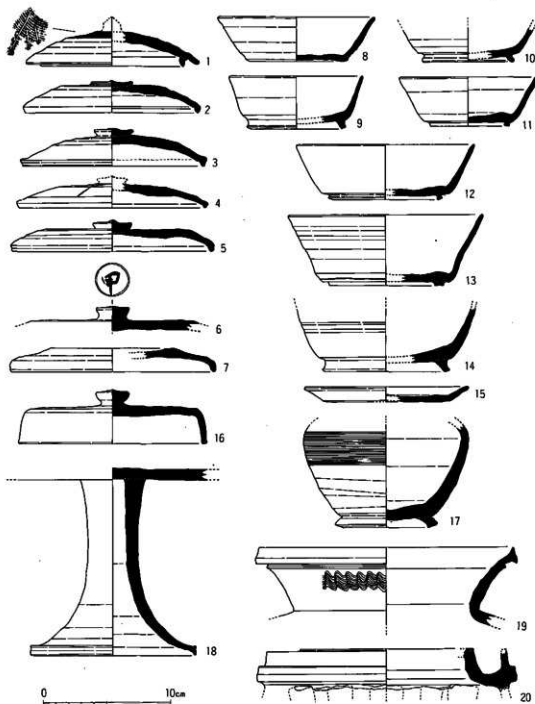


Fig.35 茶灰色土層出土土器実測図 (1/3)

高坏 (18) 現存高14.8cm、脚端部径13.0cmを測る。坏部の底部は回転ヘラケズリ、脚部はヨコナデである。

甕 (19) 口径20.0cm。口縁部側面に波状文を施す。

円面碗 (20) 山部の径13.6cm、海部外径18.8cm。脚部には縦方向の透かしがある。

土師器

蓋 c (21) 径5.4cmを測る大型の摘み部分である。

小皿 (22) 口径9.9cm、器高1.3cmで底部はヘラ切りされる。口縁端部をわずかにつまみ上げている。

坏 c (23) 大きく外方に反る高台は径9.2cm。

丸底坏 c (24) 口径13.6cm、器高4.7cm、高台径5.6cm。内面はミガキ b 調整がみられる。

製塩土器

焼塩壺 (25~27) いずれも円錐形を呈するもので、口径10.0~13.0cmを測る。3点とも風化が著しく調整は明瞭でないが、外面にはわずかに指圧痕が観察される。II b 類。

龍泉窯系青磁

椀 (28) 高台径6.3cm。見込みにヘラによる文様がある。I 類。

肥前系青磁

皿 (29・30) 29は、口径12.8cm、器高3.4cm、高台径5.4cmを測る。見込みは円形に軸を欠き取り、重ね焼きの痕跡が認められる。軸は厚めながら高台部分にはかからない。淡白灰色に発色する。波佐見窯で大量に焼かれた粗製品と思われる。30は暗緑茶色に発色する軸で光沢がある。見込み部分は円形に軸を欠き取っている。

緑釉陶器

椀 (31) 高台径9.0cm。土師質に焼成され風化が著しく、明緑白色に発色する釉の剥落は激しい。

李朝陶器

椀 (a) 高台径5.0cm。見込みに大型の目跡が残る。軸は残存部分の全面に施され、淡白黄色に発色する。李朝期の雑釉陶器とみられる。

土製品

紡錘 (32・33) 直径4.4・4.8cm、厚さ1.0・0.9cm。中心部に直径0.4・0.7cmの穿孔がある。

淡茶色粘質土層出土土器 (Fig.36)

土師器

坏 a (34・35) 口径13.0cm、器高2.2・2.4cm、底径10.2・10.0cm。風化が進行し明瞭ではないが底部は糸切りの可能性が高い。

茶灰色粘土層出土土器 (Fig.36, Pla.41)

須恵器

蓋 a 3 (36・37) 口径10.0・14.0cm、器高1.7・2.1cmで、天井部は36がヘラ切り未調整、37が回転ヘラケズリである。

蓋 c 3 (38) 口径14.0cmで調整痕から摘みがつくものと推定される。天井部は回転ヘラケズリである。

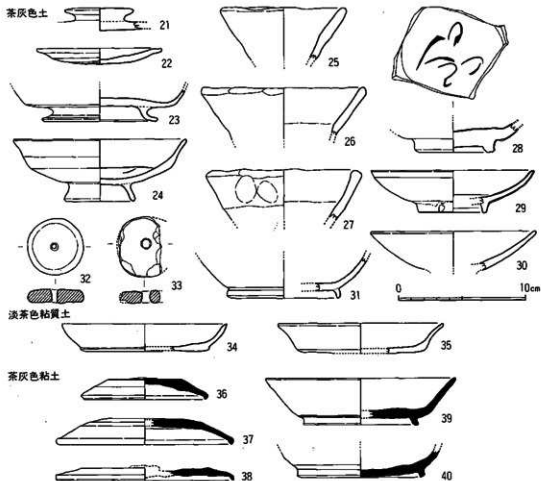


Fig.36 茶灰色土層・淡茶色粘質土層・茶灰色粘土層出土土器実測図 (1/3)

坏c (39・40) 口径15.0cm、高台径9.0・10.0cm。底部はヘラ切りののち粗いナデを施す。

褐灰色粘質土層出土土器 (Fig.37・38、Pla.42~44)

須恵器

蓋c 1 (1) 天井部中心を失うが摘みを有しないものと判断した。口径12.8cm、器高1.0cmで、天井部はヘラ切りののちナデを施す。

蓋c (2・3) 口径17.0・17.6cm、2は天井部を回転ヘラケズリし、3はヘラ切りののちヨコナデを施す。

蓋c 3 (4~9) 口径14.8~18.0cm、器高1.5~3.4cmを測る。天井部は5のみ回転ヘラケズリ、他はヘラ切りののち粗いナデである。4・6にはボタン状の、7・8には宝珠形の摘みが付く。

坏a (10・12) 口径10.8・12.6cm、器高2.7・3.2cm、底径6.8・7.7cm。底部はヘラ切りされ、10には蓮華状の文様が墨書される。

坏d (11) 口径14.0cm、器高2.3cm、底径8.5cmを測る。外面の底部から体部中程までは回転ヘラケズリ、他はヨコナデである。

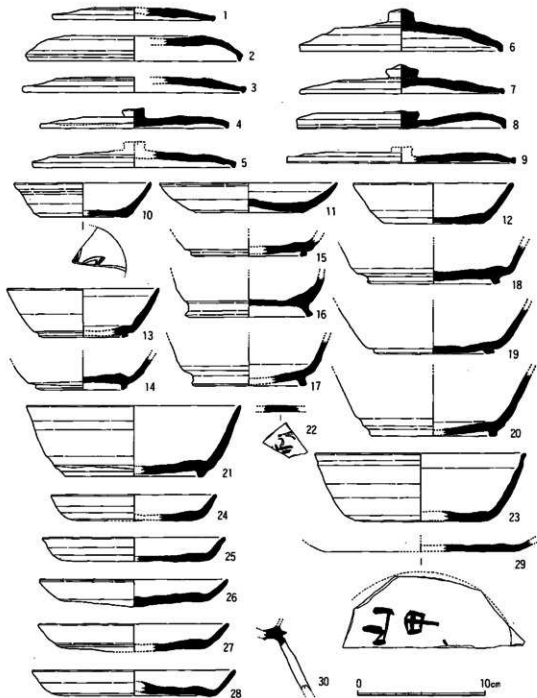


Fig.37 褐色粘質土層出土土器実測図1 (1/3)

坏c (13~21) 16は外方に踏ん張るような高台を有するが、他は押しつぶされたような小さめの高台である。底部はすべてヘラ切りである。

坏(22) 底部片で、外面に墨書がある。判読はできないが図の左側が上になる文字であろう。

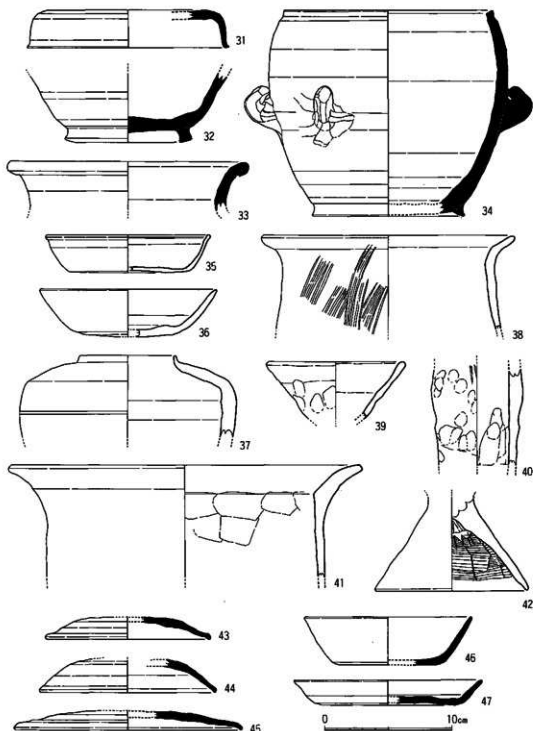


Fig.38 褐灰色粘質土層出土土器実測図2 (1/3)

碗 a (23) 口径16.6cm、器高5.4cm、底径10.5cm。底部はヘラ切りされる。

皿 a (24~29) 24~28は口径13.0~16.0cm、器高1.9~2.2cmで、底部はヘラ切りされる。
29は底径15.2cmとやや大型で、外面に墨書がある。「山」「甲」と判読されるが他にも文字はあつ

たようである。

円面硯 (30) 小片で脚部に透かしがある。透かしと透かしの間は2.5cmである。

壺蓋 (31) 口径16.0cm。天井部は回転ヘラケズリされる。

壺 (32) 高台径10.0cm。体部外面は回転ヘラケズリされる。

甕 (33) 口縁部の資料で、口径19.0cm。

鉢 (34) 平底を呈する底部と胴部の境目付近に小さな高台を有し、胴部最大径を有する付近に把手を付ける。胴部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は内傾する。口径16.5cm、器高16.3cm、高台径12.0cm、胴部最大径18.8cm。胴部外面下半は回転ヘラケズリ、他はヨコナデである。

土師器

坏 a (35・36) 35は口径13.0cm、器高3.0cmで、口縁部内面に一条の沈線が巡る。表面は風化し、調整は明らかではない。36は口径14.0cm、器高3.8cm。表面は風化し、調整は明らかではない。

壺 (37) 口径7.6cm、胴部最大径17.1cmを測る短頸壺である。調整は残存部分すべてでヨコナデである。

甕 (38・41) 口径20.0・28.0cm。38の外面は縦方向のハケ目である。

高坏 (42) 脚端部径12.2cmの古式土師器である。

製塩土器

焼塩壺 (39・40) 39は鉢型を呈するもので口径11.0cm。外面には指圧痕がみられる。II b類。40は長胴型で外面には指圧痕、内面は布目痕がわずかに残る。I類。

以下の資料は同じ褐灰色粘質土出土資料であるが、SE4295の掘り方確認のために開けたトレンチの西側部分から出土したもので、一応分けて報告する。

須恵器

蓋 3 (43~45) 端部

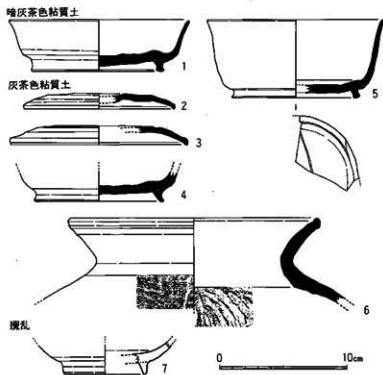


Fig.39 暗灰茶色粘質土層・灰茶色粘質土層・攪乱出土土器実測図 (1/3)

は三角形に作るがいずれも丸みを帯び体部と口縁部の境目は不明瞭である。口径13.0~18.0cm。

坏 a (46) 口径13.2cm、器高3.8cm、底径8.8cmを測る。

皿 a (47) 口径14.8cm、器高2.0cm、底径10.4cmで、底部はヘラ切りされる。

暗灰茶色粘質土層出土土器 (Fig.39、Pla.45)

須恵器

坏 c (1) 口径14.2cm、器高4.1cm、底径10.5cm。

灰茶色粘質土層出土土器 (Fig.39、Pla.45)

蓋 3 (2・3) 口径12.0・14.0cm。天井部は2がヘラ切りのちナデ、3が回転ヘラケズリである。

坏 c (4・5) 5はやや深めのもので、口径14.0cm、器高6.2cm、底径10.0cm。外面底部にヘラ記号がある。

壺 (6) 口径19.9cm。外面は平行叩き目、内面は当て具痕跡が明瞭である。

攪乱出土土器 (Fig.39、Pla.45)

灰釉陶器

碗 (7) 復原高台径4.7cm。内外面ともにヨコナデで仕上げられる。外面の残存部分には釉が観察されないが、内面には剥落が著しいが暗灰茶色に発色する釉が施される。

表土出土遺物 (Fig.40・41、Pla.45)

土製品

人形 素焼きの人形で獅子頭とみられる。現存高3.3cm、幅4.2cm、厚さ3.8cmを測る。顔面は剝離し、鼻と思われる微かな盛り上がりと目と口の部分だけが深いためわずかにその位置を確認できる。顔の両側面には抉り込みがあり、棒状の粘土紐が差し込まれており、耳を装着した痕跡と考えられる。内部は1.1×1.4cm、深さ2.5cmの中空になっている。頭部背後と後頭部の境目付近に型の継ぎ目があったものと思われる。焼成は良好で土師質ながら硬質に焼きあが

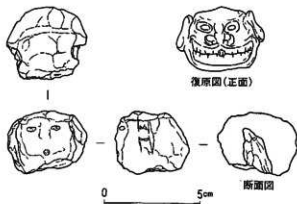


Fig.40 表土出土人形実測図 (1/2)



Fig.41 人形復原図

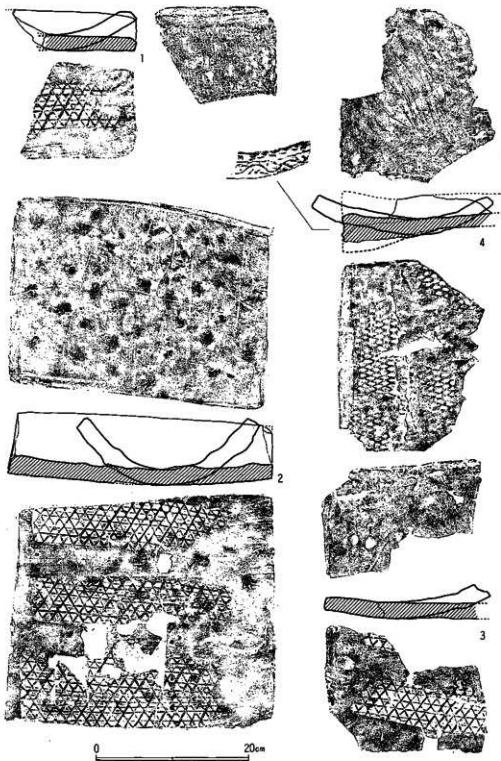


Fig.42 SE4270出土瓦実測図・拓影 (1/5)

り、淡黄褐色を呈している。胎土は砂粒をほとんど含まない緻密なもので、赤色粒を若干含んでいる程度である。中の子型「獅子かつぎ」の手先に乗る獅子の頭部とみたい。

瓦類

SE4270出土瓦

(Fig.42, Pla.46)

平瓦 (1~3)

すべて凸面の叩き目は同じもので、斜格子にその対角線を通する直線を引いたもので、一見三角形の連続した文様に見えるものである。2は破片として遺構の周囲に配置されていたものだが一個体に接合できた。資料自体は大きく湾曲した不良品である。

軒平瓦 (4)

右から左へ流れる偏行唐草文で、

上外区には珠文帯、下外区には鋸齒文があったとみられるが、頸部が剝離しているため残存していない。平瓦凸面には斜格子の叩き目が残る。瓦当面との接合は平瓦小口部分を取り先端を尖らせた上で、薄く粘土を敷いた瓦当范にその先端部を押し当て凹凸両面に粘土を補足して製作するもので、包み込み技法と呼ばれるものとみられる。凸面には叩き目が残るが、その上から横方向の擦痕を付け粘土の吸着度を上げている。凹面ではその形跡はないが、支持土の表面は不定方向のナデによって仕上げられている。安楽寺跡、観世音寺などに出土例がある。

SE4290出土瓦 (Fig.43・44, Pla.46)

平瓦 (1~4) 縄叩き目で、粘土板切り離しの際の糸切り痕が明瞭に観察できる。すべて

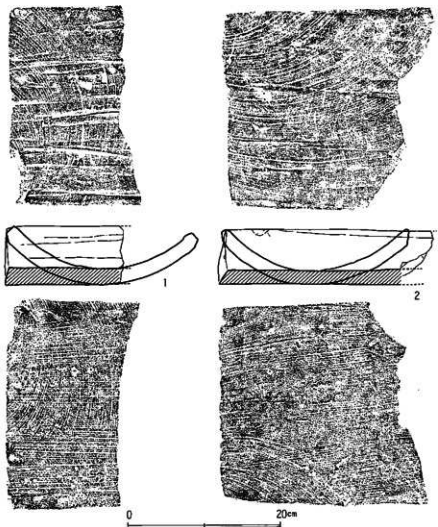


Fig.43 SE4290出土瓦実測図・拓影1 (1/5)

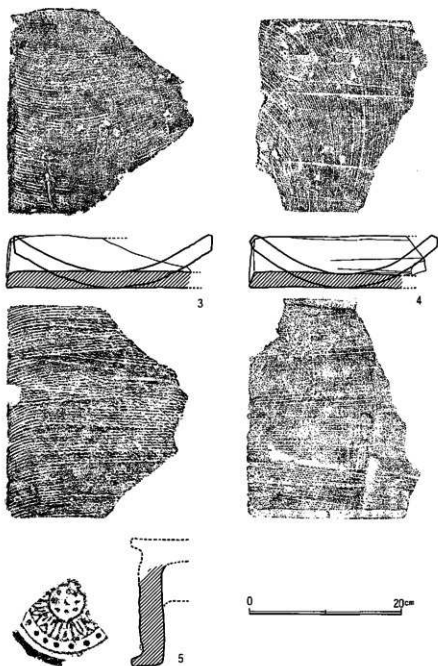


Fig.44 SE4290出土瓦実測図・拓影2 (1/5)

井戸の底部に敷かれていたものである。

軒丸瓦 (5) 細単弁蓮華文で21弁に復原できる。中房には1+8の蓮子を配し、外区には珠文帯を巡らす。

その他の地点出土瓦 (Fig.45・46、Pla.46・47)

軒丸瓦 (1) 複弁蓮華文で鴻臚館式。SD4292出土。

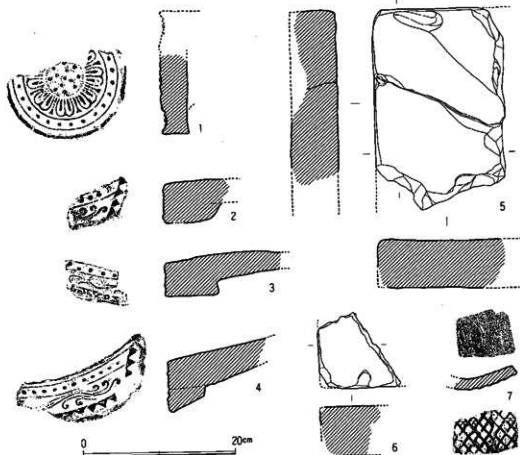


Fig.45 第170次調査出土瓦実測図・拓影(1/5)

軒平瓦(2~4) 2は老司I式、4は老司II式で茶灰色土層出土。3は偏行唐草文で攪乱出土。

無文埴(5・6) 5は残存長26.5cm、幅17.1cm、厚さ6.2cmを測る。風化のため調整は明らかではない。茶灰色土層出土。6は厚さ6.5cm。SD4258出土。

平瓦(7) 斜格子の叩きを有するもので、SE4295出土。

文字瓦(8~10)

8は「佐」でSX4316出土。9は「平井」で暗茶灰色土層出土。10は「安楽之寺」を縦線で消去したもので褐色粘質土層出土。ただし時

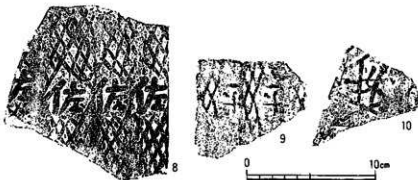


Fig.46 第170次調査出土文字瓦拓影(1/3)

期的にみて調査段階の混入品である可能性が高い。

木製品

SE4290出土木製品 (Fig.47~52, Pla.48~52)

以下の資料は、すべて暗青灰色粘質土層から出土した。

斎串 (1~13) 1~6は、頭部近くから両側面に各1箇所づつ切り込みを入れるもので、5は頭部をほぼ平坦に作るが他は山形にする。長さ16.1~20.4cm、幅1.4~2.1cm、厚さ0.2~0.5cmを測る。7・8は、各2箇所づつ切り込みを入れるもので、7の頭部は平坦、8の頭部は山形に作られる。長さ19.3~21.6cm、幅2.1~2.0cm、厚さ0.4cmを測る。9・10・12は、上

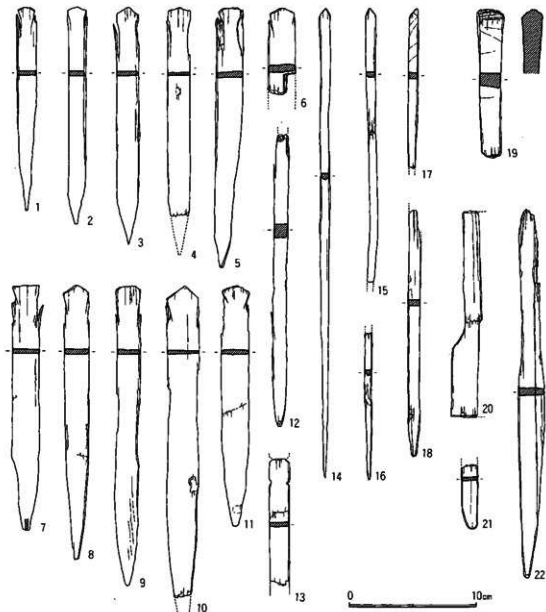


Fig.47 SE4290出土木製品実測図 (1/3)

下両面から複数箇所切り込みを入れるもので、9は頭部を平坦に作り上下両面から複数箇所切り込みを入れるもので、長さ23.6cm、幅1.9cm、厚さ0.4cmを測る。10は頭部を山形に作り上下両面から複数箇所切り込みを入れるもので、長さ24.6cm以上、幅2.5cm、厚さ0.3cmを測る。11は頭部から下に向かって3箇所以上の切り込みを入れるもので、頭部は山形に作られる。長さ19.0cm、幅2.2cm、厚さ0.4cmで両端がやや薄くなる。12は方柱状を呈し上下両面から複数箇所切り込みを入れるもので、頭部は欠失している。現存の長さ23.0cm、幅1.1cm、厚さ1.1cmを測る。13は両側面から三角形の切り込みを複数箇所入れるもので、頭部及び末端部分を失っている。現存長9.9cm、幅1.6cm、厚さ0.3cmを測る。

角柱状木製品 (14~18) 14は長さ37.0cm、最大幅0.9cm、厚さ0.5cm内外で頭部を山形に作り、一面のみ平坦にし他の面はケズリにより面取りされた状態のままである。15は下半部を失うが14と同じものとみられる。現存長21.6cm、幅0.8cm、厚さ0.4cm。16は末端部分の資料で、やはり14と同じ性格のものともみられるが、15とは別個体ともみられる。現存長11.6cm、幅0.5cm、厚さ0.5cm。17は、現存長12.6cm、幅0.8cm、厚さ0.5cmを測る。下半部を失っているが、先端は鋭利に削られる。18は頭部を失っている資料で畜串の可能性も残される。現存長19.4cm、幅0.9cm、厚さ0.5cm。

用途不明木製品 (19~22) 19は厚めの方柱状を呈し、両端は切断された状態のままである。長さ11.7cm、最大幅2.1cm、厚さ1.1cm。20は加工痕跡のある板状製品で、上下両端は切断された状態のまま、図の左側面はケズリによって成形されている。図の右側面は破損面である。長さ16.2cm。21は薄い板状を呈するもので、現存長5.1cm、幅1.3cm、厚さ0.2cm。22は下半部に比べて上半部の残存状況がわるく、もとの形状を知り得ないが畜串の可能性も残される資料である。現存長29.3cm、幅2.1cm、厚さ0.6cm。

印章 (23) 印面は3.1×3.4cm。高さ8.9cmを測る。頂部は3面から削り込んで切断した痕跡を残したままで、すべての側面も印面に近い部分を除いて粗い削り調整のままである。印面は平滑で磨滅が少なく、文字の隙間にも印内の残存は認められない。印面の文字は捺印した状態で右から読むものとすれば「直嶋」と判読できる。この印章は未使用とみられ、朱肉は残存していなかった。また、鈕の成形がほとんどなされていないことを考えると未製品の可能性が高い。なお、文字の判読については付編を参照されたい。

井戸杵部材 (24~51) 24~40の多くは樹皮を剝いて新割り製の要領で製作した井戸杵である。残存する下端部分は材木を切り出した折りの工具痕跡が明瞭に残り、枝の跡は簡単な

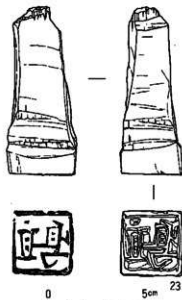


Fig.48 SE4290出土木製印章実測図 (1/2)

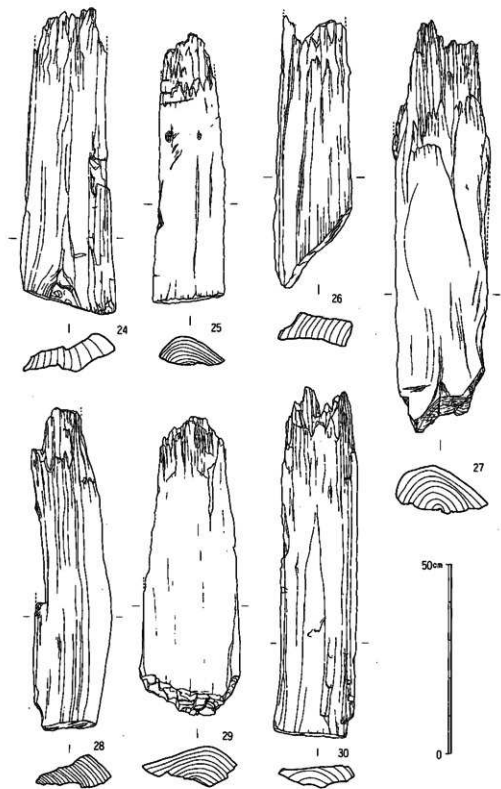


Fig.49 SE4290出土井戸部材実測図1 (1/10)

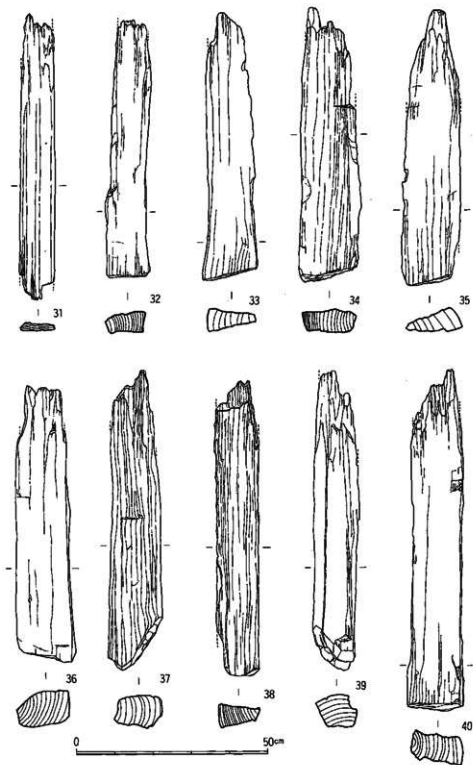


Fig.50 SE4290出土井戸部材実測図2 (1/10)

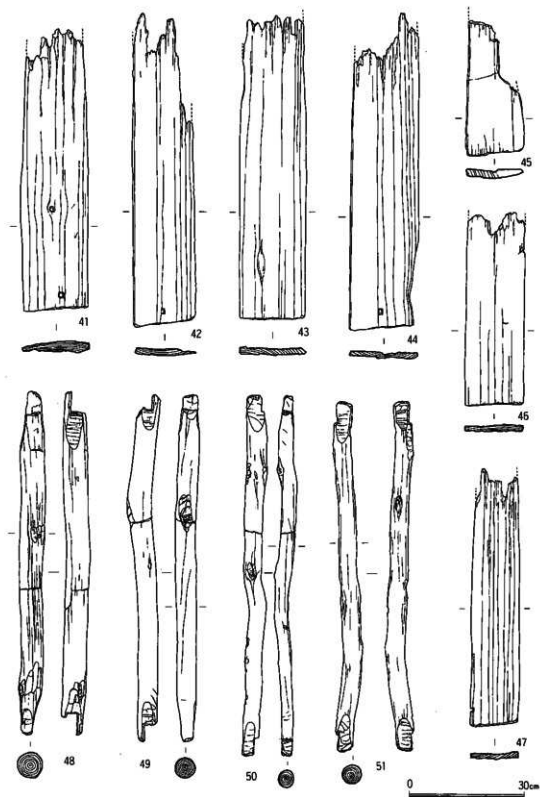


Fig.51 SE4290出土井戸部材実測図3 (1/10)

加工を施すにすぎない。各部材はうまく接合できていないが、おそらく一材を複数に割ってそのまま利用したものと推定される。41~47は薄目の板材で、41・42・44・47には1cm四方内外で方形の穿孔がある。井戸に使用するために穿ったものではなく、他の部材の転用ではないかと思われる。48~51は井戸枠を内側から支えていた横棧の部材である。直線に近い自然木を簡単に加工しただけのものであるが、48・49は両端にコ字状の切り込みを入れ、50・51は両端を削ってホゾとし、互いにかみ合う

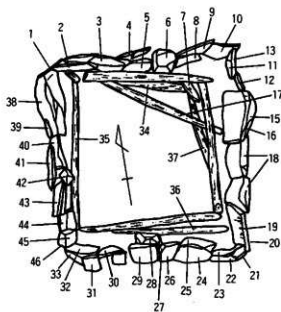


Fig.52 SE4290井戸部材取り上げ番号

ような構造となっている。なお各部材の法量はTab. 6に示している。

金属生産関係遺物 (Fig.53~55, Pla.53~56)

トリベ (1~13) 1は注口が残存する部分で、体部及び断面の外面に近い部分は暗灰色を呈している。口縁部付近は内面の一部と外面上部にわたって(注口部分に多く認められる傾向である)黒灰色のタール状の付着物があるが厚さはごく薄い。この付着物は外面で断面部分にまで及んでおり、亀裂の中に侵入したものである。また内面の口縁部からわずかに下がった部分には帯状に酸化して茶黄色を呈する付着物がみられる。断面の中央部付近の色調は部分的に明茶灰色を呈している。外面には指圧痕が認められ成形方法の一端が窺えるが、内外面ともに表面に多数の亀裂がある。胎土は1mm前後の砂粒を多く含むものである。SB4260掘り方a出土。2は体部及び断面の外面に近い部分は明灰色を呈している。口縁部内面の一部に黒灰色を呈するタール状の付着物があるが厚さはごく薄い。外面には指圧痕が認められる。断面の中央部付近の色調は部分的に明茶灰色を呈している。胎土は他の資料に比べると白色の粒子を多めに含む程度で精良である。SE4295灰褐色土層出土。3は注口が残存する部分で、体部及び断面の外面に近い部分は淡灰色、内面の底部付近は暗灰色を呈している。内面には明茶黄色の付着物があり、気泡が多くみられ、一部茶褐色に変化する部分がある。厚みも1~3mm程度と厚めである。口縁端部は部分的に明茶白色に変化する部分がある。外面には指圧痕が認められ、底部に近い部分は明茶褐色を呈している。外面には目立った付着物はないが多数の亀裂がある。胎土は1~2mm前後の砂粒を多く含むものである。SK4269出土。4は注口が残存する部分で、体部及び断面の外面に近い部分は淡灰色、内面の底部付近は暗灰色を呈している。口

緑部を巻くように暗茶褐色の付着物がごく薄く認められ、断面の一部に侵入している。口縁部と内面の変色する境目付近で部分的に酸化しており、茶黄色を呈する部分がある。外面には指圧痕が認められ、底部に近い部分は明灰茶色を呈している。外面には目立つ付着物はない。胎土は他の資料に比べると白色の粒子を多めに含む程度で精良である。SD4258出土。5は注口が残存する部分で、体部及び断面の外面に近い部分は明灰茶色、内面の底部付近は暗灰褐色を呈している。口縁部を巻くように薄い付着物があり、明茶白色を呈している。この付着物は注口の部分でやや厚みを増し、気泡が目立つようになるとともに暗茶色を呈するようになる。内面には暗黒褐色でやや厚めのタール状の付着物がある。内面の付着物の境目付近は帯状に黄茶色を呈する部分がある。外面の口縁部付近には暗黄茶色を呈する薄い付着物が認められる。断面の色調はほぼ均一に明灰茶色である。胎土は1mm前後の砂粒を多く含むものである。茶灰色粘質土層出土。6は内面にタール状の黒灰色を呈する付着物が多量に認められ、厚さも2mm前後と厚めである。この付着物は口縁部を超えて外面の上位にまで達しており、外面の一部では5mm程度の厚さになる部分もある。素地は内面では付着物で全く観察できないが、外面では上位が灰褐色（部分的に黄色味を帯びる）、下位では明灰色を呈している。断面部分の観察では明灰色を基調とするが外面のごく一部で黄茶色を呈する部分がある。胎土は砂粒が多量に含まれるもので、スサ入りである。SD4292北側流路砂層出土。7は内面にタール状の黒褐色を呈する付着物が多量に認められ、厚さも1～2mm前後と厚めで小さな気泡がみられる。この付着物は内面に顕著で外面にはほとんど及んでいない。付着物の中に混じって緑錆が認められる。素地は内面ではほとんど観察できないが、外面では口縁部付近が明茶灰色、体部中程が明茶白色、下位が黄茶白色である。胎土は口縁部付近がやや粗く2mm程度の砂粒が目立ち、その部分の色調は暗灰色を呈するのに対して、他の部分の胎土は精良で、軟質に焼成されており明茶白色を呈している。茶灰色土層出土。8は口縁部から内面全体にかけてタール状の付着物が認められるもので、一部は長さ2.5cm、厚さ1.5cmの塊となって口縁部から大きくはみ出している。この付着物が断面部分にも回り込みさらに外面の一部に及んでいる。亀裂から入り込んだものと思われる。また外面には暗緑色の小さな塊が付着している。内面の下位には茶色に酸化した付着物がある。素地は外面のみ観察が可能で、口縁部近くは暗灰色、下位は暗茶白色を呈している。胎土には白色の砂粒を多量に含んでいる。茶灰色土層出土。9は完形の資料で、口径9.5cm、器高3.5cmを測る。口縁部を中心に茶褐色の付着物が認められ、注口部分の左側で量的に多くみられ、厚さも肥圧し注口付近では多数の気泡が認められる。これに対しその対面にはまったく付着物が認められない部分が幅1.5cmにわたって存在する。さらに注口のある反対側の位置には、付着物がまだ軟らかかった段階で付いたと思われる幅0.5cmで縦方向の沈線がみられる。なお、付着物と表現しているものは大半が火熱によって土器表面が溶解したもの（p70～72参照）で、肥厚した口縁部は火熱による火彫れと判断される。また口縁部から内面にやや下がった位置で付着物の境目付近に茶赤色を呈する付着物がある。口縁部を除いた外面には

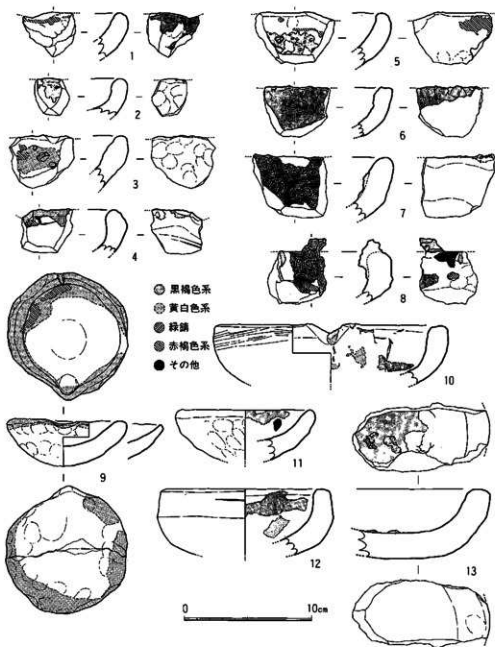


Fig.53 第170次調査出土生産用具実測図1 (1/3)

ほとんど付着物は認められない。素地は内面で暗灰色であるがわずかに褐色味を帯びている。外面では底部付近に淡灰黄色の部分の円形に存在し、その部分は軟質であるが、その周囲は暗灰色さらにその周囲は褐色味を帯びており硬質である。口縁部外面には亀裂が若干観察される。胎土は少量のスサが混じり、多量の白色粒子と1~2mm内外の砂粒を若干含むものである。成形は外面の口縁部付近に指圧痕が多く観察される。茶灰色土層出土。10は口径18.4cmに復原され、注口部分が残存している。口縁部から内面の上位にかけて茶灰色の付着物が薄く観察され、

内面体部から底部にかけて部分的に黄白色乃至は淡茶灰色の付着物がみられ、これらには小さな気泡が観察される。注口部分には黄白色のもの他に茶褐色の付着物も認められる。素地は内面で暗灰色、外面の口縁部付近は明灰色、体部中程が黄茶色、底部近くが暗茶黄色を呈している。胎土中にはスサが若干みられるほか、少量の砂粒と白色の粒子が多数含まれている。断面の観察では、大半が暗灰色でやや褐色味を帯びているが、外面の一部で暗茶黄色を呈する部分がある。暗灰色部分はかなり硬質であるが、暗茶黄色部分は軟質である。調整は指圧によっているとみられるが、口縁部の外面付近には刷毛状の工具で横方向にナデた形跡がある。SI 4305出土。11は口径11.0cmに復原できる。口縁部から内面の上位にかけて暗茶褐色の付着物が認められ、さらに部分的ながらそれに重複して酸化したと思われる明茶色の付着物がある。また体部内面に黄茶色の付着物もある。素地の色調は、内外面ともに暗灰色で内面が幾分暗く且つ褐色味を帯びている。胎土は1mm前後の砂粒を多く含むもので、全面にわたり硬質に焼成されるが、内面では全面に、外面では口縁部付近に横方向の亀裂が多数見受けられる。調整は外面に指圧痕が多数観察される。SX4314出土。12は口径13.3cmに復原される。口縁部からやや下った部分に黒灰色の付着物がみられるが、口縁端部及び外面には認められない。素地の色調は内面全体と外面口縁部の一部で暗灰色、外面の体部は明茶灰色、底部付近は明茶黄色を呈している。断面の観察では中心部分で暗茶灰色、内面及び外面側ではそれぞれの素地の色調と同じである。胎土はスサ混じりで1~2mmの砂粒を多量に含んでおり、暗灰色の部分は硬質であるが、他の部分は軟質であり風化が著しい。内面には多数の亀裂が観察される。外面の口縁部からやや下った位置に幅1mm程度で横方向の沈線がある。灰茶色粘質土層出土。13は口径14cm前後に復原できると思われる。付着物は内面底部に暗茶褐色のものが認められ、部分的に黄白色のものが見受けられる。口縁部内面上位に幅7mmほどの横方向で茶褐色に変色する部分(付着物ではなさそうである)が観察され、他の部分の内面は暗灰色(部分的に褐色味を帯びる)を基調とし硬質である。外面は口縁端部を除いた体部上位が灰茶色、底部と体部の境目付近が明茶黄色、底部は灰白色である。茶色系の部分はきわめて軟質で風化が進むが、灰色系の部分はやや硬質である。断面の色調は底部の中央付近が暗灰色、体部の中央付近が暗茶灰色で他は表面の色調に近い。ただし底部の外面は明茶黄色の部分が表面近くまであり、灰白色を呈する部分はごく薄い。胎土はスサ混じりで、内面に近い部分で大粒の砂粒が多量に含まれているが、外面では1~2mm程度の砂粒と白色粒子を多量に含んでいる程度である。SK4267出土。これ以外にもトリベの残欠はいくつかの地点で出土している(Tab. 4の「出土遺物一覧表」参照)

■ 鞠羽口(14~19) 14~16はSE4290から出土したもので、14は径7.7cmで中央に径2.6cmの穿孔がある。胎土は1~3mmの砂粒を多量に含む粗いもので、図の下位に至るほど硬質に焼きあがる。断面の色調は大半は暗灰色を呈しているが、穿孔部に近い部分は明茶白色を呈している。外面は縦方向のケズリによって成形され、表面の色調は図の上位で淡茶白色、中位で明白茶色、下位で暗灰色を呈している。15は径7.1cmで中央に径2.4cmの穿孔がある。胎土は1~3

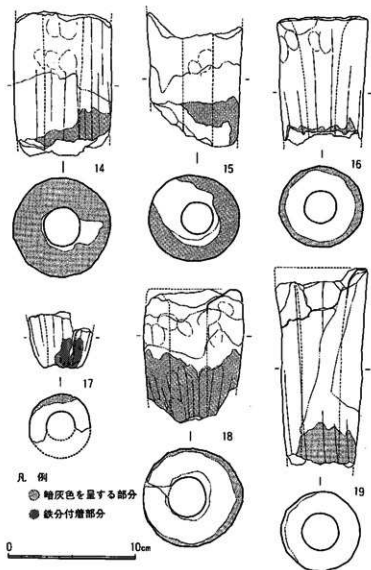


Fig.54 第170次調査出土生産用具実測図2 (1/3)

から断面中程までが明白茶色、外周に近い部分が暗灰色を呈している。外面は縦方向のケズリ（強いナデ状）によって成形され、表面の色調は図の上位で淡茶白色、中位で部分的ながら明白茶色、下位で暗灰色を呈している。17は先端部の資料で径2.0cmの穿孔がある。胎土は1～3mmの砂粒を多量に含む粗いもので、硬質に焼きあがる。断面の色調は明白茶色を呈している。表面はかなり荒れており調整の観察は不可能であるが、一部に暗茶色の付着物が観察される。表面の色調は上位で明白茶色、端部で暗灰色を呈している。SK4296出土。18は口縁部が残存するもので口径7.7cmを測る。中央には穿孔があり、口縁付近で径5.5cmほど、図の下位で径2.8cmである。胎土は1～3mmの砂粒を多量に含む粗いもので、図の下位に至るほど硬質に焼きあがる。断面の色調は下位部分の観察で、穿孔部の周囲が茶褐色、断面中程付近が明白茶色、

mmの砂粒を多量に含む粗いもので、図の下位に至るほど硬質に焼きあがる。断面の色調は大半は暗灰色を呈しているが、下位で穿孔部に近い部分は明茶白色を呈している。外面は縦方向のケズリ（強いナデ状）によって成形され、表面の色調は図の上位で淡茶白色、中位で明白茶色、下位で暗灰色を呈している。下位の先端には明白茶色の付着物がみられる。16は口縁部が残存するもので口径7.2cmを測る。中央には穿孔があり、口縁付近で径5.0cm、図の下位で径2.1cmである。胎土は1～3mmの砂粒を多量に含む粗いもので、図の下位に至るほど硬質に焼きあがる。断面の色調は下位部分の観察で、穿孔部

外周に近い部分が暗灰色を呈している。外面は縦方向のケズリ（強いナデ状）によって成形され、口縁部付近は穿孔部を広げるように削り込みがある。表面の色調は図の上位で淡茶褐色、暗茶灰色、中位に部分的ながら明白茶色、下位で暗灰色を呈している。SX4281出土。19は口縁部径7.4cmに復原できるもので、残存長15.8cmを測り、中央に径3.0cmの穿孔がある。穿孔部は口縁部付近でわずかに開いている。胎土は大粒の砂粒を多量に含むきわめて粗いもので、軟質に焼成されるため表面の風化も進んでいる。断面の色調は穿孔部付近で淡茶白色、外周付近で暗茶灰色を呈している。表面の調整は縦方向のケズリとみられるが風化が著しい。色調は遺物の観察面で異なり、風化が進む裏面は白茶色乃至は明茶黄色であるが、他の面は暗灰色である。図の下位部分は暗灰色を呈しやや硬質に焼きあがる。SK4267出土。

鋳型（20・21） 20は壺状製品の頸部ではないかと思われる鋳型で、最もくびれた部分の径は11.6cm程度に復原できる。鋳型面は風化が進行する部分では砂粒が露出しているが、基本的には肌理の細かな真土で仕上げられ、明灰色を呈している。外面は一部分が残存しているだけで詳細はわからない。胎土は大粒の砂粒を若干含み、主体は1～2mmの砂粒を多量に含む粗いものである。断面の観察では鋳型面に近い

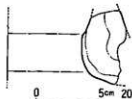
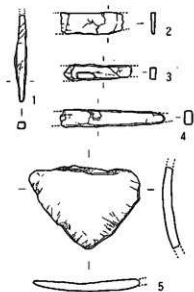


Fig. 55 第170次調査出土鋳型実測図(1/3)

位置は数mmの幅で明灰白色、中心部分が明白茶色、外面に近い部分は暗灰白色、外面が残存する部分はごくうすく淡茶褐色を呈している。SD4292南側流路から出土した。21は複数の破片化した資料ながら当初は同一個体の可能性があるものである。形状は内面とみられる部分が内湾しており、碗状の製品ではなかったかと思われる。胎土は白色で粒子状の砂粒を少量含む程度の精良なもので、内面は黒灰色、外面は暗茶黄色を呈している。軟質に焼成された土師質で風化が著しく、外面の形状も塵気に残すが、調整は観察不能である。SK4315出土。なお同類の資料がSK4296からも出土している。



鉞滓 (Pla. 56) aは不定形鍛冶滓で、長さ5.0cm、幅5.0cm、厚さ2.7cm。bは碗形滓で、長さ6.8cm、幅4.7cm、厚さ2.0cm。いずれも分析の結果鉄滓であることが判明した。両者とも茶色土層出土。

炉壁 (Pla. 56-c~e) 同一遺構内から複数の断片を検出したものの一部を提示した。資料は5～10cm程度の大きさで、内面には黒褐色の付着物が多量に認

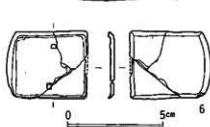


Fig. 56 第170次調査出土金属製品実測図(1/2)

められる。付着物中には胎土に含まれる砂粒がまったく同様な状態で混入しており、この付着物は炉表面が加熱によって変化した産物であることを窺わせる。すべてSB4310の柱掘り方d出土。

金属製品 (Fig.56, Pla.47)

鉄製品

釘 (1) 残存長4.6cm、幅・厚さとも0.4cmで頭部を失う。茶灰色土層出土。

刀子 (2~4) いずれも刀子の一部とみられ、21は刃部が欠失したものでSB4260掘り方j出土、3・4は柄の部分とみられ、3はSK4267、4は茶灰色土層出土。

銅製品

帯金具 (6) 長さ4.2cm、幅3.5cm、高さ0.3cm、厚さ0.2cm弱を測る鋳造製の蛇尾である。裏面の2箇所に小さな突起が残る。茶灰色土層出土。

用途不明製品 (5) わずかに湾曲した板状の製品で、大きさの割には重量がある。

石器・石製品 (Fig.57・58, Pla.57)

打製石鏃 (1) 黒曜石で、二等辺三角形形状を呈し、抉りはない。灰茶色粘質土層出土。

打製石錐 (2) 黒曜石製で端部を欠失する。茶灰色粘質土層出土。

石匙 (3) 長さ6.2cm、最大幅2.5cmを測る。安山岩の横長剝片を利用し、片側に2次加工を施したものである。褐色粘質土層出土。

石斧 (4・5) 4は長さ20.0cm、幅8.0cm、厚さ5.2cm。表面は敲打痕が多数観察されるが、刃部の作り出しは行われていないことから未製品と思われる。また、刃部に当たる部分と基部が研磨されており、他の用途に用いられたことも考えられる。泥岩製で、SX4279出土。5は扁平片刃石斧の基部付近の残欠で、残存長8.1cm、幅4.1cm、厚さ1.6cmを測る。側面に抉りが認められる。珪質泥岩製で、SD4292砂層出土。

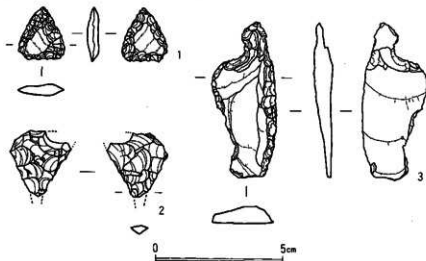


Fig.57 第170次調査出土石器実測図1 (2/3)

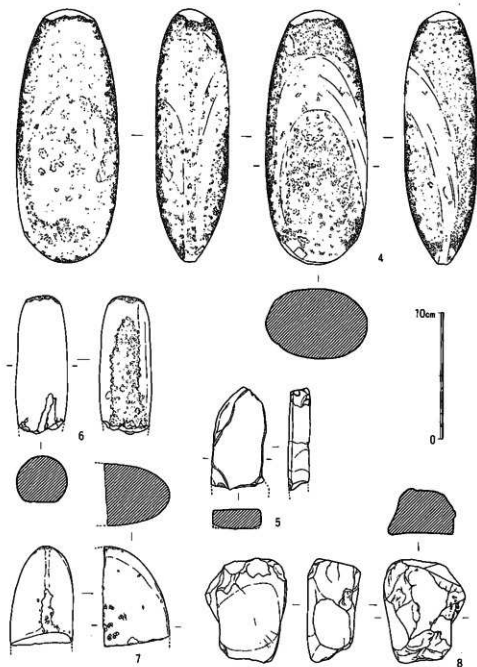


Fig.58 第170次調査出土石器実測図2 (1/3)

擦り石 (6・7) 6は棒状のもので、現存長11.0cm、径3.6~4.0cm。表面は敲打の跡とみられる痕跡があり、特に平坦部分と小口部分に顕著である。花崗岩製で、褐灰色粘質土層出土。7は現存長7.7cm、幅5.1cm、厚さ4.9cmを測る。表面は風化しているが、中央付近と側辺には敲打痕が観察される。片岩系の石を使用し、SE4295灰褐色土層出土。

砥石 (8) 砂岩製で、長さ8.2cm、幅6.4cm、厚さ3.6cmを測る。SE4295の西に開けたトレ

ンチの褐灰色粘質土層出土。

(4) 小結

(A) 検出遺構の年代

今回の調査で検出した遺構について、まず出土遺物からその年代をみてみると、大半の遺構が8世紀前半～中頃のものと言える。8世紀後半に属するものはSB4265・4294・SE4285・SD4292などで、調査区の西側に集中していることがわかる。これ以降の時期ではSE4290が9世紀前半に位置づけられるが、井戸の裏込から出土している遺物を見る限り8世紀後半に属するものである。またSE4295・4270は10世紀後半～11世紀の資料を含んでおり、SK4257・SX4272は糸切り底の土師器を出すことから中世（13世紀前半～中頃）にまで下る。さらにSD4259は近世の陶磁器を含んでおり、遺構としてはこれが最も新しい。また土層及び出土遺物から7世紀後半段階に遡る可能性があるのはSX4264ぐらいである。

次に遺構の状況から相対的な時期をみてみることにする。建物や柵列で切り合い関係がほとんどないため各遺構の前後関係を知ることは困難であるが、建物遺構の振れの違いが時期差を反映するという仮定のもとで検討すると大きく4群に分けることができる。東西棟の遺構も南北軸に換算した角度で言うと、1) 北で東に1°程度振るもの、2) 北で東に2～3°程度振る

Tab. 1 第170次調査主要遺構変遷表

	建物・柵	井戸	土坑	溝	その他
I					SX4264
II	A SB4260 SA4259・SA4275 SA4278・SA4286				
	B SB4160・SB4280 SB4300・SB4302 SA4303・SA4287 SA4291・SA4293		SK4296・SK4304 SK4313・SK4269 SK4268・SK4271	SD4273・SD4274 SD4276・SD4282 SD4299・SD4322	SX4281・SX4308 SX4306・SX4312
	C SB4310・SA4297				
III	SB4265・SB4294 SA4288・SA4283 SA4284・SI4305	SE4285・SE4290		SD4292・SD4301	SX4317・SX4318 SX4319・SX4309
IV		SE4270・SE4295			
V			SK4257・SK4261		SX4266・SX4272

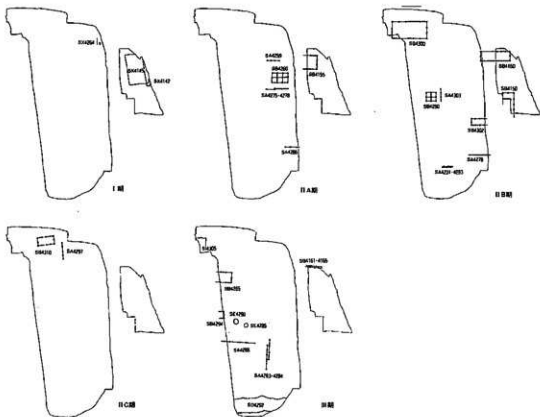


Fig.59 第160・170次調査遺構変遷図

もの、3)北で東に5~6°程度振るもの、4)北で西に振るものである。このうち3)は概ね8世紀後半に属する建物で時期と角度が一致すると言える。これは隣接する第160次調査の成果でも、6°50'程の振れをもつSB4165・4161が最も新しい段階(具体的な時期の提示はない)と考えられていることとも符合する。他は8世紀前半~中頃に属する一群となるが、第160次の成果で2)に該当するSB4155が切り合い関係から1)に属するSB4160よりも古いことが判明している。この成果を援用すると2)が1)に先行することとなる。また4)は切り合い関係から1)よりも新しいことが確実であるが、2)との関係は明白ではない。ここでは仮に2)→1)→4)→3)の順に新しくなるものとしておきたい。ただし、土層観察の結果新規に属することが判明しているSB4294は3)の一群と同時期に捉え、SB4298・4324はSB4300・4310よりも新しくなることが判明しているだけで帰属する時期はここでは保留しておく。なお、建物遺構で確実に7世紀後半以前に属するものは検出されていない。

これらの成果を図にしたのがFig.59、表にしたのがTab. Iである。ここに示すI~V期の区分を第160次調査と対比すると、I期は同じ、第160次のII期はII A期、III期はII B期にほぼ該当すると考えている。ただ建物以外の遺構をこの区分に当てはめるのは現状では困難であり、今後の課題としたい。

Fig.59をみると分かるように、II期の遺構は調査区北側から東側を中心に展開しているようで、東側の山裾(第160次調査地点)から今次の調査区一帯は一連のものともみて疑いなか

う。この段階で南西側は基盤となる暗灰茶色粘質土（8世紀前半）上に遺構が希薄乃至は未確認のため、現状では当該期は空白であったと言わざるを得ない。しかしⅢ期に入ると、整地と思われる褐灰色粘質土（8世紀後半）がこの上を覆い、若干ながら遺構が確認されるようになる。この褐灰色粘質土層の詳細な範囲は掘みきれていないが、概ね調査区の南西部分一帯と捉えられ、その上に構築される遺構のほとんどがこの褐灰色粘質土層の上に形成されており、敷地がこの時期に西側へ拡張されたことが窺える。ただし東側にはⅢ期に属する遺構が希薄であり、この時期の調査区東側がどのように利用されていたかは明確にはし得なかった。

また調査区の南東部分にみられる東西方向を主とする小溝は、出土土器だけでなく切り合う遺構との関係（SD4273を切るSX4309は8世紀後半の遺物を出土する）からも8世紀前半段階に位置づけて良さそうである。このエリアはやや小規模な建物SB4302が1棟あるのみで、他は溝とピット群で構成される。溝の性格を特定することは困難であるが、この遺跡を語る上で重要な位置を占める可能性がある。

(B) 生産関係の遺構と遺物

・遺構について

遺構自体で生産関連遺構と考えられるものはSK4263・SX4264の2基で、SX4264は茶灰色粘質土層除去後に検出され、且つ少量ながら7世紀後半段階の土器が出土し、SK4263は遺構自体が切り込む茶灰色粘質土層の時期が8世紀前半に考えられることからそれ以後の構築であることが分かる。

また生産関係遺物を出土した遺構をみると、トリベはSB4260・SI4305・SE4295・SK4267・4269・SD4258・4292・SX4314、茶灰色粘質土層など、鞆羽口はSE4290・SK4267・4269・SX4281など、鋳型はSD4292・SK4296・4315・SX4307、炉壁はSB4310柱掘り方に集中して出土したほかSX4279、鉾津はSI4305・SB4310・SK4269・4296・4315・SE4285・SX4278などである。これを図に示したのがFig.60であるが、1点以上出土したものを量に関係なくすべて同じ印で記載しているため、定量化された資料提示とは言えない。しかし遺物の分布の傾向は概ねつかめるものと言え、これを見る限りSB4280の周辺とSI4305やSK4315のある北側台地付近で金属生産活動が活発に行われていたものと考えたい。

これらの遺構の年代をみるとⅠ・Ⅱ・Ⅲ期のすべてに跨って出土していることが分かる。もちろん後世の遺構になるほど整地や他の遺構からの混入の可能性が高くなり、確実性の点では薄れてゆくが、Ⅲ期の出土状況を見てみるとSE4290では鞆羽口が複数出土し他の遺物と同時に埋没したことが窺われ、SK4315（Ⅱ・Ⅲ期の区分は困難）では鋳型が集中して出土していることや、SI4305からトリベ、鞆羽口、鉾津が出土しているとともに御笠川以北（さらには大宰府条坊跡を含めて）では竪穴住居の存在自体が特殊な状況であることなどから、やはりⅢ期にも生産活動を行っていたと考えて差し支えなからう。

またⅠ期は隣接する第160次調査の成果を含めて考えてみると、東側丘陵の裾部分を中心に

金属生産に関わる活動が開始された時期と言える。規模は決して大きなものとは言えず、今次の調査区にはほとんど及んでいない。

こうしてみると規模の差はあるが、この地区一帯はⅠ期からⅢ期まで連続した金属生産活動の形跡を認めることができ、その時期は大宰府政庁第Ⅱ期の最盛期に該当しており、従来から推定されていた「匠司」に関する工房跡の可能性はますます高まったものと言えよう。

・トリベについて

隣接する第160次調査で出土したトリベ（一部は増城と報告される）の多くは、口径がおおよそ13~16cm、23~26cmもあり、今回出土した一群にくらべるとかなり大きい。さらにこれらの資料は底部を平底にしており、一見して異なるものであることは分かるが、その理由には明確ではない。

さて、第160次調査出

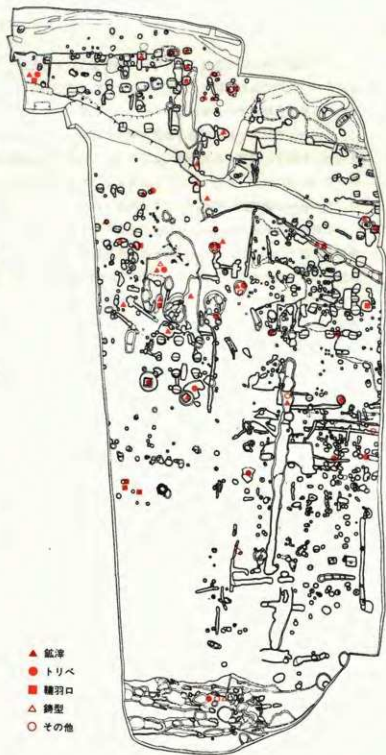


Fig.60 第170次調査金属生産関係遺物出土地点図

土資料をその地点別にみてみると、丸底を呈する資料はSK4141・SX4151から出土しており、SK4141はその出土土器から8世紀前半に考えられている。今回の調査で出土したものはすべ

て小型で且つ丸底を呈しており、先に検討したように今次の調査では7世紀に遡る確実な遺構はきわめて少なく、トリベを出土した遺構や土層はすべて8世紀前半以降のものである。これに対して平底の資料が出土した遺構はSX4142・4145でいずれも第160次であり、今次の調査では皆無であった。この両遺構は7世紀後半代に考えられているものであり、平底と丸底の差は年代的差異による形態の変化である可能性が指摘できる。ただ法量の大きな差は年代的な違いのみで生じるものとは思えず、年代差の背景にはそれを用いて生産された製品の違いや同時に使用する他の道具の構造差など、用途面でも変化していることが考えられる。可能性の一つとしては底部が丸底の資料は、炉内における安定性がきわめて悪く増場として燃料上に置いて加熱した場合、燃料の消耗によって簡単に傾いてしまう恐れがある。平底の資料ではこの率はきわめて低いと考えられる。つまり丸底の資料はトリベあるいは杓、平底のものは増場と解釈することも可能ではなかろうか。わずかな資料だけで一概に形態差=年代差に置き換えるのは危険であり、またその性格も即断することは避けたい。また160次に関しては出土したすべての資料を実見したわけではないので、ここでは今後の検討課題として提示するとともに、結論は将来に委ねたい。

次にトリベの分析結果と表面観察から気付いたことを記述する。トリベの表面、特に口縁部付近に付着する黒褐色の物質は蛍光X線分析の結果、トリベに入れられた銅や鉄といった材料を検出するとともにトリベ本体に含まれる胎土の成分も合わせて検出している。これは表面にトリベ本体の成分が何らかの要因で浮き出してきていることを予感させるものである。そこでトリベ本体を再度観察すると、ほとんどの資料で口縁部付近に集中して火膨れを起こしているとともに、内面の付着物の断面観察では付着物とトリベ本体の区別がきわめて難しいことに気が付く。そこで現在使用されているトリベを観察させていただいたところ、トリベ内面に暗黒褐色の付着物がべったりと付着しており、これは材料が残存したものではなくトリベ内面が溶解したものであることをご教示いただいた。つまりこの付着物は高温によってトリベ表面が変化したものであると考えるのが妥当であるという結論に至った。このように考えると、使用時には表面が溶解し材料（鉄や銅など）と接触するわけであるから、冷却された付着物中にはトリベの胎土のほか材料の成分が多数含まれるという結果となっても何ぞ不思議ではない。

では次に口縁部に集中してみられた火膨れについて検討する。完形品で出土した資料（Fig.53-9）を観察すると外面底部の焼成が最も甘く、明茶色を呈しており破断面の磨滅も進んでいるが、口縁部に向かうに従って暗灰色を呈し硬く焼きしまっているように見える。内面では底部から口縁部まで暗灰色を呈し、硬質である。そして内外面ともに口縁部付近に集中して火膨れが観察され、その部分は本来の形状がかなり損なわれている。この現象は底部から火を受けたものではなく、口縁部から火を受けたことを示すのではなかろうか。このことについても現在の作業に則してご教示いただいた結果、トリベ（杓）は溶解した材料を鋳型に移す役目であり、それ自体が低温であると材料が急激に冷却される危険性があるため、作業中は炉

の周辺に置いて常に加熱して暖めているとのことであった。この保温は1000度という途轍もない高温の世界で行われるとのことであり、胎土に変化が生じても不思議ではない。さらに器として機能する内面を重点的に保温するため、炉の周囲に置く場合は伏せた状態で保温するという (Fig.61)。こうしたことから出土資料にみられた口縁部の火彫れは、作業時における保温行為によるものと考えるのが現状では妥当であると考えたい。

(C) 木製印章について

印面に記載された文字の解釈は本章 (2) に詳しいのでこちらを参照していただくとして、ここでは出土した木製印章が如何なる性格のものかを検討しておきたい。

なぜこのような項目を設定するかを述べると、まずこれで完成品とみる意見、次にこの資料は完全な製品となっておらず随所に荒々しい加工痕が観察されるのに対して、印面部分は完成された製品のようにほぼ仕上がった状況を示していることから、未製品であろうとする意見、さらに銅製印章に関わる鋳型の木型ではないかとする意見などが出土段階でみられたことによる。以下若干検討しておきたい。

出土した印章を観察すると、文字の記載される印面付近がほぼ完全に調整されるのに対して、鈕にあたる部分は荒削りのままでわずかに握ることができる程度の加工と言える。印面には朱肉の残存は認められず、使用による摩耗は観察されない。この点で少なくとも印としては未使用である可能性が強い。

さて本遺物の鈕をみると、加工途中で廃棄されたとみることもできる。Fig.62に示すものは舌鈕有孔式の鈕を想定したときの図である。また現存する木印の鈕をみると円錐状のものや弧鈕のものがあり、いずれを想定しても現状から正式な鈕を削り出すことが可能な状態であることがわかる。したがって未製品のまま投棄された可能性は捨てきれない。

次に遺跡が金属生産に関わる遺構や遺物を多く出土していることから、鋳型の木型との想定を検証してみよう。鋳型は福島県番匠地遺跡や千葉県谷津遺跡で出土の報告があり参考となる。Fig.63は両遺跡から出土した鋳型の組み方を模式的に示したものであるが、いずれも3個の型を合わせて鋳造することには変わりないが、鈕部分の鋳型の下端部が印面側面を含んでいるかどうかで異なっている点に注意したい。

谷津遺跡の場合は印面側面は鈕の鋳型に含まれており、外枠

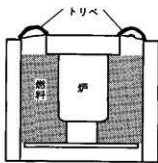


Fig.61 炉の周囲に置くトリベ (大西氏による)

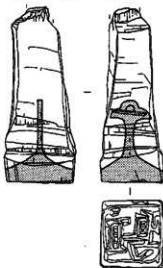


Fig.62 木印の現状と完成予想図 (網部分)

のない形式か印面の外枠は鋳造型と接合する際の隙間を利用して製作したのと思われる。この場合の印面の木型を想定すると Fig.64-1 のようなものではなかったかと推定される。これに対して香匠地遺跡では外枠が最初から印面鋳型に含まれることになり、Fig.64-2 或いは 3 のように推定される。このうち 3 の場合、印面及び側面の

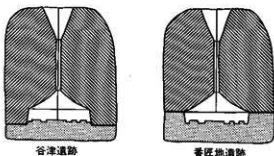


Fig.63 銅印鋳型の組み合わせ模式図

形状以外の部分はどのような形状でも良く、今回の出土品のような形状でも十分機能することがわかる。この点を重視すると印面側面の傾斜が印面に近いほど小さくなるように傾いているのは、粘土からの抜けを考慮したものではないかとも思える。このように考えると鋳型の木型とする案も否定できない。木型とすればこれで完成品とみなし得るものであり、同一の印章を大量に製造しない限り木型は摩耗もほとんどないままに廃棄される運命になったであろう。

さらに祭祀関連の遺物として捉えられる可能性がある。木印が祭祀に関連することは付論において指摘されるところであり詳細は論文を参照されたいが、同時に出土した遺物に祭祀関係の木製遺物が多数見られることに注目したい。木印と同時に出土した祭祀遺物は、齋串及び角柱状の木製品である。埋没環境はこれらが同時に投棄されたことを確実には示していないが、同一土層中からの出土であり同時埋没の可能性も残されている。

古代の祭祀において木印が祭祀用具として活用されていたかどうかは明らかでないが、今後究明する必要性を感じる。明確に否定する材料が出るまでは、祭祀用具と考える案も残すこととしたい。

簡単な検討に終わったが、現状では未製品案、鋳型の木型案、祭祀用具案ともに可能性があり、結論は将来の成果に委ねることとしたい。

(参考文献)

栗原和彦ほか『大宰府史跡 平成6年度発掘調査概報』1995 九州歴史資料館
平川南編『日本古代印集成』(「非文献資料の基礎的研究—古印—」報告書)1996 国立歴史民俗博物館



Fig.64 印面木型想像図

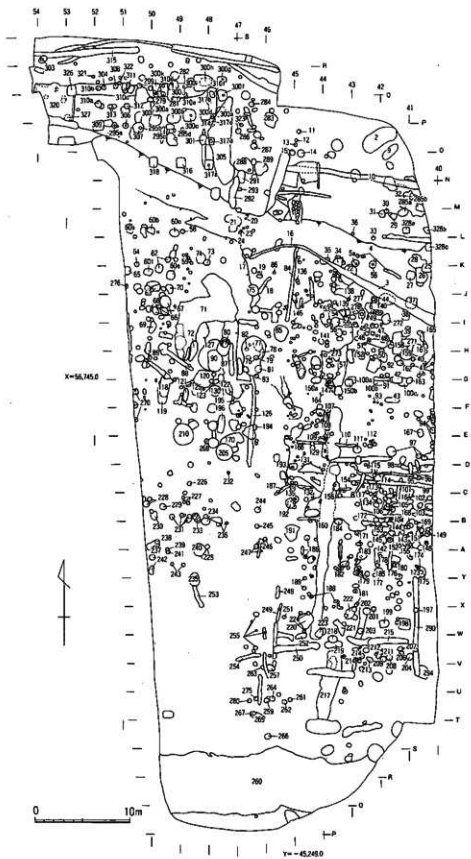


Fig.65 第170次調査遺構略測図

Tab. 2-1 第170次調査遺構番号一覧表

S-番号	遺構番号	種別	地区
1	SX4256	増築 周辺の他の遺構より新しい	LM44
2	SK4257	土壇	中世 O42
3	SD4258	溝 段造成に伴うものか?	近世? I40~K46
4		ピット群 5→4	K42・J41
5	SA4259	ピット 掘立柱掘り方 (a=35 b=34 c=5a d=5b)	K42
6		土壇	I42
7	SB4260b	ピット 掘立柱掘り方	I42
8		小溝	M43~45
9	SK4261	土壇	中世 O41
10	SD4262	溝 炭混じりの埋土	O39~N45
11		ピット	O44
12		ピット	O44
13		ピット	O44
14	SK4263	焼土壇 土壌外壁が熱により赤変	N44
15		ピット	O45
16	SD4258	溝 S-3と同一のもの	近世 I40~K46
17		ピット	K46
18		ピット 鉾津出土	J45,46
19		ピット	J46
20		ピット	L46
21		ピット	L47
22		土壇 3→22	J43
23		ピット	L46
24		ピット	L46
25	SB4160q	ピット 掘立柱掘り方	J40
26		土壇	J40
27		ピット 掘立柱掘り方	J40
28		土壇 炭が多量に混入する埋土	J40
29		ピット	L41
30		ピット	L41
31		ピット	L41
32	SX4264	窪み状遺構 生産関係遺構?、焼け土の集積	M40
33		ピット	K42
34	SA4259b	ピット 掘立柱掘り方	J43
35	SA4259a	ピット 掘立柱掘り方	K43
36		ピット	L43
37		ピット 掘立柱掘り方?	I40
38	SB4260d	ピット 掘立柱掘り方	I41
39	SB4260h	ピット 掘立柱掘り方	H41
40	SX4266	ピット	中世 G40
41		ピット群	中世 G40
42		ピット S-100c→42	F41
43		ピット	F41
44	SK4304	土壇	奈良 I41

Tab. 2-2 第170次調査遺構番号一覧表

S-番号	遺構番号	種 別	地区
45	SX4306	ピット	H42
46	SB4260f	ピット 掘立柱掘り方	H42
47		ピット	H42
48	SB4260g	ピット 掘立柱掘り方	H41
49		ピット	H42
50	SB4260k	ピット 掘立柱掘り方	G41
51		ピット	H42
52	SB4260j	ピット 掘立柱掘り方	G42
53	SB4260a	ピット群 掘立柱掘り方を含む	I43
54		ピット	I43
55		ピット	H43
56	SB4260e	ピット 掘立柱掘り方	I43
57		溝	G43
58		ピット	L48
59		ピット群	K48
60	SB4265	掘立柱建物 a~f、S-65=g	L49~50
61		ピット群	L50
62		ピット群	J49
63		ピット群	J49
64		ピット	K50
65	SB4265g	ピット 掘立柱掘り方 (S-60g)	J50
66		ピット群	I49
67		ピット	I49
68		ピット	I49
69		ピット	H49
70		ピット	J49
71	SX4307	落ち込み 暗茶灰色土埋土、整地の一部の可能性あり	H48
72		ピット	H48
73		ピット	K48
74		ピット	K48
75	SK4267	土壌 生産関係遺構?	J46
76	SK4268	土壌 下層に青灰色粘質土が堆積	G46
77		ピット 茶灰色砂質土埋土、S-76下層ピット	H46
78		ピット 灰色砂質土埋土、炭化物多量混入、S-76下層ピット	H46
79		ピット 76→79	H46
80	SE4270	井戸? 瓦積み井戸の底部?	H47
81		ピット 青色粘土埋土	G46
82		ピット S-76下層ピット	H46
83	SA4303	ピット S-200と方位、柱筋揃う	G46
84		溝 近世?	I~K45
85	SK4269	土壌 灰茶色粘土埋土	H45
86		ピット	J45
87		溝 S-124と同一	G47
88		溝	G48~H49

Tab. 2-3 第170次調査遺構番号一覧表

S-番号	遺構番号	種別	地区
89		ビット群	H50
90	SK4271	土壌 下層にビットあり	G47
91	SX4308	ビット	G41
92		ビット	G41
93		ビット	F42
94		ビット群	D40~E40
95	SX4272	ビット 95→96→98	中世 C40
96		ビット 95→96→98	C40
97		ビット群	D40
98	SD4273	小溝 95→96→98	C40~41
99	SD4274	小溝	C40~41
100	SA4275	柵列 2間、S-150b→S-100a	F41~43
101		小溝 S-99と関連か?	B41~C41
102		ビット群	C40
103	SB4302	ビット群	B40
104		小溝 S-99等と関連か?	B41
105		ビット	B41
106		ビット群	B41
107		ビット群	E43
108		ビット	E43
109		ビット	E43
110	SD4282	小溝 S-99等と関連か?	D42~43
111		ビット	D42
112		ビット群	D42
113		ビット	C41
114	SX4309	ビット S-98→S-114	C41
115		ビット S-98→S-115	C42
116		ビット	B41
117		小溝 S-99等と関連か?	C42
118		土壌 118→119	F49
119		土壌	F49
120	SX4311	窪み状	G48
121		ビット群	F48
122		ビット	G47
123		ビット	F47
124		溝 S-87と同一	G47
125	SB4280a	ビット 掘立柱掘り方	F48
126	SD4276	落ち込み 126→200c	F46~47
127	SK4271	土壌 S-90と同一の可能性あり	GH47
128		ビット群	E43
129		ビット	D44
130	SB4280b	ビット 掘立柱掘り方	F47
131		ビット群	D44
132		ビット群	BC44

Tab. 2-4 第170次調査遺構番号一覧表

S-番号	遺構番号	種 別	地区
133		ピット	C44
134		ピット	B41
135		ピット	B44
136		ピット	J44
137		ピット	J43
138	SX4312	ピット	I43
139		ピット	I43
140		ピット 掘立柱掘り方？	I42
141		ピット	I43
142		ピット	A41
143		ピット	A41
144		ピット	A41
145	SX4277	ピット 底に瓦を敷く	A41
146		ピット	I45
147		ピット群	F43
148		ピット	A40
149	SB4302	ピット	A40
150	SA4278	襜列 1間、S-100→150	F43・44
151	SB4302	ピット	A40
152	SB4302	ピット	A41
153		土壌	A41
154		小溝	C43
155		ピット	A40
156		土壌	C43
157		土壌	E43
158		土壌	I41
159	SB42601	ピット 掘立柱掘り方	G41
160	SX4279	落ち込み 浅い落ち込みで、溝状を呈する	E43～X43
161	SK4313	土壌	GH40
162		ピット	G41
163		ピット 100c→163	F41
164		ピット	F43
165	SX4281	土壌	H40
166	SD4282	溝 110の延長とみられ、一連のものとは判断	D44
167		ピット	E44
168		ピット	A40
169		ピット	A40
170		土壌 205→170	D46・47
171		ピット群	A42
172		ピット	A42
173		ピット群	Y40
174	SX4314	ピット	Y40
175		ピット	Y40
176		ピット群	Y41

Tab. 2-5 第170次調査遺構番号一覧表

S-番号	遺構番号	種 別	地区
177		ピット	Y42
178		ピット群	Y41
179		ピット群	Y42
180		ピット	Y41
181		ピット群	X42
182		ピット群	Y43
183		ピット	Y42
184		ピット	A43
185	SX4316	ピット	Y41
186	SA4283a・b	ピット群	Y44～A40
187		小溝	C45
188	SA4284d	ピット群	X43
189	SA4283c	ピット群	X44
190	SA4283d	ピット	X44
191		土壌	A44-45
192		ピット	B44-45
193		ピット	D45
194	SA4303	ピット S-200 (SB4280) と方位、柱筋揃う	E46
195		ピット 200c→195	F47
196		ピット	E47
197		ピット 290→197	W40
198	SA4286a	ピット	W41
199	SA4286b	ピット	W41
200	SB4280d～i	獨立柱建物 (a～i)	E47-F48
201		ピット	W42
202		ピット	W42
203		ピット	W42
204	SA4287c	ピット	W40
205	SE4285	井戸	D47
206		ピット	V41
207		ピット	V41
208	SA4287b	ピット	V41
209		ピット	V41
210	SE4290	井戸	E49
211		ピット	V41-42
212		ピット	V41-42
213	SA4287a	ピット	V42
214		ピット	V42
215		溝	V41
216		ピット群	V42
217		溝	V43
218		ピット	V43
219		ピット	V43
220		土壌	W44

Tab. 2-6 第170次調査遺構番号一覧表

S-番号	遺構番号	種 別	地区
221		ピット	W44
222		ピット	W42
223		ピット	W43
224		ピット群	W43
225		窪み 240+225、S-240の裏込めの一部か?	Y48
226		ピット	C48
227		ピット群	B48
228		ピット群	B49
229		ピット	B49
230	SA4288a	ピット	B49
231	SX4317	ピット群 SA4288には含まれない	B48・49
232		ピット	C47
233	SX4318	ピット SA4288には含まれない	B48
234		ピット群 SA4288には含まれない	B48
235		窪み	Y48
236	SA4288c	ピット群 SA4288の一部が含まれる	B47
237		土塼	A49
238	SX4319	ピット	A49
239		ピット	A49
240	SE4295	井戸 瓦積み	A48
241		ピット	A48
242		ピット群	Y49
243		ピット群	Y48・49
244		ピット	B46
245	SA4288d	ピット	A46
246		ピット	A45
247	SX4321	ピット群	A46
248		ピット	X45
249		小溝	W45
250	SD4322	溝	V44
251		ピット	W45
252		溝	V44
253		窪み 堆積土の境目を誤って掘ったもの	X48
254		溝	W46
255		ピット群	V~X46
256		溝状	U43・44
257	SK4289	土塼	U45
258		溝	U45
259	SA4291b	横列 280・259・262で構成	T45
260	SD4292	溝	奈良 PQライン
261	SA4293c	横列 275・264・261で構成	T45
262	SA4291c	横列 280・259・262で構成	T45
263		ピット	U46
264	SA4293b	横列 275・264・261で構成	T45

Tab. 2-7 第170次調査遺構番号一覧表

S-番号	遺構番号	種 別	地区
265		ピット	T45
266		ピット	T46
267		ピット	T46
268		ピット	D48
269		???	
270	SB4294	掘立柱建物 西に延びる掘立柱建物と推定	EF50
271		ピット 掘立柱掘り方?	H41
272	SB4260c	ピット 掘立柱掘り方	I41
273	SB4260i	ピット 掘立柱掘り方	G43
274		ピット	G43
275	SA4293a	横列 275・264・261で構成	T45・46
276		ピット	I50
277		ピット	I42
278		ピット	I42
279		ピット	Q49
280	SA4291a	横列 280・289・262で構成	T45・46
281		ピット 281-300	Q48
282	SB4298d	ピット	Q48
283	SK4296	土壇	O45
284	SK4315	土壇	P46
285		横列?	L40-41
286		ピット	O46
287	SA4297	ピット 横列の一部	O46
288		竈み	N46
289		竈み	N46
290	SD4299	溝	W40
291		ピット	MN46
292		溝状遺構	M47
293		ピット	M47
294		竈み	U40
295	SB4298f-i	掘立柱建物	Oライン
296		竈み	U42
297		竈み	S42
298		竈み	R43
299		ピット	Q50
300	SB4310	掘立柱建物 2×4間、305-300-317c・d	Q49ほか
301		ピット	O48
302		ピット	
303		ピット	R53
304	SB4324a	ピット	Q51
305	SD4301	溝	NP47
306	SB4324d	ピット	O50
307		ピット 295b-307	O50
308	SB4298a	ピット	Q51

Tab. 2-8 第170次調査遺構番号一覧表

S-番号	遺構番号	種別	地区
309	SX4323	ピット 掘立柱掘り方?	P51
310	SB4300b~f	掘立柱建物 aは無関係、他は柱痕跡、fはS-317dの柱痕跡	Q50ほか
311	SB4324b	ピット	Q50
312	SB4324c	ピット	Q50
313	SB4298j	ピット群	P51
314	SB4300g	ピット S-317cの柱痕跡	O47
315		溝 複乱	Rライン
316	SB4300j	ピット 掘立柱掘り方	N49
317	SB4300f~i	ピット 掘立柱掘り方	N48ほか
318	SB4300k	ピット 掘立柱掘り方	N49
319		欠番	
320	SI 4305	竪穴住居	P53
321		ピット	Q51
322		ピット	Q51
323		ピット群	O46
324	SK4315	ピット S-284と番号重複	P46
325		欠番	
326	SB4300a	ピット 掘立柱掘り方	Q52
327	SB4300p	ピット 掘立柱掘り方	P52
328	SB4160	掘立柱建物 160次からの延長 (2×7間) b...a、c...r、a...無関係	KL40

Tab. 3 第170次調査遺構番号・S-番号対照表

種別	番号	S-番号						種別	番号	S-番号					
SX	4256	1						SE	4290	210					
SK	4257	2						SA	4291	259					
SD	4258	3	16					SD	4292	260					
SA	4259	5a	5b	34	35			SA	4293	261					
SB	4260	7	38	39	46	48		SB	4294	270					
		50	52	53	56	272	273	SE	4295	240					
SK	4261	9						SK	4296	283					
SD	4262	10						SA	4297	287					
SK	4263	14						SB	4298	259b	282	295a	299	307	308
SX	4264	32						SD	4299	290					
SB	4265	60	65					SB	4300	310					
SX	4266	40						SD	4301	305					
SK	4267	75						SB	4302	103	149	151	152		
SK	4268	76						SA	4303	83	194				
SK	4269	85						SK	4304	44					
SE	4270	80						SI	4305	320					
SK	4271	90	127					SX	4306	45a					
SX	4272	95						SX	4307	71					
SD	4273	98						SX	4308	91					
SD	4274	99						SX	4309	114					
SA	4275	100						SB	4310	300					
SD	4276	126						SX	4311	120					
SX	4277	145						SX	4312	138					
SA	4278	150						SK	4313	161					
SX	4279	160						SX	4314	174					
SB	4280	125	130	200				SK	4315	284					
SX	4281	165						SX	4316	185					
SD	4282	110	166					SX	4317	231					
SA	4283	186	189	190				SX	4318	233					
SA	4284	188						SX	4319	238					
SE	4285	205							4320						
SA	4286	198	199					SX	4321	247					
SA	4287	204	208	213				SD	4322	250					
SA	4288	230						SX	4323	309					
SK	4289	257						SB	4324	304	306	311	312		
									4325						

Tab. 4-1 第170次調査出土遺物一覧表

S-1 (SK4256)	弥生土器 破片	S-15	弥生土器 壺	S-30	須恵器 壺 土器 破片
S-2 (SK4257)	須恵器 坏、甕 土器 坏(イト)、小甕a(イト)、坏a? 弥生土器 壺 石製品 剥片(湖沼石) 瓦 甗 破片(椅子母)	S-16 (SD4258)	須恵器 破片 土器 破片	S-31	土器 破片 瓦 甗 破片
S-3 (SD4258)	須恵器 坏、甕3、壺 土器 坏、破片 縄文系青磁 钵; 破片(1) 不明青磁 高麗?破片(1) 肥前系磁器 染付; 甕(1) 金属製品 釧 土製品 土りべ 瓦 甗 破片(縄目印、椅子母)、埴	S-17	土器 破片	S-32 (SK4264)	須恵器 大甕1、甕、壺 土器 甗、破片
S-4	須恵器 坏(6-後半) 土器 破片	S-18	須恵器 甕、破片 金属製品 釧 瓦 甗 破片	S-33	須恵器 甕3 土器 破片
S-5 (SA4259a)	土器 破片	S-19	金属製品 釧 瓦 甗 破片	S-34 (SA4259a)	須恵器 坏 土器 破片 瓦 甗 破片
S-6	須恵器 破片 土器 破片 瓦 甗 平瓦(縄目印)	S-20	土器 破片	S-35 (SA4259a)	須恵器 甕1、甕3、壺 土器 甕3、破片
S-7 (SB4260b)	土器 破片	S-21	土器 破片 金属製品 釧	S-36	須恵器 坏 土器 破片
S-8	土器 破片 胎土陶器 破片(近世X1) 弥生土器 破片 瓦 甗 破片	S-22	瓦 甗 破片	S-37	須恵器 坏、甕、破片 土器 甕、破片 弥生土器 破片
S-9 (SK4261)	須恵器 甕 土器 小甕a 瓦 甗 破片(椅子母)	S-23	瓦 甗 破片	S-38 (SB4260d)	土器 坏
S-10 (SD4262)	須恵器 甕3、甕、甕c3、壺 土器 破片 弥生土器 甕、破片 瓦 甗 破片	S-24	須恵器 破片 金属製品 釧 瓦 甗 破片	S-39 (SB4260h)	土器 破片
S-11	瓦 甗 破片	S-25 (SB4160g)	土器 坏、甕a 土製品 土りべ? 瓦 甗 破片	S-40 (SK4266)	土器 坏(イト)
		S-26	須恵器 甕 弥生土器 甕	S-41	土器 坏、破片
		S-27	須恵器 甕3、甕 土器 破片 阿波系青磁 钵; 破片(1) 瓦 甗 破片	S-42	須恵器 甕3 土器 坏(イト)? 瓦 甗 破片
		S-28	須恵器 甕3、甕 土器 坏c、甕c、甕 弥生土器 破片 金属製品 釧 瓦 甗 破片	S-43	須恵器 甕3、甕 土器 破片
		S-29	土器 破片		

Tab. 4-2 第170次調査出土遺物一覧表

S-44 (SK430a)		S-58		S-64	
須恵器	蓋3、坏c、坏、甕	須恵器	坏	須恵器	破片
土師器	蓋、破片	土師器	破片	土師器	破片
弥生土器	甕			金属製品	磁埴
S-45 (SK430b)		S-59		S-65 (SB4265g)	
須恵器	坏c	須恵器	坏	須恵器	坏、破片
瓦	破片(縄目叩)	瓦	破片(縄目叩)	土師器	破片
S-46 (SB4260f)		S-60a (SB4265a)		S-66	
須恵器	坏c	須恵器	甕	須恵器	坏
		土師器	破片	土師器	破片
S-47		S-60b (SB4265b)		S-67	
須恵器	坏c、蓋1、甕	須恵器	蓋3	須恵器	坏
土師器	坏c	土師器	破片	土師器	破片
瓦	破片	瓦	破片	瓦	破片
S-48 (SB4260g)		S-60c (SB4265c)		S-68	
須恵器	大瓶c、坏(古墳)	須恵器	蓋1	須恵器	甕、甕
土師器	破片	土師器	破片	土師器	破片
瓦	破片	金属製品	磁埴	瓦	破片
S-49		S-60d (SB4265d)		S-69	
須恵器	破片	須恵器	破片	須恵器	甕、坏
S-50 (SB4260h)		S-60e (SB4265e)		S-70	
須恵器	蓋3、坏、甕	須恵器	蓋3、甕	須恵器	蓋3
土師器	甕	土師器	坏、破片	土師器	坏
		金属製品	破片	金属製品	磁埴
S-51		S-60f (SB4265f)		S-71 (SK4307)	
土師器	破片	須恵器	坏	須恵器	蓋3、甕、蓋1、皿a、蓋c3、坏a
S-52 (SB4260i)		S-61		須恵器	坏c、坏、円筒甕、高坏、钵
土師器	破片	須恵器	蓋(古墳)	土師器	坏c3、坏a(漆付着)、甕
金属製品	刀子	土師器	坏c、破片	土師器	坏c、甕、把手
S-53 (SB4260j)		S-62		金属製品	磁埴、不明銅製品
須恵器	蓋3、甕、甕	須恵器	破片	土製品	銅製? とりへ、伊達?
土師器	坏c、蓋3、甕	瓦	破片	瓦	破片(縄目叩、格子埴)、丸瓦
土製品	とりへ	S-63		S-71 下層 (SK4307)	
瓦	破片(縄目叩)	須恵器	坏、甕	須恵器	坏、坏c、蓋1、蓋3、円筒甕
S-54		土師器	破片	土師器	甕a
須恵器	蓋1	瓦	平瓦	土師器	甕
土師器	甕	S-64		瓦	破片
瓦	破片(縄目叩)	須恵器	破片	S-72	
S-55		土師器	破片	須恵器	蓋3、坏a、坏c、甕
土師器	破片	金属製品	磁埴	土師器	甕、破片
S-56 (SB4260k)		瓦	平瓦(縄目叩)	金属製品	磁埴
須恵器	坏	S-65		土製品	ふいご羽口
土師器	破片	須恵器	坏、甕	瓦	平瓦(縄目叩)、破片
S-57		S-66		S-73	
土師器	破片	須恵器	破片	S-74	

Tab. 4-3 第170次調査出土遺物一覧表

S-73	土 師 器 坏	S-83 (SA4303)	須 恵 器 蓋3	S-96	須 恵 器 蓋、甕 弥生土 器 甕
S-74	土 師 器 破片	S-84	須 恵 器 甕、破片 土 師 器 甕	S-97	須 恵 器 蓋3、甕 土 師 器 破片 弥生土 器 破片 土 製 品 とりべ
S-75 (SK4267)	須 恵 器 坏(丸形) 土 師 器 破片 金 属 製 品 鉄釘、工具? 土 製 品 ふいご 羽口、とりべ 瓦 類 破片	S-85 (SK4269)	須 恵 器 蓋3、甕、坏c、甕 土 師 器 坏c、甕 金 属 製 品 配淨 土 製 品 ふいご 羽口、とりべ 瓦 類 破片	S-98 (SD4273)	弥 生 土 器 破片
S-76 (SK4268)	須 恵 器 蓋c3、甕3、甕、甕、坏 土 師 器 坏a、坏c、大甕c、高坏、把手 甕 土 製 品 ふいご 羽口 石 製 品 剣片(黒曜石) 瓦 類 破片	S-86	瓦 類 破片	S-99 (SD4274)	須 恵 器 蓋3、坏、甕 土 師 器 破片 金 属 製 品 鉄塊 瓦 類 破片
S-77	須 恵 器 蓋3 土 師 器 甕? 破片 瓦 類 破片	S-87	須 恵 器 破片 土 師 器 破片	S-100a (SA4275a)	土 師 器 破片
S-78	土 師 器 大甕c	S-88	須 恵 器 蓋3	S-100b (SA4275b)	土 師 器 焼埴土
S-79	須 恵 器 蓋3 土 師 器 甕、坏 瓦 類 破片	S-89	須 恵 器 坏、甕 土 師 器 甕 金 属 製 品 配淨	S-100c (SA4275c)	須 恵 器 蓋2、蓋3 土 師 器 破片
S-80 (SE4270)	須 恵 器 蓋3、皿a、坏c、大坏c、甕、甕 土 師 器 甕、坏c、甕c、甕c 瓦 類 平瓦(格子埴)、軒平瓦	S-90 (SK4271)	須 恵 器 蓋c3、坏c、甕 土 師 器 甕 瓦 類 破片(縄目埴)	S-101	須 恵 器 蓋2、甕 土 師 器 破片
S-80 神内	須 恵 器 坏	S-90 下巻 (SK4271)	土 師 器 甕a、破片	S-102	須 恵 器 甕 土 師 器 破片
S-80 高込め	須 恵 器 蓋3 土 師 器 甕 弥 生 土 器 破片 金 属 製 品 配淨 瓦 類 破片	S-91 (SX4308)	須 恵 器 坏c 土 師 器 破片 土 製 品 ふいご 羽口	S-103 (SB4302)	須 恵 器 甕、坏、高台片 土 師 器 破片 土 製 品 とりべ 瓦 類 破片(縄目埴)
S-81	須 恵 器 坏、破片 土 師 器 埴?	S-92	弥 生 土 器 破片	S-104	土 師 器 破片 土 製 品 とりべ
S-82	土 師 器 破片	S-93	土 師 器 破片	S-105	土 師 器 破片
		S-94	須 恵 器 坏c 土 師 器 坏 瓦 類 平瓦、丸瓦、破片(格子埴)	S-106	土 師 器 坏c 瓦 類 平瓦(縄目埴)
		S-95 (SK4272)	須 恵 器 蓋c 土 師 器 小皿(イト)	S-107	土 師 器 破片

Tab. 4-4 第170次調査出土遺物一覧表

S-108

須恵器 蓋1
土師器 破片

S-109

須恵器 蓋
土師器 坏

S-110 (SK4282)

須恵器 蓋3

S-111

須恵器 甕
土師器 破片

S-112

須恵器 坏c
土師器 甕

S-113

須恵器 破片

S-114 (SK4309)

須恵器 坏a

S-115

須恵器 坏、甕

S-116

須恵器 坏c
土師器 破片
瓦 破片

S-117

須恵器 甕、甕
土師器 破片

S-118

須恵器 甕、蓋3
土師器 破片
瓦 破片(縄目叩)

S-119

須恵器 破片
土師器 坏c

S-120 (SK4311)

須恵器 蓋3、甕、甕
土師器 大鉢c、甕
弥生土 甕
金属製品 釵
瓦 破片(縄目叩)

S-121

須恵器 坏c
土師器 坏、甕

S-122

須恵器 坏
土師器 坏

S-123

土師器 破片

S-124

須恵器 蓋3
土師器 破片
瓦 破片

S-125 (SB4280a)

須恵器 高台片
土師器 蓋3

S-126 (SD4276)

須恵器 坏c、蓋3、甕
土師器 坏c、坏、鉢?、破片
瓦 破片(縄目叩)

S-127 (SK4271)

須恵器 坏c、蓋c、蓋3、甕c、円筒甕
甕
土師器 破片
瓦 破片

S-128

須恵器 蓋3
土師器 破片

S-129

須恵器 蓋3
土師器 甕
瓦 破片

S-130 (SB4280b)

須恵器 蓋3
土師器 破片

S-130a

須恵器 坏c
土師器 破片

S-130c

土師器 破片

S-130f

須恵器 蓋3
土師器 破片

S-131

須恵器 蓋3
土師器 破片

S-132

須恵器 坏
瓦 破片

S-133

土師器 大皿c、甕

S-134

須恵器 蓋1
土師器 甕

S-135

須恵器 坏c
土師器 破片

S-136

瓦 破片(格子叩)

S-137

須恵器 破片

S-138 (SK4312)

須恵器 蓋3

S-139

須恵器 蓋3
土師器 破片

S-140

須恵器 蓋3
土師器 破片

S-141

土師器 破片

S-142

須恵器 坏c、破片
土師器 破片
瓦 破片(縄目叩)

S-143

土師器 破片
瓦 破片

S-144

須恵器 蓋3
土師器 破片
瓦 破片

S-145 (SK4277)

土師器 破片

S-146

須恵器 坏、蓋3
瓦 破片

Tab. 4-5 第170次調査出土遺物一覧表

S-147	須恵器 甕、甕 土師器 甕 瓦 須恵破片	S-160下層 (SX4279)	須恵器 坏c 土師器 坏 瓦 須恵破片(横目町)	S-176	須恵器 破片 土師器 破片 瓦 須恵平瓦(横目町)
S-148	須恵器 破片 土師器 破片	S-161 (SX4313)	須恵器 坏 土師器 甕a、破片 土製品 ふいご羽口	S-177	瓦 須恵破片
S-149 (SB4302)	須恵器 甕3	S-162	土師器 破片	S-178	須恵器 坏 土師器 破片 瓦 須恵破片
S-150a (SA4278a)	須恵器 甕3、坏c 土製品 とりべ 瓦 須恵破片	S-163	須恵器 坏	S-179	土師器 破片 瓦 須恵平瓦
S-151 (SB4302)	須恵器 坏 土師器 破片	S-164	須恵器 甕3 土師器 破片	S-180	土師器 甕(古墳)、甕、坏 瓦 須恵瓦(横目町、鴉子町)
S-152 (SB4302)	須恵器 甕3、甕1 土師器 破片 瓦 須恵破片(横目町)	S-165 (SX4281)	須恵器 坏 土師器 坏c、甕 土製品 ふいご羽口	S-181	土師器 破片
S-153	須恵器 破片 土師器 破片 瓦 須恵破片	S-166 (SD4282)	須恵器 坏、甕 土師器 坏c	S-182	須恵器 甕、甕c 土師器 破片
S-154	須恵器 甕3 土師器 破片	S-167	須恵器 破片 土師器 破片 弥生土師器 破片	S-183	須恵器 坏 土師器 破片 瓦 須恵破片
S-155	須恵器 甕1 土師器 甕(古墳) 瓦 須恵平瓦(鴉子町)	S-169	土師器 破片	S-184	土師器 甕
S-157	土師器 甕、破片	S-170	須恵器 坏、甕3、甕、鉢 土師器 把手、破片 土製品 とりべ	S-185 (SX4316)	瓦 須恵平瓦(鴉子町)、文字瓦「佐」(n-1) 丸瓦
S-158	須恵器 甕	S-171	須恵器 甕 土師器 破片	S-186 (SA4283a,b)	土師器 坏 瓦 須恵破片
S-159 (SB4260)	須恵器 甕 弥生土師器 破片	S-173	土師器 破片 瓦 須恵破片(鴉子町)	S-187	土師器 高坏(古墳)
S-160 (SX4279)	甕、甕、小平c、坏c、高坏、鉢 須恵器 甕、甕3、甕c3、大甕c3、小甕a3 大甕c 土師器 甕、甕3、坏、高坏、把手、破片 金属製品 飯沼、鉄塊、鉄釘 石製品 磨石石舟 土製品 炉篋? 瓦 須恵平瓦(鴉子町、横目町)、破片	S-174 (SX4314)	土製品 とりべ	S-188 (SA4284d)	土師器 坏、甕
		S-175	須恵器 甕 土師器 甕 瓦 須恵破片(鴉子町)	S-189 (SA4283c)	須恵器 甕3 瓦 須恵平瓦
				S-191	須恵器 坏c、甕3 土師器 破片 土製品 とりべ 瓦 須恵破片

Tab. 4-6 第170次調査出土遺物一覧表

S-192	須恵器 環c、蓋3 土師器 破片 瓦 類 平瓦(純目印)	S-203	須恵器 壺 土師器 破片	S-211	土師器 破片
S-193	須恵器 破片 土師器 高坏、壺	S-204 (SA4287c)	須恵器 壺 土師器 破片	S-212	土師器 破片
S-194 (SA4303)	土師器 破片	S-205 (SE4285) 明灰色土	須恵器 小蓋c3、蓋3、坏c、短頸壺 壺a×c、円脚瓶、壺a 土師器 壺 金属製品 銅鐸 石製品 剥片(燧石) 瓦 類 破片(純目印)	S-213 (SA4287a)	土師器 破片
S-195	須恵器 坏 土師器 破片	S-205 (SE4285) 神内	須恵器 大蓋c3、蓋3 土師器 壺 金属製品 銅鐸 木製品 破片	S-214	須恵器 坏(7c前半) 土師器 破片
S-197	土師器 破片	S-206	土師器 破片	S-215	須恵器 壺 土師器 壺
S-198 (SA4288a)	須恵器 坏、蓋c 土師器 壺、破片	S-207	土師器 破片	S-216	須恵器 破片 土師器 破片
S-199 (SA4288b)	土師器 破片	S-208 (SA4287b)	須恵器 破片	S-217	須恵器 坏c、蓋、壺?、壺 土師器 碗(6c)、高坏、破片 弥生土器 破片 瓦 類 平瓦・丸瓦(格子印)、破片
S-200a (SB4280a)	土師器 坏c	S-210 (SE4290) 灰色土	須恵器 大瓶G、坏c、蓋c、蓋3、壺、皿a 壺 土師器 蓋3、皿a 土製品 ふいご羽口? 瓦 類 平瓦(純目印)、破片(純目印)	S-218	須恵器 破片 土師器 破片
S-200c (SB4280c)	須恵器 蓋3、漆付破片 土師器 破片	S-210 (SE4290) 神内	須恵器 坏c、壺a、蓋3、大瓶c 土師器 大坏c、坏a、坏c、坏d、皿a、壺 弥生土器 燧指 木製品 唐串、木印、不明品 土製品 ふいご羽口 瓦 類 平瓦・丸瓦(純目印) 丸瓦 (その他)	S-219	須恵器 蓋3 土師器 破片
S-200d (SB4280d)	須恵器 坏 土師器 破片 瓦 類 破片	S-210 (SE4290) 神内瓦敷	瓦 類 平瓦・丸瓦(純目印)	S-221	須恵器 坏 土師器 破片
S-200g (SB4280g)	須恵器 坏c	S-210 (SE4290) 高込め	須恵器 坏c、大坏、蓋3、壺、壺、鉢 土師器 坏c、坏c、坏d、蓋3 弥生土器 高坏 瓦 類 平瓦(純目印)、破片	S-222	須恵器 坏、壺 土師器 高坏 瓦 類 破片
S-200h (SB4280h)	土師器 壺 瓦 類 丸瓦	S-210 (SE4290) 神内瓦敷	瓦 類 平瓦・丸瓦(純目印)	S-223	須恵器 蓋3 土師器 破片
S-200k (SB4280k)	土師器 坏c	S-210 (SE4290) 神内瓦敷	瓦 類 平瓦・丸瓦(純目印)	S-224	須恵器 壺 土師器 破片 瓦 類 破片
S-201	須恵器 破片、破片 瓦 類 平瓦(格子印)	S-202	須恵器 蓋3 土師器 破片	S-225	須恵器 坏(7c前半)、坏c、蓋3、蓋c3 土師器 碗、碗c、把手 瓦 類 破片

Tab. 4-7 第170次調査出土遺物一覧表

S-226	瓦 類 破片	S-237	須恵 器 甕 土 師 器 坏a、坏c、甕a、甕c、甕 土 製 品 ふいご羽口 瓦 類 破片(縄目印)	S-246	須恵 器 坏a?
S-227	須恵 器 蓋3 土 師 器 坏 弥生土 器 破片 瓦 類 破片	S-238 (SX4319)	須恵 器 甕a、甕3、円筒甕 土 師 器 破片 土 製 品 ふいご羽口 瓦 類 坏丸瓦(縄目印)	S-247 (SX4321)	須恵 器 甕c3 土 師 器 破片
S-228	須恵 器 坏c、甕3、甕c、甕 土 師 器 甕	S-239	須恵 器 坏 土 師 器 甕a 瓦 類 破片	S-248	須恵 器 甕 土 師 器 破片 瓦 類 破片
S-229	須恵 器 坏 土 師 器 破片 弥生土 器 破片 瓦 類 破片(縄目印)	S-240 (SE4295)	須恵 器 坏a、坏c、甕3、甕c、高坏 土 師 器 坏c(X形前後)、甕、破片 弥生土 器 破片 瓦 類 平瓦(縄目印、格子印) 丸瓦(縄目印)、軒平瓦	S-249	須恵 器 甕 土 師 器 甕 金 属 製 品 鉄腕
S-230 (SA4288a)	須恵 器 坏c、甕c3、高坏群 土 師 器 坏、甕 瓦 類 平瓦、丸瓦(縄目印)	S-240 (SE4295) 褐色土上層	須恵 器 甕、甕3、甕 土 師 器 坏c、甕 土 製 品 とりべ 石 製 品 磨製石器 瓦 類 平瓦(縄目印、格子印)	S-250 (SD4322)	須恵 器 甕3 土 師 器 甕
S-231 (SX4317)	須恵 器 坏c、甕3、甕 土 師 器 坏d?、甕 石 製 品 靴石 瓦 類 破片	S-241	須恵 器 甕 土 師 器 甕 土 製 品 ふいご羽口	S-251	須恵 器 坏 土 師 器 破片 瓦 類 破片
S-232	土 師 器 破片 弥生土 器 破片	S-242	須恵 器 坏c、甕3 土 師 器 甕 瓦 類 破片	S-252	須恵 器 破片 土 師 器 破片 瓦 類 破片(格子印)
S-233 (SX4318)	須恵 器 甕a、甕c3、甕 土 師 器 坏c×甕c、坏d、坏、甕 瓦 類 破片(縄目印)	S-243	須恵 器 坏、甕 土 師 器 破片 弥生土 器 破片	S-254	弥生土 器 甕 瓦 類 破片
S-234	須恵 器 坏c、甕a、甕3、高坏 土 師 器 坏、甕 瓦 類 破片	S-244	須恵 器 甕3 土 師 器 破片	S-255	須恵 器 坏、甕3 土 師 器 破片
S-235	須恵 器 甕3、甕 土 師 器 甕c、甕c(9-10c)、甕 瓦 類 破片(縄目印)	S-245 (SA4288b)	須恵 器 甕3 土 師 器 破片	S-256	須恵 器 坏c、甕?、甕 土 師 器 破片 瓦 類 破片(縄目印)
S-236 (SA4288c)	須恵 器 坏c、甕 土 師 器 破片 瓦 類 破片	S-257 (SK4289)	須恵 器 甕 土 師 器 坏c、丸底坏a 瓦 類 破片(格子印)	S-258	須恵 器 甕 土 師 器 破片 瓦 類 破片
S-239 (SA4291b)	土 師 器 破片				

Tab. 4-8 第170次調査出土遺物一覧表

S-260 (SD4292) 黄褐色土		S-266		S-284 (SK4315)	
須恵器	環、坏c、蓋2、蓋3、鉢、甕、甕	須恵器	蓋3	土師器	破片
土師器	環a、坏d、高坏(古墳)、甕	土師器	破片	金属製品	銅鐸
瓦	類 平瓦・丸瓦(網目印)			土製品	銅墨
				瓦	類 平瓦(網目印)
S-260 (SD4292) 砂層		S-267		S-286	
須恵器	環、坏a、坏c、蓋c、蓋1、蓋3 蓋4、蓋c3、大蓋3、飯a、短頸甕 鉢、高坏、甕a、甕(條付き) 甕、円形飯(銅のみ)、鉢	土師器	破片	金属製品	銅鐸
土師器	環a、坏c、坏d、高坏、甕 短頸甕、ミニチュア土師				
土製品	生産用具?、手づくね小鉢				
弥生土器	甕(板付式)				
石製品	砥石、石製品?、磨平片、刀石				
瓦	類 丸瓦・平瓦(網目印) 軒平瓦・軒丸瓦(網目印)				
S-260 (SD4292) 北砂層		S-270 (SB4294a)		S-288	
須恵器	環a、大坏c、蓋、蓋1、蓋2、蓋3 蓋c3、甕、甕、長頸甕、円形飯	須恵器	蓋3	須恵器	環、甕
土師器	坏d、鉢、把手、鉢、甕	土師器	類?	瓦	類 平瓦
土製品	とりべ				
瓦	類 破片				
S-260 (SD4292) 南砂層		S-270c (SB4294c)		S-289	
須恵器	坏(7c前~)、坏a、坏c、蓋c、蓋1 甕a、長頸甕、甕	須恵器	破片(古墳)	金属製品	銅鐸
土師器	坏a、坏c、坏d、把手、高坏、甕 蓋	瓦	類 破片		
土製品	とりべ、銅型				
石製品	剥片、滑石				
弥生土器	甕、甕(板付式)、甕、甕合				
瓦	類 丸瓦・平瓦(網目印)				
S-261 (SA4293c)		S-275c (SA4293a)		S-291	
土師器	破片	須恵器	破片	須恵器	甕
		土師器	破片	土師器	甕
S-262 (SA4291c)		S-276		S-292	
土師器	破片	土師器	破片	須恵器	蓋3、甕、甕?
		瓦	類 破片	金属製品	銅鐸
				瓦	類 平瓦(網目印)
S-263		S-277		S-293	
須恵器	蓋3	須恵器	甕	瓦	類 丸瓦(格子印)
土師器	蓋3	弥生土器	甕		
石製品	滑石	瓦	類 破片		
瓦	類 破片				
S-264 (SA4293b)		S-278		S-294	
須恵器	甕、破片	土師器	破片	土師器	破片
土師器	破片	瓦	類 破片	金属製品	銅鐸
				瓦	類 破片(網目印)
S-265		S-279		S-295 (SB4298)	
須恵器	破片	瓦	類 丸瓦(格子印)	須恵器	破片
土師器	破片			土師器	破片
瓦	類 平瓦(格子印)				
S-266 (SA4293a)		S-281		S-295d (SB4298d)	
須恵器	甕、破片	土師器	破片	土師器	破片
土師器	破片			瓦	類 平瓦(網目印)、格子印
S-267 (SK4296)		S-282 (SB4298d)		S-296	
須恵器	蓋1、蓋c3、坏a、坏c、長頸甕	黒色土器	A類c	須恵器	甕
土師器	高坏(古墳)			土師器	破片
金属製品	銅鐸			瓦	類 平瓦(網目印)、格子印
土製品	ふいご滑石、銅型				
瓦	類 破片(網目印)				
S-268		S-283 (SK4296)		S-297	
須恵器	破片	須恵器	蓋1、蓋c3、坏a、坏c、長頸甕	須恵器	環、甕
		土師器	高坏(古墳)	瓦	類 平瓦(網目印)、格子印、 丸瓦(網目印)、格子印
		金属製品	銅鐸		
		土製品	ふいご滑石、銅型		
		瓦	類 破片(網目印)		

Tab. 4-9 第170次調査出土遺物一覧表

S-298

土 師 器	破片
-------	----

S-299

須 恵 器	柄c
-------	----

S-300c (SB4310c)

須 恵 器	蓋1
土 師 器	高坏?
瓦	破片

S-300d (SB4310d)

須 恵 器	蓋1、蓋
土 師 器	破片

S-300e (SB4310e)

土 師 器	破片
金 属 製 品	磁押

S-300f (SB4310f)

金 属 製 品	磁押
---------	----

S-300g (SB4310g)

金 属 製 品	磁押
---------	----

S-300h (SB4310h)

金 属 製 品	磁押
土 師 器	伊墨

S-300i (SB4310i)

土 師 器	破片
-------	----

S-300j (SB4310j)

須 恵 器	坏、蓋
金 属 製 品	磁押

S-300k (SB4310k)

須 恵 器	坏c
-------	----

S-301

須 恵 器	蓋
土 師 器	破片
瓦	平瓦(轆目印)

S-302

金 属 製 品	磁押
---------	----

S-305 (SD4301)

須 恵 器	坏c、蓋3、蓋
金 属 製 品	磁押、鉄押
土 師 器	ふいご器口、とりべ
弥 生 土 師 器	破片
瓦	平瓦・丸瓦(轆目印)、破片

S-310d (SB4300d)

土 師 器	破片
-------	----

S-310f (SB4300f)

土 師 器	破片
-------	----

S-315

須 恵 器	坏、坏c、柄
瓦	破片(轆目印)

S-317b (SB4300b)

須 恵 器	坏c
土 師 器	破片

S-320 (SI4305)

須 恵 器	坏、柄、蓋1、蓋3、蓋
土 師 器	器a
金 属 製 品	磁押
土 製 品	ふいご器口、とりべ
瓦	破片

S-320 (SI4305) カマド崩落土

須 恵 器	器
瓦	平瓦

S-321

瓦	破片(轆目印)
---	---------

S-322

土 師 器	坏c
-------	----

S-323

須 恵 器	坏、蓋
土 師 器	器
金 属 製 品	磁押
瓦	破片

S-324 (SK4315)

金 属 製 品	磁押
土 製 品	磚段?

基灰色土

須 恵 器	小坏c、蓋、蓋3、高坏、坏c、陶蓋c3、坏、蓋、蓋c(印帶)、円筒状大皿c、短筒碗、長筒碗、鉢蓋c1、蓋2、破片(轆目印)、坏a
土 師 器	高坏、把子、碗(古墳)、柄c(10c)坏c、皿a、丸坏c、小皿d、大蓋c ミニチュア器台(古墳)、坏c、要洗器蓋
黒色土器A	柄c
黒色土器B	柄c
黒色土器C	柄c; 1-2a×1-4b(1)、破片(2)
その他の音威	李朝?; 徳政? (1)
白 磁	柄; 破片(1)
青 白 磁	柄; 破片(1)
緑 釉 陶 器	柄c (防長瀬) (1)
国 産 陶 器	磁押(1)、蓋(1)、破片(磁押)(1)破片(1)
輸入陶器	磁押; 柄(李朝)(1)
肥前系磁器	青磁器(1)、染付(1)
金 属 製 品	磁押、生産用具、銅製鋳尾鉄押、刀子、鉄釘×工具、破片 銅押?
土 製 品	とりべ、ふいご器口、轆目車 有孔円盤、伊墨?
弥 生 土 師 器	蓋、要付、破片
石 製 品	射打(磨鉢石)、砥石?
瓦	平瓦(轆目印・純目印)、丸瓦 軒平瓦(老明目式)、無文磚 文字瓦「花」、破片(純目印)

暗基灰色土

須 恵 器	坏c、蓋1、蓋a3、蓋
土 師 器	坏、坏c(11c?)、蓋、破片
白 磁	器; 11-1a(1)
金 属 製 品	磁押、鉄押
土 製 品	とりべ
弥 生 土 師 器	蓋、破片
瓦	文字瓦「平井」、丸瓦(純目印) 破片(純目印・轆目印)

青褐色土

須 恵 器	坏c、蓋3、蓋
弥 生 土 師 器	破片
石 製 品	磨鉢石(石磨?)

暗褐色砂質土

須 恵 器	坏c、蓋
土 師 器	破片
金 属 製 品	磁押
瓦	破片(純目印)

Tab. 4-10 第170次調査出土遺物一覧表

淡茶色粘質土

須恵器	坏c、長頸瓶、甕、蓋3、蓋
土器器	小皿(イト?中皿)、高坏(古墳) 坏(イト)、小皿(イト)、破片
金属製品	釧鐲
弥生土器	破片
石製品	剥片(燧石)
瓦	破片(埴子埴)

茶色粘土

須恵器	坏、蓋1、蓋c3、蓋
土器器	破片
金属製品	釧鐲
瓦	破片

茶灰色粘土

須恵器	蓋、蓋2、蓋3、坏(古墳)、坏c、 円面碗、壺蓋、壺(把手)、蓋c3、 甕、蓋、蓋a、小蓋a3
土器器	坏c、蓋c、甕、把手、破片
金属製品	釧鐲
土製品	とりべ、ふいご羽口?
弥生土器	甕、破片
石製品	剥片(燧石)、石匙
瓦	破片(埴子埴・縄目埴)

灰茶色粘質土

須恵器	甕、蓋3、蓋c、小蓋a3、小蓋3 蓋?、坏c、鉢
土器器	把手、蓋1
金属製品	釧鐲
土製品	とりべ
石製品	石鎌(燧石)
瓦	平瓦(縄目埴)

灰茶色粘質土 下層

須恵器	蓋c、蓋1、蓋3、坏c、甕
土器器	鉢、甕、坏、蓋c、破片
金属製品	釧鐲
土製品	とりべ
弥生土器	甕、破片
瓦	平瓦(縄目埴)、埴 破片(縄目埴)

褐色粘質土

須恵器	甕、高坏、坏a、坏a(藤器)、坏d 坏(5c後半)、坏c(7c後半)、蓋3 蓋、蓋c3、蓋1、蓋c、鉢a、蓋a 蓋蓋a、物c(転用破)、円面碗 写付壺(鼠耳?)
土器器	坏c、蓋a、高坏(古墳)、輪(古墳) 短頸壺(須恵器?)、蓋c3、高坏 甕、坏(残鳥V)、坏a、蓋a、破片 横直壺
灰胎陶器	長頸瓶
弥生土器	甕
金属製品	釧鐲
土製品	とりべ
石製品	磁石、黒曜石、石匙
瓦	平瓦(縄目埴、埴子埴)、 丸瓦(縄目埴)、 文字瓦(「安」IV-1b、「平井」)

褐色粘質土(S-240 西トレンチ)

須恵器	坏a、坏c、甕、蓋a、蓋3
土器器	甕
石製品	磁石
瓦	平瓦(縄目埴)

褐色粘質土(S-240 東トレンチ)

須恵器	蓋a、蓋3
土器器	把手
灰胎陶器	長頸瓶?
瓦	破片

褐色茶色粘質土

須恵器	坏c
-----	----

黄白色砂

須恵器	蓋(古墳)、甕
土器器	坏
阿雲流系青磁	輪:1(1)
弥生土器	破片
瓦	破片

淡茶色土

須恵器	蓋1、蓋3、小蓋a3、蓋c、坏c、甕
弥生土器	甕、甕(中期)、甕
石製品	剥片(燧石)
瓦	平瓦(縄目埴)

褐色色土

須恵器	坏a
土器器	破片

茶灰色砂質土

須恵器	坏c、蓋c、蓋a、甕
土器器	坏、甕、破片
瓦	破片

黄茶色土

須恵器	坏(6c後)
弥生土器	破片
瓦	平瓦(縄目埴)

黄土

須恵器	坏c
土器器	甕
石製品	磨製石斧
瓦	破片(縄目埴)

黄土(東段)

須恵器	坏c、甕
土器器	破片
瓦	平瓦、丸瓦

黄土(西段)

須恵器	坏c、甕、蓋1、蓋3
土器器	破片
土製品	人形
瓦	平瓦(縄目埴)

黄土

須恵器	甕、坏c
灰胎陶器	輪c(1)
金属製品	釧製高
瓦	平瓦(縄目埴、埴子埴)、軒平瓦 破片

Tab. 5-1 第170次調査出土遺物計測表

S-2 (SK2457)

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・H _a (イト)	1	001	2	13.4	2.0	9.1	-	-
	2	002	3	14.0	2.5	9.6	-	-
土・小瓶(イト)	1	003	1	7.0	1.1	5.0	○	-

S-10 (SD4262)

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・甕	1	001	2	10.4	2.6+	-	○	-
須・甕3	1	001	3	14.0	2.7+	-	○	-
須・甕3	1	002	4	14.2	2.2+	-	○	-

S-32 (SX4264)

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・甕1	1	001	1	24.1	3.2	-	○	-

S-40 (SK4266)

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・H _a (イト)	1	001	2	12.9	2.6	8.5	○	○
	2	004	3	13.2	2.7	8.9	○	○
	3	005	4	13.5	2.8	9.4	×	○
	4	003	5	14.0	2.8	8.0	-	○
	5	002	6	14.0	2.4	8.4	○	○

S-44 (SK4304)

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・H _c	1	001	1	15.0	5.6	10	○	-

S-45 (SK4306)

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・H _c	1	001	17	-	2.9+	9.2	○	-

S-46 (SB4260f)

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・小H _c	1	001	2	-	2.4+	7.0	○	-

S-48 (SB4260g)

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・大H _c	1	001	3	16.8	5.9	10.4	○	-

S-71 (SX4307)

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・甕3	1	002	18	14.4	4.4	10.4	○	-
	2	001	20	19.6	1.8	-	-	-
須・甕3	1	003	19	14.0	1.8+	-	○	-
須・H _c	1	005	21	14.0	3.4	9.4	○	-
須・H _a (ヘラ)	1	006	22	16.0	1.8	12.4	○	-

S-76 (SK4268)

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・甕3	1	002	4	14.0	2.1+	-	○	-
土・H _a	1	001	5	12.0	3.5+	8.1	-	-

S-80 (SB4270)

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・H _c	1	001	1	-	2.0+	6.0	-	-

A:内縁のナゲ 有○無× B:底状圧痕 有○無×

S-85 (SK4269)

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・甕3	1	001	7	14.4	2.3+	-	○	-
	2	002	6	14.0	1.5+	-	○	-
須・H _c	1	005	8	-	2.0+	8.8	○	-
	2	004	9	-	1.7+	9.2	○	-
	3	003	10	-	3.5+	9.0	○	-

S-90 (SK4271)

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・H _c (ヘラ)	1	001	12	13.0	3.4	8.7	○	-

S-91 (SX4308)

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・H _c	1	001	26	14.0	5.3	9.0	○	-

S-95 (SK4272)

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・H _a (イト)	1	001	7	7.2	1.3	4.9	-	-

S-100_a (SA4275)

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・甕3	1	001		小片				

S-110 (SD4262)

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・甕3	1	001	6	14.0	1.1+	-	○	-

S-114 (SX4309)

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・H _c (ヘラ)	1	001	27	14.0	3.9	8.4	○	-

S-126 (SD4276)

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・H _c	1	001	5	14.0	5.0	9.6	○	-

S-127 (SK4271)

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・甕3	1	001	11	13.0	2.1	-		

S-130f

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・甕3	1	001	5	-	-	-	○	-

S-138 (SX4312)

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・甕3	1	001	29	14.0	2.5+	-	○	-

S-160 (SX4279)

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・甕3	1	006	8	11.7	0.9	-	○	-
	1	007	9	13.0	1.7	-	○	-
	2	008	10	15.2	2.1	-	○	-
須・H _c	3	009	11	20.0	1.7+	-	○	-
	1	004	12	9.4	3.4	6.4	○	-
	2	003	13	-	4.3+	10.2	○	-
	3	002	14	-	2.8+	9.8	○	-
4	001	15	16.4	3.5	11.7	○	-	

Tab. 5-2 第170次調査出土遺物計測表

S-200c (SB4280c)

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
甕・甕3	1	001	4	14.8	1.7+	—	○	—

S-200g (SB4280g)

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
甕・甕c	1	001	7	—	4.3+	9.2	○	—

S-200h (SB4280h)

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
甕・甕c	1	001	6	—	4.2+	12.3	—	—

S-205 (SB4285) 明灰色土

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
甕・甕c3	1	002	2	10.0	1.7+	—	○	—
甕・甕c	1	001	4	—	2.2+	7.0	○	—

S-205 (SB4285) 柿内

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
甕・大甕3	1	001	3	18.8	1.1+	—	○	—

S-210 (SB4290) 柿内

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
甕・甕c	1	017	16	—	1.3	10.1	○	—
甕・甕a	1	016	17	14.0	2.0	11.0	○	—
土・甕a (へう)	1	001	1	13.0	3.2	7.7	×	×
	2	006	2	13.0	3.7+	7.2	—	—
	3	044	3	13.0	3.5	8.6	○	—
	4	012	4	13.5	3.2	8.2	○	○
	5	002	5	14.0	3.9	8.1	○	—
	6	013	6	14.4	3.7	9.1	○	○
	7	005	7	15.6	3.9	7.4	—	—
土・甕a	1	003	8	13.4	4.0	7.4	○	—
	2	010	9	16.0	4.2	7.7	—	—
土・大甕c	1	011	10	18.1	7.1	9.0	○	—
土・甕a	1	007	11	13.5	2.1	10.2	○	—
	2	014	12	15.8	1.8	10.2	○	—
	3	004	13	15.8	2.0	12.3	—	—
	4	008	14	16.0	2.2	10.4	—	—

S-210 (SB4290) 灰込め

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
甕・甕3	1	002	5	14.0	1.2+	—	—	—
甕・大甕	1	003	6	18.0	6.8+	—	—	—
土・甕3	1	001	3	16.4	2.0+	—	—	—
土・甕a	1	004	4	16.2	4.0	7.8	—	—

S-210 (SB4290) 灰色土

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・甕a	1	001	1	13.0	1.3	7.6	—	—

S-230 (SA4288a)

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
甕・甕c3	1	001	3	14.0	3.1+	—	○	—

S-231 (SX4317)

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
甕・甕3	1	001	30	14.2	0.8+	—	○	—

S-233 (SX4318)

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
甕・甕c3	1	001	32	13.4	2.5	—	○	—
土・甕c3	1	002	31	—	1.6+	8.0	—	—

S-238 (SX4319)

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
甕・甕a	1	001	33	14.0	1.4	11.2	○	—

S-240 (SB4295)

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・甕a	1	001	7	11.0	2.0	6.8	○	—

S-247 (SX4321)

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
甕・甕c3	1	001	35	14.4	1.6	—	○	—

S-250 (SD4322)

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
甕・甕3	1	001	9	14.0	1.9	—	—	—

S-260 (SD4292) 黄褐色土

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
甕・甕c	1	002	2	14.2	5.0	9.1	○	—
土・甕a	1	001	1	13.6	3.2	8.4	—	—

S-260 (SD4292) 砂埴

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
甕・甕3	1	014	2	13.2	2.2+	—	—	—
	2	012	3	14.4	1.8	—	—	—
	3	010	4	18.0	3.5	—	—	—
	4	004	5	24.0	1.3+	—	—	—
甕・甕a	1	006	6	12.0	3.7	7.8	○	—
甕・甕c	1	002	8	11.0	3.6	7.6	—	—
	2	008	7	11.8	3.2	9.1	○	—
	3	007	9	—	3.6+	9.4	○	—
甕・甕c	1	020	10	17.1	5.0+	—	○	—
土・甕a	1	011	1	15.1	3.6	7.7	—	—

S-260 (SD4292) 北砂埴

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
甕・甕c3	1	002	14	13.6	2.6	—	—	—
	2	004	15	15.0	3.4	—	○	—
	3	001	16	15.6	2.5	—	○	—
甕・甕a	1	003	17	12.2	3.4	9.2	—	—
甕・甕c	1	005	18	—	5.2+	12.2	—	—

S-283 (SK4296)

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
甕・甕c3	1	001	15	15.1	2.8	—	—	—
	2	003	16	16.2	2.0+	—	—	—
	3	004	17	17.0	1.9+	—	—	—
	4	002	18	17.0	1.9+	—	—	—

S-305 (SD4301)

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
甕・小甕3	1	002	7	11.0	1.0+	—	○	—
甕・小甕c	1	001	8	—	2.4+	6.8	—	—

Tab. 5-3 第170次調査出土遺物計測表

S-320 (S14305)

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
瓶・甕c	1	003	1	12.8	1.2+	—	—	—
瓶・甕	1	002	2	16.0	4.1+	—	—	—

赤灰色土

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B	
瓶・甕c	1	021	1	13.6	2.8	7.2	—	—	
瓶・甕c	1	005	2	14.0	2.5	—	○	—	
		2	004	3	14.6	3.0	—	○	—
		3	037	4	15.0	1.9+	—	○	—
瓶・甕c	4	023	5	16.0	2.5	—	○	—	
		1	006	6	—	1.9+	—	○	—
瓶・甕c	1	018	7	16.2	1.9	—	○	—	
瓶・甕a	1	010	8	12.4	3.5	8.0	○	—	
瓶・甕c	1	035	9	10.8	5.2	7.8	○	—	
		2	034	10	—	2.7+	7.2	○	—
		3	009	11	10.9	3.9	6.3	○	—
		4	036	12	14.1	4.4	9.0	○	—
		5	014	13	15.4	5.6	9.0	—	○
		6	016	14	—	5.0	10.0	○	—
瓶・甕a	1	008	15	13.0	1.2	10.0	○	—	
土・火皿c	1	039	21	—	1.8+	—	—	—	
土・小皿a	1	019	22	9.9	1.3	7.6	—	○?	
土・甕c	1	022	23	—	2.5+	9.0	—	—	
土・丸底甕c	1	017	24	13.6	4.9	—	—	—	

赤褐色粘土

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・甕a	1	001	34	13.0	2.2	10.2	—	—
		2	002	35	13.0	2.4	10.0	—

赤色粘土

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
瓶・甕c	1	001	37	14.0	2.1+	—	○	—

赤灰色粘質土

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
瓶・甕a	1	005	36	10.0	1.7	—	○	—
瓶・甕c	1	004	38	14.0	1.0+	—	○	—
瓶・甕c	1	001	39	15.0	3.7	9.0	○	—

赤褐色粘質土

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
瓶・甕a	1	002	2	12.0	1.2	—	○	—
瓶・甕c	1	003	3	14.0	1.5+	—	○	—
瓶・甕c	1	006	4	—	2.3+	10.2	○	—
		2	001	5	14.0	6.2	10.0	○

黒灰色粘質土

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B	
瓶・甕c	1	014	2	17.0	2.0	—	○	—	
		2	017	4	14.8	1.5	—	○	—
		3	016	5	16.0	1.3+	—	○	—
		4	018	6	16.0	3.4	—	○	—
		5	019	7	16.1	2.3	—	○	—
		6	020	8	16.4	1.4	—	○	—
		7	015	9	18.0	0.8+	—	○	—
瓶・甕c	1	022	1	12.8	1.6	—	○	—	
		2	021	3	17.6	1.2	—	○	—
瓶・甕a	1	028	10	10.8	2.7	6.8	○	—	
		2	002	12	12.6	3.2	7.7	○	—
瓶・甕c	1	003	13	12.0	3.8	7.0	○	—	
		2	007	14	—	2.6+	7.2	○	—
		3	012	15	—	1.5+	9.1	○	—
		4	006	16	—	3.2+	10.0	○	—
		5	008	17	—	3.6+	9.0	○	—
		6	009	18	—	3.2+	10.4	○	—
		7	004	19	—	3.7+	9.5	○	—
		8	005	20	—	5.0+	10.0	○	—
		9	024	21	16.8	5.6	10.8	○	—
		10	013	11	14.0	2.3	8.5	○	—
瓶・甕a	1	030	24	13.0	2.1	10.2	○	—	
		2	025	25	14.4	1.9	11.6	○	—
		3	029	26	14.8	2.2	11.8	○	—
		4	027	27	15.0	2.2	11.6	○	—
		5	026	28	16.0	2.0	13.0	○	—
		6	036	29	—	0.9+	15.2	○	—
土・甕a	1	032	36	14.0	3.8	8.0	—	—	
土・甕a	1	033	35	13.0	3.0	9.4	—	—	

黒灰色粘質土(S-240西トレンチ)

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B	
瓶・甕c	1	002	43	13.0	1.7	—	○	○	
		2	004	44	14.0	2.6+	—	○	—
		3	001	45	18.0	1.5	—	○	—
瓶・甕a	1	005	46	13.2	3.8	8.8	—	—	
瓶・甕a	1	003	47	14.8	2.0	11.6	—	—	

黒褐色粘質土

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
瓶・甕c	1	001	1	14.2	4.1	10.5	○	—

黒白色砂

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
瓶・甕c	1	001	—	13.2	4.4	10.3	○	—

赤褐色土

器種	番号	R.	図版番号	口径	器高	底径	A	B
瓶・甕a	1	001	—	11.9	1.5	—	○	—

Tab. 6 SE4290井戸枠計測表

図版番号	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	R-番号
Fig.49-24	井戸枠 15	80.3	20.0	6.7	013
Fig.49-25	井戸枠 2	71.0	18.9	8.5	005
Fig.49-26	井戸枠 30	71.5	20.7	8.8	014
Fig.49-27	井戸枠 38	108.3	23.7	12.7	026
Fig.49-28	井戸枠 28	84.7	20.1	8.6	025
Fig.49-29	井戸枠 19	78.6	26.3	10.6	028
Fig.49-30	井戸枠 11	92.5	20.2	5.8	019
Fig.50-31	井戸枠 4	75.1	9.2	2.3	020
Fig.50-32	井戸枠 18	67.8	11.4	5.5	001
Fig.50-33	井戸枠 21	70.2	14.3	6.2	004
Fig.50-34	井戸枠 40	72.2	14.4	6.2	017
Fig.50-35	井戸枠 45	72.5	15.5	6.4	011
Fig.50-36	井戸枠 6	72.7	15.7	9.7	012
Fig.50-37	井戸枠 32	79.1	13.8	8.7	016
Fig.50-38	井戸枠 23	78.0	11.3	6.2	015
Fig.50-39	井戸枠 24	78.9	12.2	8.4	006
Fig.50-40	井戸枠 10	89.8	15.0	9.2	008
Fig.51-41	井戸枠 18	74.3	17.7	3.2	002
Fig.51-42	井戸枠 5前	82.3	17.0	1.8	022
Fig.51-43	井戸枠 26	79.8	17.5	1.9	009
Fig.51-44	井戸枠 13	83.3	17.8	2.0	021
Fig.51-45	井戸枠 21	35.6	15.3	2.0	003
Fig.51-46	井戸枠 1	50.7	15.3	1.3	007
Fig.51-47	井戸枠 9	67.4	12.7	1.9	010
Fig.51-48	横棧 34	89.9		6.7	027
Fig.51-49	横棧 36	91.2		5.1	018
Fig.51-50	横棧 35	94.6		4.6	024
Fig.51-51	横棧 37	91.6		4.9	023

(2) 大宰府史跡第170次調査出土の木印をめぐって

松川 博一

はじめに

大宰府史跡第170次調査で検出された9世紀初頭に廃絶した木組みの井戸SE4290の中から木製の印章(木印)が出土した。調査地は、大宰府政庁跡から西へ約450mほどのところで、大宰府関連の役所が建ち並ぶ推定府庁域に接している。

古代木印の出土例としては6例目にあたり、宮都以外からみつかったのはこれがはじめてである。しかも、これまでの木印が一字印もしくは印字が不分明であったのに対して、印文の二文字がはっきりと判読できる。そのため、比較的にその性格を窺い知ることが可能である。

本稿では、当該木印がいかなる性格を有した印章であったかを推考するとともに、このひとつの木印の周辺にあるいくつかの問題について言及したい。ひとつは当代における私印の普及の問題、そして、もうひとつは古代の印章における木印の位置づけの問題である。

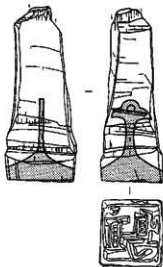


Fig.66 大宰府史跡第170次調査出土木印実測図(1/2)

印字の解説

木印の印面には横文で2文字が隔刻されている。印影でいうと、右の字は「直」の異体字の「直」で、奈良・平安時代の木簡や文書において一般的に用いられていた字形である。左の字は「嶋」を若干簡略にした文字であり、正倉院文書にみえる「生江息嶋」の印影の「嶋」の字と近似している¹⁾。木簡の文字と比べるとより字画の省略が見受けられる。印文における字画の省略は、正倉院文書にみえる「経所勘印」の印影に顕著である²⁾。字体についていえば、篆書体とはほど遠く、楷書体の類に入るものである。

横2文字の出土古代印は、滋賀県守山市服部遺跡出土の銅印と大和文華館所蔵の銅印の例がある。それぞれ印文を印影の右の文字から記すと「乙貞」と「漆豊」となる。しかしながら、縦書きが基本である当時において、横書きの印文を印影の左右いずれから読むべきかについては検討の必要があろう。実際、伝世印の「直漢」印については、右から「直漢」と読むという会田富康氏の意見³⁾と、左から「漢直」と読むという木内武男氏の意見⁴⁾の両様が存在する。

奈良時代末とされる銅印「乙貞」については、当時の人名に乙麻呂・乙繼・乙國など「乙」を名前の第1字目とする例が多いことから右から「乙貞」と読むのが妥当と考える。「漆豊」については、逆に豊嶋・豊成・豊足など「豊」を名の第1字目とする古代人名が多く、当時の

名前として「漆豊」は落ち着きが悪い。これについては、茨城県那珂郡大宮町小野遺跡出土の銅印「丈永私印」や新潟県上越市江向遺跡出土の銅印「高有私印」についての平川南氏の解釈⁹⁾が参考となる。氏は、地名や在地豪族の氏名から前者を「丈部永〇」の私印と考え、後者を「高志君(公)有〇」のものとして推定されている。銅印「漆豊」の場合も「私印」の語は含まれないものの、同じ構成で「漆」と「豊」の二字が結びついた可能性がある。漆〇豊〇を略して「漆豊」と表現しうる名前の好例としては、天平16年(744)の優婆塞貢進文に、平城京左京九条四坊戸主漆部連虫麻呂の戸口として漆部連豊嶋の名がみえる⁹⁾。上述のように考えれば、「漆豊」も「乙貞」と同じく、印影の説順として右から「漆豊」と読んで差し支えない。数少ない事例から導き出された結論ではあるが、横2文字の印文は印影の右から読むべきことが確認できる。したがって今回の木印の場合も右から「直嶋」と読んでしかるべきであろう。

印文の解釈

印文の解釈は、印面に刻まれた数少ない文字からその意義を追究しなければならないため、あらゆる可能性を模索する必要がある。

古代の現存印章および印影・刻印の印文を内容で分類すると、以下にあげる四つに大別することができる。

1. 官司名・組織名を刻んだもの。官印、公印、準公印など。
2. 個人名・家名を刻んだもの。いわゆる私印、家印。
3. 地名を刻んだもの。瓦などの施印。
4. 吉祥句あるいは記号的な文字を刻んだもの。吉語印。

分類1と4に関しては、当時の史料に「直嶋」に結びつくような官司および組織の存在を証明あるいは類推させるようなものはなく、また、「直嶋」あるいは「直」「嶋」に吉祥や魔除けといった特別の意味を見いだすことはできない。

3の地名については、「嶋」の一字を含むことからその可能性を臭わすが、9世紀まで通る地名として「直嶋」の名は見いだすことはできない⁷⁾。印文に文字や偏の省略が多いことを考慮すれば、大宰府の管内である値嘉嶋を意味する可能性も検討する必要がある。つまり、値嘉嶋の「嘉」を略し、「直嶋」と表現した可能性である。古代において、「値」と「直」は表記上、一般に置換可能である。値嘉嶋の表記例としては、『古事記』の「知駕嶋」⁸⁾、『日本書紀』の「血鹿嶋」⁹⁾、『続日本紀』の「値嘉嶋」¹⁰⁾、「知駕嶋」¹¹⁾、『続日本後紀』の「値賀嶋」¹²⁾がみられるが、「直嘉嶋」あるいは「直嶋」の例は今のところ確認できない。行政区画としての値嘉嶋は、貞観18(876)年3月9日、肥前国松浦郡値嘉郷が肥前国から独立して成立する¹³⁾。したがって、9世紀初頭においては、行政区画としての値嘉嶋ははまだ成立をみていない。それ以前にみられる値嘉嶋の表記はいずれも値嘉郷を構成している五島列島諸島の汎称と考えるべきであろう。そのように考えると、当時において行政的な側面で値嘉嶋を意味する

印章の必要性は乏しいというしかない。

地名のみの印文としては、武蔵国分寺跡出土文字瓦の刻印例がある¹⁴⁾。それらは武蔵国内の郡・郷名を刻印したものである。一郡の極印を取り上げても那珂郡の場合「那印」「那」「中」「仲」など4種ある。郷名にしても荒葛郷の「荒」、白方郷の「白方瓦」、大井郷の「大井郷」など印文に一定の表記があるというわけではない。おそらく、この極印は、瓦を質進する上での便宜から瓦の質進主体によって記号的あるいは符牒的に付されたものであろう。この木印が値嘉嶋生産の瓦あるいは土器などに押印するためのものとするならば、質進元である値嘉嶋にあってしかるべきであり、大宰府に所在する必要はない。「直(嘉)嶋」との理解は、いづれにしても難しいと判断せざるをえない。

順当な理解に立てば、2の個人名・家名を刻んだものとするべきであろう。その場合、次に挙げる可能性が考えられる。

1. 姓のみを刻んだ家印
2. 名のみを刻んだ個人印
3. 姓と名の第一字目の組み合わせを含め、姓・名ともに刻んだ個人印

1については、見るかぎり9世紀までの氏族名に直嶋氏は見当たらず、その家印とする理解は現在のところ見送るべきであろう。

2の類例として挙げられるのは、正倉院文書にみられる調足万呂の「足万」印¹⁵⁾や石川宮衣の「宮衣」印¹⁶⁾である。先にみた銅印「乙貞」もこの例であろう。某直嶋の私印と考えた場合、その姓が問題となるが、残念ながら当時の大宰府に関係する史料の中に直嶋の名を見いだすことはできない。直接の関係はないが、平城京の長屋王家木簡の中に「羽咋直嶋」の名を記したものが3点みられる¹⁷⁾。羽咋氏は、能登国羽咋郡羽咋郷を本拠とした羽咋国造の後裔氏族で、『新撰姓氏録』右京皇別に「羽咋公。同(註一垂仁)天皇皇子磐衝別命之後也」(註は筆者)とみえる。したがってカバネは知るところでは「公」であり、羽咋直嶋の嶋という人物ではなく羽咋氏の直嶋という人物と考えるべきであろう。これにより「直嶋」という名の存在は確認できたが、木印の主「直嶋」に関していえば、姓をはじめとしてそれ以上の特定は不可能である。つまり印文の解釈のひとつとしては、某直嶋の印との理解がある。

3については、先にみた銅印「丈永私印」「高有私印」や「漆豊」に対する解釈が参考となる。当該木印の場合も同じ構成で「直」と「嶋」の二字が結びついたとする解釈も当然成立の余地はある。古代にみえる「直」を第一字目とする氏名としては、直氏や直道氏・直尻家氏が見える。直氏はのちに詳論するとして、直道氏は、河内地域を本拠とする高句麗系渡来氏族で元は狛人氏を名乗り、貞観14(872)年5月に直道宿禰の氏姓を賜ったことにはじまる¹⁸⁾。従って9世紀初頭には存在しない氏姓である。もうひとつの直尻家氏は、『新撰姓氏録』和泉国神別にみえる紀直氏系氏族で、その本拠地は河内国八上郡直尻村(現大阪府堺市八上町付近一帯)に比定されている。しかし、一族の人名および氏姓の成立年は一切伝わっていない。直尻

家氏と大宰府あるいは西海道を結びつける手がかりは見当たらないが、今後の新史料による「直」を冠する氏名の発見も含めて、「直尻家嶋〇」あるいは「直〇嶋〇」の印章である可能性も皆無とはいえない。ちなみに「嶋」を第1字目にもつ名は、奈良時代の戸籍を通覧すると嶋をはじめ嶋手・嶋麻呂・嶋足・嶋井など多く確認できる。

「直」を第1字目にもつ三氏の中で最も可能性が高いのは直氏である。直氏は文字通りカバネの直に由来する氏名で、紀伊国名草郡・壱岐嶋・対馬嶋の3地域に分布するとされている¹⁹⁾。木印の出土地からすれば、大宰府管内である壱岐嶋・対馬嶋の直氏に絞られる。しかし、その場合でも壱岐嶋・対馬嶋の地方豪族の印章が大宰府しかも大宰府官衙周辺域に所在したのかという説明が必要であろう。

直氏について

壱岐嶋・対馬嶋の直氏は、それぞれ『日本書紀』顕宗天皇3年条に神事に奉仕したとされる「壹伎縣先祖押見宿禰」と「對馬下縣直」の後裔と考えられている。壱岐嶋の直氏についての確かな史料は、『続日本紀』宝龜3年(772)12月壬子6日条に節婦として、壱岐郡の人直玉主賣の名が見えるのみである。当時、夫婦別姓であったことを考えると、直氏が在来の氏族として壱岐嶋に分布していたという確証にはならない。別に壱岐嶋に関係があると考えられる氏族として、壱岐直氏の存在が確認できる。

一方の対馬嶋の直氏は、『日本文徳天皇実録』天安元年(857)6月庚寅25日条に、上縣郡擬主帳卜部川知麻呂と下縣郡擬大領直浦主が党類300余人を率いて嶋司館を襲い守立野正岑を射殺したという記事がみえ、また翌年の『日本三代実録』同2年12月乙未8日条には同事件の首謀者として上縣郡擬少領直仁徳と下縣郡擬大領直氏成の名がみえる。島内両郡の郡司が呼応して国府を襲うという前代未聞の事件の原因について官撰の正史は口を閉ざしているが、嶋司の圧政に対する島民の反乱ではなかったかと想定されている。ここには、在地の不満を結集して島司と対峙する郡領氏族の姿が窺える。

直氏にはもうひとつの特記すべき性格がある。それは亀トを家業とする卜部としての側面である。職員令神祇官条集解古記所引の大官官員令別記によると、神祇官に属する卜部は、伊豆国・壱岐嶋・対馬嶋上県郡・同下県郡の4地域の出身者からとることになっており、それぞれ国造卜部各1名の下に国造直丁2名・国造厨1名と京卜部7～9名(伊豆国島直には卜部2名)・京厨3名で編成されることになっている。少なくとも古記の成立したとする天平10年(738)以前に、壱岐嶋ならびに対馬嶋両郡からの卜部および直丁・厨丁の貢進が制度化されていたことになる。『延喜式』臨時祭条には、卜部の定員二十人の内訳として「伊豆五人、壱岐五人、対馬十人」と記す。また、『新撰龜相記』は、「四国の卜部」に数氏ありとして、壱岐嶋卜部に卜部・土2氏、対馬嶋上県郡卜部に直・卜部2氏、同下県郡卜部に直・卜部・夜良直3氏を挙げている。これによれば、対馬嶋上県・下県両郡からは、直氏が神祇官の卜部として中

中央に出仕していたことになる。先にみた天安元年の国司襲撃事件の背景についても、過重な銀買納負担への不満のほか、事件の四ヶ月前、対馬嶋司によって中央に出された卜部厨丁の対馬嶋からの派遣停止の申請に対して、直氏がみづからの伝統的な卜部支配の危機を感じ、一族の命運をかけて反乱に立ち上がったとする解釈もされている²⁰⁾。

『日本三代実録』貞観9年(867)8月丁亥21日条には、皇太后宮宮主直千世麿・齋院宮宮主直伊勢雄等5人が直宿禰賜姓をうけている記事があり、『同』元慶3(879)年11月25日条には同族とみられる宮主直宿禰忠則の名がみえる。宮主とは、神祇官の卜部を率いて、龜卜、大赦等の解除、諸祭祀への供奉を行う官人であり、卜部の中から特に卜術に長けた者が選ばれた²¹⁾。『新撰龜相記』に従えば、神祇官卜部として出仕している直氏は、対馬嶋出身の直氏において考えられない。千世麿に関しては、「歌荒洲田卜部伊伎氏本系帳」の副題をもつ『松尾社家系図』にみえることから老岐嶋の直氏出身とする意見²²⁾もあるが、「同系図」が歌荒洲田卜部家の秘本を素に江戸時代初期に編集されたもので、後世の作為と混同がみられるとの指摘²³⁾もある。特に9世紀部分の系図については、他系に属する卜部の筆頭者を加した可能性が高く、信憑性に欠ける。やはり、天長7年(830)8月撰と伝えられる『新撰龜相記』の記述を採用し、直宿禰賜姓をうけた千代麻呂等は対馬出身者とみるべきであろう。ちなみに老岐出身の中央神祇官僚としては、石田郡を本貫地とする宮主卜部是雄、神祇権少史卜部兼孝と出身郡不明の伊吉卜部年麻呂が確認できる。対馬嶋の直氏・老岐嶋の卜部氏ともに中央で活躍する神祇官僚が窺える。老岐・対馬嶋は、西海の離島でありながら卜部の進上を通じて中央と深い関係を有していたことが確認できる。

実は、同様の関係が大宰府との間にも成立していたようである²⁴⁾。『八幡宇佐宮御託宣集』²⁵⁾と『石清水文書』²⁶⁾の中に、そのことを示唆する史料が存在する。ここに『八幡宇佐宮御託宣集』所収の宝亀4年(773)の豊前国司解を示す。

豊前国司解 申請 處分事

應解及任權宣宮司状

一、可解二人

權宣正六位下辛嶋勝興曾女・宮司外正八位下宇佐公池守、

可任三人、權宣大神朝臣少吉備賢 年十二、宇佐郡向野郷戸主外從五位下大神朝臣田麻呂戸口

右、曾大神辛嶋二氏童女ト食合

祝辛嶋勝龍麻呂 年四宇佐郡封戸麻戸主

右、依府去神護景雲三年十一月六日符任用、未被官府矣、

大宮司外從五位下大神朝臣田麻呂 年五十二

右、曾權當郡大神辛嶋二氏等ト食合、件田麻呂、加以得田麻呂辭狀偽、自先祖大神比岐至于田麻呂、為祝奉仕并堂佰玖拾箇歳、又以去勝寶元年任神主、奉仕七箇年者、因茲覆勸實矣、

以前、頃年之間、八幡大神禰宜宮司人等、寄辭神託、屢有妖言、非止擾亂國家、兼有詐偽朝廷、仍請府使主神從七位下中臣朝臣宅成・卜部外大初位上酒人從・大初位下直弟足・無位卜部道作及國守從五位下和氣宿禰清麻呂・介正六位上紀朝臣馬養・兼正六位上山田連韓國・目從六位上川原連度津等、俱向神宮、卜定如件、仍錄事狀、附史生從七位下子部宿禰乙安、謹聞府裁、謹解、

寶龜四年正月十八日 從六位上行河原連度津

從五位下行和氣宿禰清麻呂

大宰府使

主神從七位下守中臣朝臣宅成

この史料によれば、宝龜4年(773)正月、宇佐神宮の禰宜・宮司等が虚偽の託宜を行ひ人心を惑わしているという豊前国の報告を受けて、大宰府使の大宰主神ともに3名の卜部がその実否と神官更迭の是非を定めに宇佐神宮へ出向いたことがわかる。当時の主神は中臣宅成であり、随従の卜部は卜部酒人・直弟足・卜部道作の3名であった。『石清水文書』によると、卜部酒人・直弟足兩名が対馬嶋出身の卜部であり、卜部道作が老岐嶋出身であることが確認できる。直弟足をはじめ彼ら卜部がいかなる立場で本件の卜定に参加したのかが問題になろう。それが、恒常的な主神の下僚として任にあつたのか、それとも臨時的に両嶋の卜部氏族として召集されたのかということである。時代は多少下るが、『類聚三代格』所収の天安3年(859)3月13日太政官符には対馬嶋より出仕の「在京及府卜部」厨丁の確保が問題にされている。この府卜部は、いうまでもなく大宰府の卜部を意味し、大宰主神の下僚と考えて間違いないであろう。少なくとも天安3年以前に対馬嶋から大宰府への卜部の番上が制度化されていたことが確認できる。では、史料の宝龜年間ではどうであろうか。先に示した宝龜4年の豊前国司解の中で「府使主神從七位下中臣宅成、卜部外大初位上酒人、從(外カ)大初位下直弟足、無位卜部道作」と列記されている。なぜか卜部酒人だけが、他の「官位+姓+名」の表記とは違い「姓+官位+名」の順で記されている。ここでの「卜部」は姓を意味するのではなく、後に続く三名に掛かり、大宰主神に対応して三者の職名である卜部、つまり府卜部を意味すると考えられる。令の規定において、大宰府には中央の神祇伯にあたるものとして主神が置かれ、大宰府の諸祭祀を掌っていた。しかし、主神には神祇伯にみられる「卜兆」という職掌とそのため職員である「卜部」の規定がない。おそらく、大宰府官制の整備の過程で、中央制度にならぬ老岐・対馬からの卜部の番上が制度化されたのであろう。定員は、宝龜4年の例から老岐嶋と対馬嶋上県郡・下県郡から各1員、合計3名であったと考えられ、その定員の比は、「延喜式」の神祇官卜部の規定である「老岐五人、対馬十人」(老岐:対馬=1:2)と同じである。加えて中央同様に出身氏族が特定されていたとするならば、宝龜4年の例から老岐嶋は卜部氏、対馬嶋は直・卜部両氏ということになる。これも『新撰龜相記』の神祇官卜部輩出氏族の記述と矛盾はない。前掲史料にみえる直弟足は、大宰主神の下僚である「府卜部」として対馬嶋か

ら大宰府に上番していた人物と考えてよいであろう。このことは、対馬嶋の直氏が少なくとも8世紀後半から9世紀中葉まで府卜部として大宰府に出仕していたことを示している。

次に、直氏が大宰府関係の文書に姿を現すのは、永保2年(1082)の文書²⁷⁾であり、そこには卜部ではなく、大宰府の大典としてみえる。そののちも寛治元年(1087)の大典直(名欠)²⁸⁾、長承元年(1132)の監代直(名欠)²⁹⁾、長治2年(1105)の府宰直為末³⁰⁾というように、府官や在庁官人の名の中に散見する。11世紀から12世紀にかけては、府官の土着化と在地勢力の府官化が進行している時期である³¹⁾。おそらく、対馬嶋から上番していた直氏が大宰府に土着し、府官化した結果であろう。

木印が姓・名ともに刻んだものとするならば、対馬嶋から大宰府に「府卜部」として上番していた直氏の嶋という人物(直嶋)、あるいは嶋を名の第一字目にもつ人物の名を刻したものの(例えば、直嶋麻呂・直嶋足など)である可能性が高い。

あわせて、直氏は、西海の離島でありながら卜部の進上を通じて中央と深い関係を有していた。他の西海道の地方豪族に比べ、時間的にも立場的にも中央の先進文化に触れる機会に恵まれていたことが想定される。それは印章という文化についても例外ではなかったであろう。

私印の普及

木印が廃棄されたと考えられる9世紀初めは、律令にもとづく印章制度が施行されていた時代であり、内印(「天皇御璽」)をはじめ外印(「太政官印」)・諸司印・諸国印といった令制印たる官印があった。公文書の手続きを規定した公式令には各印の印面の寸法をはじめ用法・押印箇所まで詳細に規定している。当時の押印様式は、文面の事状・物数・年月日・署名・料紙の縦ぎ目・駅鈴伝符の刻数部分に押印するよう定められており、ほぼ公文書全面に印が押された。押印の目的は、公文書の効力を保証するとともに、公文書の偽造および内容改ざんを防止することにあった。また、それらの印章は、それぞれの身位・職位およびそれにもなう権能を象徴するものでもあった。そのため、内外印は、政変時には駅鈴とともにその所在が関心

Tab. 7 令制印章の大きさ

名称	印文例	印面規格<天平尺>	(cm)	種別
内印	「天皇御璽」	方3寸	約8.9	官印(令制印)
外印	「太政官印」	方2寸5分	約7.4	官印(令制印)
諸司印	「中務之印」「大宰之印」	方2寸2分	約6.5	官印(令制印)
諸国印	「筑前国印」「大倭国印」	方2寸	約5.9	官印(令制印)
諸郡印	「御笠郡印」「児湯郡印」	(方1寸~)	約3.0~	公印(準令制印)
軍田印	「御笠軍田印」「遠賀軍田印」	(方1寸4分)	約4.2	公印(準令制印)
諸郷印	「伊保郷印」「次田郷印」	(方1寸1分)	約3.3	公印(準令制印)

*印面規格は養老公式令の数値、()は現存印の数値

事とされ、国印は国司交替の時に国倉の端とともにその授受が重要な儀礼とされた。他に官印に準じてつくられた諸郡印・倉印・軍団印・僧綱印などの公印もある。

官公印の特徴としては、印材は青銅で、印面の形状は方形、印面には陽刻の篆書体で4文字刻まれ、最後は「印」（「璽」）で結ぶこと、印文の内容は、内印は別格として全て官司印（組織印）であり官職印はみられないこと、印面の寸法は、官司の等級や権能に応じて一定の階級性を有すること（Tab. 7 参照）などが挙げられる。これに照らして木印を検証すると印材・印字数・内容の相違から公印ではなく私印であることは自明である。

令制において、私印の使用は認められていない。特例として天平宝字2年（758）には藤原仲麻呂の恵美家印³²⁾、天平神護元年（765）には道鏡の私印の公的使用が認められている³³⁾。また、8世紀中頃の解や送銭文には私印を押したものがある（Tab. 8 参照）。これらは民間あるいは官司内部で交されたいわば私文書にみられるものであり、公文書について定めた令規定に抵触するような性格のものではない。内容的には、1の勸物に関する解文、2の米進上を申し出た解文、3の京への運米遅延の愁状、4の車馬功賃申請の解文、5の未納租報告の解文、6の小塔建立の用材に関する解文、7の写経に関する手実、8の土地代の送銭文と多様である。押印の目的は押印者の責任の下に作成された文書であることを保証するとともに、数量等の内容改竄を防止することにあつたと思われる。特記すべきは、私印を使用している階層の広さである。聖武天皇の私印と考えられている「松宮内印」「善光」「元」印を含めれば、天皇から取者（「御馬従仕」）・画師・船頭（「桴領」）・経生にいたるまで私印を使用していたことが窺える。地域的には鳥部連豊名の例から、京畿内のみならず越前国足羽郡という地方の、しかも郡書生といった郡の下級官吏まで印章を使用していたことが知れる。しかし、越前国足羽郡は奈良時代から道守荘・糞置荘・栗川荘などの東大寺領荘園を有し東大寺を通じて中央文化との接点があることから、文化面では老蛟・対馬嶋同様、一介の地方とみなすことはできないことに

Tab. 8 奈良時代の文書にみえる私印(印文分明なもののみ)

NO.	印文	印面の大きさ	印面	私印所有者	身分	文書種別	年代	印数
1	生江息嶋	方3.0 約1寸	方形	生江巨息嶋		解	759	55
2	鳥豊名印	方2.9 約1寸	方形	鳥部連豊名	書生	解	759	22
3	九郡足人	方2.9 約1寸	方形	九郡足人	御馬従仕	解	760	30
4	◇	方2.8 約1寸	方形	◇	◇	解	760	23
5	面師池守	方2.9 約1寸	方形	面師池守	画師	解	760	25
6	足万	方3.2 約1寸1分	方形	調足万呂	桴領	解	760	11
7	宮衣	径3.8 約1寸3分	円形	石川宮衣	経生	手実	772	4
8	佐	方3.4 約1寸1分 (cm)	方形	佐伯宿禰今毛人 あるいは佐伯康印	左大弁	送銭文	776	32

留意すべきであろう。少なくとも8世紀中葉段階の中央において、私印の使用が官人の末端に列することもかなわない一般人士まで普及していたことは、紛れもない事実である。しかしながら、現在確認できる奈良時代の私印の出土例や伝世印は少なく、必ずしもその状況を反映しているとはいえない。

私印の使用が法的に認められるのは、それから約1世紀後の貞観10年(868)のことである。『類聚三代格』には家印の使用を奨励する官符がみられ、その官符には私印に関わる当時の状況やそれに対する中央政府の考えが率直に述べられている。

太政官符

應令封家用印事

右撰格所起請簡。印之為用。實在取信。公私據此口決嫌疑。而案公式令。唯有諸司之印。未見臣家之印。爰有勢諸家皆私鑄作。進官文外。皆備印之。積習成常。無復疑慮。夫事不獲已人所必行。於公无害理宜容許。加之。太政官去齊衡三年六月五日封家調庸雜物可放捺印日収之状。下知已訖。然而口用之制未詳。至今猶放白紙。家司雜掌爭論无絶。伏望。令諸封家皆得用印。但一寸五分以為其限。外於公家備於私用者。中納言兼左近衛大將從三位藤原朝臣基經直。奉勅。依請。

貞観十年六月廿八日

ここには、有勢の諸家が早い時期から私鑄印をつくり公文書以外に用い、それが永い年月の間に慣行化している状況が報告され、それに対して当局は公的な弊害がないとの判断から容認する姿勢をとり続けていたことが述べられている。これは正倉院文書にみえる8世紀中頃の私印の普及状況と符合するとともに、こうした状況が人々の印章というものへの求心性だけでなく、ある意味政府の黙認という消極的な姿勢によって現出されたものであったことが窺える。ここにいたって、中央政府は家印を積極的に奨励する一方、その印面の寸法を1寸5分以下とする規制をもうけることになる。しかし、それ以前の私印の寸法を検ずるに、酒人内親王の私印とされる「酒」印を除けば、その範囲内におさまっており、規定はないにしろ令制印(官印)である諸国印の2寸を目安として自己規制が働いたものと考えられる。問題の木印の印面の寸法も約1寸1分にあたることからこの例外ではない。少なくとも8世紀中頃から9世紀の中央官人社会において私印の所有およびその私的な使用が一般化されていた状況は容易に想定される。地方においても高志君(公)有○私印とされる銅印「高有私印」の例から、9世紀後半には都領氏族の間で私印が普及していたとの見方もできる。

家印奨励の官符の施行を画期とするように、出土青銅製私印の例は増大し、かつ地域的ひろがりをもせることになる。これは、私印の公認を得たとする意識から人々がこぞって私印を製作した結果生まれた現象であろう。その意識は、印文の変化にもあらわれている。8世紀の印文は、正倉院文書の印影「宮衣」「丸部足人」「生江息鳴」や8世紀後半の銅印「乙貞」のように、人名のみを刻むのが一般的であった。これに対して9世紀後半以降は、「私印」の語を含

む四字私印が主流となっていく。出土遺構の年代を基準に記すと、9世紀後半の「高有私印」、9世紀中～後半の「長良私印」（長野県松本市三間沢川左岸遺跡）、9世紀後半～10世紀初頭の「王強私印」（長野県更埴市更埴条里遺跡）などが挙げられる。公然と明示された「私印」の二文字に、私印の公認を得たとする意識を捉えることができよう。加えて青銅製で印文の最後を「印」でしめる四字印の規格は、官公印の模倣が進んでいることを示している。見方を変えれば官公印との区別の必要性により「私印」を含む印文の使用が規定あるいは奨励されたのかもしれない。木印「直嶋」についていえば、当然人名のみを印文とした段階の私印と位置づけることができよう。年代的にも官符施行以前の9世紀初頭であれば矛盾しない。

千葉県千葉市谷津遺跡からは平安時代の銅印の鋳造を物語る鋳型が錫杖などの仏具の鋳型とともに出土している。遺跡の規模や銅製品の需要頻度から各地を移動して豪族などの注文により、鋳銅物を製作していた鋳銅工人組織の存在が推測されている³⁶⁾。他に福島県いわき市番匠地遺跡や埼玉県大里郡花園町台耕地遺跡などからも印面部の鋳型が検出されている。いずれも9世紀を越えない時期のものである。特に9世紀中頃以降の私印の普及は、このような私印製造を請け負う鋳造工人集団の存在によって現出されたと考えられる。この問題は特に当時の仏像・仏具といった金属製品の生産との関わりから理解する必要がある。

ところで、これらの私印はいかなる場面で用いられたのであろうか。貞観10年の官符がその冒頭でしめすように、印章というものは公私を問わず「實在取信」「則決嫌疑」ことを第一義的な目的とする。しかしながら、貞観10年の官符以前においては、私印の効力を保証する立法は存在せず、法的にみれば私文書に押印は無用であった。その証拠に正倉院文書にみられる私文書の大部分は無印である。しかも押印の有無を軸に、内容や宛先・差出人の立場の相違を見渡しても然したる相関を認めることは難しい。

令制下における民間の文書手続きとしては、奴婢³⁵⁾・土地売買の立券、牛馬売買の私券³⁶⁾、私出挙など財物の貸借に関わる私契³⁷⁾などが挙げられる。立券とは、官司に証文を提出して官司の判署をもらい正式な証明書をつくる行為をいう。立券証文には判署だけでなく、偽造・改ざん防止のため所管官司の印が公式令に基づきほぼ全面に捺された。この時、事実の有無や真偽を証明し、そのことに責任を負う「保証」（保証人）の連署も必要とした。これらの手続きによってはじめて、奴婢・土地売買という事実が公的に証明されるのである。これに対して、私券、私契は「保証」のみで官司の判署・捺印を必要とせず、特に私契は当事者間相互の自由な契約であった。私印は、このような私的な証明や契約の際、事実の有無や真偽の証明および券契の偽造・改ざん防止においてある程度の効力を期待されていた可能性は高い。詐偽律逸文には、私文書の偽造による詐欺罪の条文の存在を窺わしめるものがある。貞観10年の家印の使用奨励が、封物をめぐる「家司雑掌論」の頒発に対処しての措置であったことを考えれば、私印が、訴訟や断獄の手続きの時に、事実の有無や真偽の判断で考慮された可能性は高い。

この推考がゆるされるなら、私印の普及は、資産の売買や財物の貸借などの民間取引の活発

化や土地をめぐる権利関係の複雑化と無関係ではないであろう。また、民間における文書主義の浸透度をはかるひとつの尺度としても有効である。

木印について

わが国の古代印章については、官印をはじめとして銅印を主とし、他に鉄印・木印・陶印・石印がある。中でも鉄印・木印は特殊な用途をもつ特殊印として位置づけられてきた。古代の伝世印および出土印の多くは銅印であり、先にみたように現在も日本各地から平安時代の銅印の出土例が報告されている。内印をはじめとする官印が青銅製であったことは、『延喜内匠寮式』にみえる官印製作の資材・用量・工程の詳細および現存の公印をもって知ることができる。先にみた貞観10年の官符についても私印の「私鈔」としており、9世紀後半の有勢家の私印は青銅製が一般的であったことを示している。

わが国における印章の初見といわれるのは、『日本書紀』持統天皇6年9月丙午条にみえる「木印」である。そこには「神祇官奏上神宝書四卷。鎗九箇。木印一箇。」とあり、木印の奏上主体が神祇官であること、同時に奏上されたものが諸神社の神宝を列記したものとすする神宝書と鎗であることから、この木印が国家的な神祇祭祀に関わってそれらの神宝の管理を保証し、あわせて鎗とともに神宝の所有を象徴する神器であったと考えられる。正史上、他に木印が登場するのは『日本三代実録』元慶元年(877)5月壬寅2日条の「悠紀主基行事所印各一面」であり、それらが木製印であったことは『小右記』にみえる。いうまでもなく両印は天皇即位後に行われる大嘗祭に用いられたものであり、貞観(859~877)末に編纂されたとする『儀式』には、内匠寮で製作され、その印文は小篆字で「悠紀所印」「主基所印」であったことがみえる。『山槐記』元暦元年(1184)8月条には本印に関する詳細な記事がある。それによると、木印の材質は「黄楊木」であることをはじめ、悠紀・主基印には文書におす「文印」と材木の選定のため木面におす「木印」の2種類があること、そして、「印文」より「木印」の方が大きいことがわかる。元慶元年の木製印が「文印」と「木印」のいずれを指し、どちらが本質的なものなのかは、にわかに判断しがたい。加えて木製印である必然性の問題もある。単純に悠紀・主基印が天皇の代替わりごとに新調されることから青銅製印ではなく木製印にしたとする理解もできようが、『山槐記』には次のような事情を伝えている。当時の内匠寮は銅細工が主であるため木印を製作する者がおらず、仏師に彫らせたというのである。ここにはあくまで木製印にこだわる姿勢が表れている。持統6年の木印と悠紀・主基印の例から、神事の印はとくに木印によったものとの見解も存在する。

悠紀・主基印の端緒を示す記録はないが、悠紀・主基の二斎国の供奉のはじまりは、天武二年と考えられている³⁹¹。天武初年においては、この他に新嘗祭の時に悠紀・主基の卜定が行われており、大嘗と新嘗が未分離だったとの指摘もある³⁹²。しかし、少なくとも次代の持統朝においては「毎世一年」の大嘗祭が、「毎年」の新嘗祭とは悠紀・主基の設定の存在によ

り一線を画し、律令的国土支配に対応した祭祀儀礼として成立をみる。悠紀・主基国の供奉の具体的な内容は、神事につかう神饌・神酒の原料となる稲米の献上をはじめ、両国の郡民が都に動員されての齋院の準備や大嘗宮（悠紀・主基殿）の造営、芸能（国風の歌舞）の奏上などであった。悠紀・主基の「文印」と「木印」はそれぞれ、そのための物資調達や用材の選定の際に使用されたものであろう。先に示した持統天皇6年の神祇祭祀に関わる木印の存在を思えば、悠紀・主基印が大嘗祭と軌を一にして天武・持統朝にすでに存在していた可能性がある。この場合、悠紀・主基印は、神祇祭祀に関わる印章という性格から、その木製という古式が尊重され後世まで踏襲されたと考えることはできないであろうか。つまり、先にみた木印に共通してみられる祭祀的な性格は、木という材質から生まれたものではなく、その印章の起源の古さからくるものではないだろうか。

他に木印の存在が確認できる史料としては、延暦20年（801）11月3日の『伊勢国多度寺伽藍縁起並資財帳』の「寺木印壹隻」の記載がある。下って貞観15年（873）の『広隆寺資財帳』および元慶7年（883）の『河内国観心寺縁起資財帳』、延喜5年（905）の『筑前国観世音寺資財帳』にみえる寺印はいずれも青銅製である。『伊勢国多度寺伽藍縁起並資財帳』を遡る宝亀2年（771）に僧綱ならびに大安寺以下12寺に鑄造印を頒下している⁴⁰が、どれをとっても当時の大寺にあたるので同列に論じることができない。おそらくは、青銅製の寺印に先行するかたちで木印が存在したのではないだろうか。この木印から銅印へという傾向は、わが国における印章の初見が木印であることとあわせ考えるに、寺印にとどまらない可能性がある。

これまでに出土している木印（Tab. 9 参照）は、印字がわかるものを挙げると「里」「木」「道」のいずれも一字印であり、しかもあまりに一般的な文字を刻んでいるだけにその用途や性格は特定しがたい。おそらくは地名・人名・官司名を構成する1文字をとり印字としたものであろうと推定される。印面の形は円形や八角形のものが見えるほか、方形のものも印面の縦横の寸法差が大きく、正方形とは言いがたいものがある。また、鈕の形状も官公印を模したと思われる舌鈕や弧鈕だけでなく、錐状のものや四角錐状のものがあり、個性に富んでいる。形状を取り上げれば、銅印に比べて多様であり、官公印模倣の意識が薄いように思われる。印面の大きさは、いずれも1寸前後で私印の規制範囲である1寸5分の内におさまっている。印

Tab. 9 出土木印一覧

NO.	印文	出土遺跡	出土遺構の年代	現存高	印面縦	印面横	印面形	鈕状
1	「□」	長岡京跡左京	長岡京期（784-794）	6.1	径2.7		円形	弧鈕有孔
2	「里」	平安京西市跡	平安時代前期（9C後半）	5.3	3.3	2.8	方形	舌鈕有孔
3	「木」	平城宮跡内裏北外郭東北部	奈良時代後期（8C末）	7.9	長3.2	短2.7	楕円形八角	錐状
4	「道」	平城京東一坊大路西側溝跡	奈良時代（8C）		3	3	方形	
5	「□」	平城宮跡内裏北外郭東北部	奈良時代（8C）	10.25	3.3	4.3	方形	弧鈕有孔強的
6	「直嶋」	大宰府史跡	平安時代初頭（9C初頭）	8.9	3.4	3.2	方形	四角錐状

字判読不可能な2例も加え、これらの木印は平城宮跡2例・平城京跡1例・長岡京跡1例・平安京西市跡1例というように、いずれも宮都跡から出土している。地方で発見された木印としては、今回が初例ということになる。ここで興味深いのは、平安京西市跡出土の「里」印と今回の「直嶋」印をのぞき、他はすべて奈良時代のものであり、しかも先の二印にしても平安時代前期のものであることが明らかな点である。これは全国から出土する銅製私印が平安時代に入って増加するのと並行的である。ここでも木印から銅印へと変遷が想定される。

古印の印影の中には、奈良時代の「積善藤家」印⁴¹⁾や「内家私印」⁴²⁾のように木印によるものではないかといわれるものもあることから、私印は木印によったのではないかといった推測もなされている。しかしながら、これまで明らかに個人名や家名を刻んだとする木製の私印や家印が現存しないため、それも推測の域をでなかつた。しかし、「直嶋」という名を刻んだ木印の発見は、木製の私印（個人印）の存在を証明するものである。また、青銅製品と木製品の遺存率を考慮すれば、今回の木印は水山の一角を形成するに過ぎない可能性が極めて高い。正倉院文書に残された8世紀中頃の私印の印影の数々も木印によったものとする理解が浮上する。むしろ、そのように考えるべきかもしれない。

わが国における印章の歴史は、持統朝の木印にはじまり、大宝令の施行に基づく官公印の鑄造を契機に一部の特殊印をのぞいて銅印への移行を開始したと捉えることができる。私印における木印から銅印への移行は公印に比して遅れたであろうし、地域のあるいは階級的な相違がその遅速に反映されたであろう。8世紀中頃の正倉院文書にみえる私印の事例は、私印使用の階級的なひろがりや垣間みせ、当時の社会に多くの私印が存在したことを窺わせる。しかしながら、現在確認できる奈良時代の青銅製の私印の出土例や伝世印はなぜか少ない。木印から銅印への変化がその理由の一端を担っている可能性が高い。

おわりに

最後にこれまでの考察で得た結論をまとめると、以下の通りである。

木印「直嶋」は、個人名を刻んだ私印と考えられる。その場合、二通りの解釈の可能性が存在する。ひとつは某直嶋の私印とする解釈であり、もうひとつは姓と名の第1字目が結びついたと考え、直〇嶋〇の私印とする解釈である。後者に関していえば、対馬嶋から大宰府に卜部として出仕していた直氏の個人印の可能性が高い。このことは、9世紀初頭の大宰府において、個人印が普及していた可能性を示している。当時、私印の使用は法的に保証されたものではないだけに、その所有は階級や地域によって格差があった。その点で民間における文書主義の浸透をはかる恰好の尺度である。8世紀中頃の中央社会では幅広い階層で私印が使用されていたことが確認できる。しかし、地方については出土印のほとんどが平安時代のものである。その中でも「直嶋」印は極めて早い時期のものであり、しかも唯一個人印と確認できる木製印として貴重である。

これまでも木製の個人印・家印の存在が想定されつつも資料的な根拠がないため、木製の印章は数少ない事例から祭祀的な場面で用いられた印章、あるいは瓦などの刻印に使用されたものとして、特殊印の位置づけがなされてきた。今回の新資料の登場は、そういった古代印章における木印の位置づけに再考をせまるものである。

正倉院文書は8世紀中頃における私印の普及の実態を伝えるが、いまだそれに見合うだけの銅印は確認されていない。そして、全国各地から青銅製の私印の出土例が多く報告されるのは9世紀後半以降の遺構からである。一方、木製印は平安時代初期以前の遺構から出土することが多い。木製の私印が銅印と並び、あるいは先行して使用されていた可能性は十分に考えられる。古代の私印は木製から青銅製へという材質の変遷をたどったと理解すべきかもしれない。その転換のひとつの契機となったのが貞観10年の、私印公認ともいえる家印奨励の官符であったといえるのではないだろうか。

以上、ひとつの木印の発見と限られた資料から憶説を述べたに過ぎない。自らの今後の課題としたい。最後になったが本稿作成にあたって倉住靖彦氏、平川南氏には資料の提供などいろいろとお世話になった。記して感謝の意を表したい。

(註)

1. 天平宝字三年四月八日生江息鳴解（『大日本古文書』巻四一三五九・六〇頁）。
2. 宝龜三年四月二十六日石川宮衣手実（『大日本古文書』巻六一三六一頁）など。
3. 金田富康『日本古印新攷 改訂新版』（宝書舎、1981年）
4. 木内武男『日本の古印』（二玄社、1964年）
5. 平川南「古代印の編年を目指して」（『全国埋文協会報NO. 41』、1995年）
6. 『大日本古文書』巻二十五一一六四頁。
7. 「直嶋」という地名は、平安末期～鎌倉期にみえる地名。保元の乱で讃岐に配流された崇徳上皇が3年間閉居された際、島民の純真さを愛でて直島と改称したといわれている（現・香川県香川郡直島町）。
8. 『古事記』上巻 神代。
9. 『日本書紀』天武天皇四年四月辛卯十八日条、天武天皇六年五月戊辰七日条。
10. 『続日本紀』天平十二年十一月丙戌三日条。
11. 『続日本紀』天平十二年十一月戊子五日条。
12. 『続日本後紀』承和四年七月癸未二十二日条。
13. 『日本三代実録』貞観十八年三月丁亥九日条。
14. 日本考古学協会編『武蔵国分寺跡遺物整理報告書-昭和三十一年・三十三年度-』（1985年）。
滝口宏編『武蔵国分寺跡調査報告書-昭和三十九～四十四年度-』（1987年）。
15. 天平宝字四年調足万呂解（『大日本古文書』巻二五-三〇二・三頁）。
16. 宝龜三年四月二十六日石川宮衣手実（『大日本古文書』巻六一三六一頁）。
17. 奈良国立文化財研究所『平城京長屋王邸宅と木簡』（吉川弘文館、1991年）第302・303・304木簡。
18. 『日本三代実録』貞観十四年五月甲申十五日条。
19. 坂本太郎・平野邦雄監修『日本古代氏族人名辞典』（吉川弘文館、1990年）。
佐伯有清編『日本古代氏族事典』（雄山閣出版、1994年）の直氏の項。

20. 平野博之「在地勢力の胎動と大宰府支配の変容」(下條信行・平野博之編『新版古代の日本第3巻九州・沖縄』角川書店、1991年)。
21. 森公章「卜部寸考」(『日本歴史』539号、1993年)。
22. 註19前掲文献。
23. 横田健一「中臣氏と卜部」(『日本書紀研究 第五冊』所収、鶴書房、1971年)。
24. 平野博之「大宰主神考—8世紀を中心として—」(『和歌山工業高等専門学校研究紀要』創刊号、1966年)。
倉住靖彦『古代の大宰府』260頁(吉川弘文館、1985年)。
25. 『神道大系』神社編四十七字佐。
26. 『石清水文書』二、379号文書(『大日本古文書』所収)。
27. 『平安遺文』4947号文書。
28. 『石清水文書』二(『大日本古文書』所収)。
29. 『石清水文書』五(『大日本古文書』所収)。
30. 『朝野群載』巻二十。
31. 註20前掲文献。
32. 『続日本紀』天平宝字二年八月甲子二十五日条。
33. 『続日本紀』宝龜二年正月壬戌二日条。
34. 千葉市教育委員会編『谷津遺跡 本文編』(1984年)。
35. 関市令免杖牌条。
36. 同条。
37. 雑令公私以財物条、以稻粟条、出举条。
38. 八木充「日本の即位儀礼」(『東アジア世界における日本古代史講座 第9巻』所収、学生社、1982年)。
39. 岡田精司「大王就任儀礼の原形とその展開(補訂)」(『古代祭祀の史的研究』所収、城書房、1992年)。
40. 『続日本紀』宝龜二年八月己卯二十六日条。
41. 『社家立成』(『書の本史1』)所収、平凡社、1975年)。
42. 『礼記子本疏義巻59』(『原色版国宝』2)所収、毎日新聞社、1968年)。

(参考文献)

- 木内武男『日本の古印』(二玄社、1964年)
 木内武男『日本の官印』(東京美術、1974年)
 木内武男『印草』(柏書房、1983年)
 萩野三七彦『印章』(吉川弘文館、1966年)
 国立歴史民俗博物館『日本古代印集成』(1996年)

(3) 大宰府条坊跡第119次調査

太宰府市（教育委員会学校教育課）では太宰府市立学業院中学校の校舎北側にある空地を利用してバレーボールコート进行建設する計画を立て、埋蔵文化財の有無について文化課（文化財係）に対して照会があった。それを受けて両者が協議を行い、平成3（1991）年12月4日に試掘調査を実施した。試掘の結果、当該部分に遺構が認められたため、工事に先立って発掘調査を実施することとなった。調査地点の地番は太宰府市大字観世音寺字来木367で、調査は学校の冬休み期間を中心に行うこととなり、平成3（1991）年12月16日から翌年1月9日まで実施し、緒方俊輔が担当した。調査面積は444m²である。なお整理・報告の作業は狭川真一が担当した。

(1) 層位など

現在の表土を除去するとすぐに花崗岩風化土の地山が現れる。今回調査した遺構のすべてはこの面から切り込まれる形で検出された。なお遺構面検出段階で採集した遺物は茶褐色土層出土として記録しているが、現実にはそうした土層は存在しない。また調査区南半部の一部に溝状に落ち込む層位が認められ、遺構という判断が困難であったため暗茶灰色土層として遺物を取り上げている。面的には他の遺構と同様に地山から切り込んでいる。

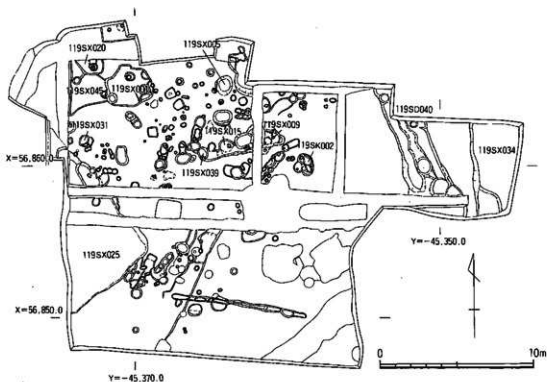


Fig.67 大宰府条坊跡第119次調査遺構配置図(1/250)

調査区の各所には現代のコンクリート基礎による攪乱が多数認められ、それによる破壊が著しい。また調査対象地の西側は大きな谷地形が入り込んでおり、奈良時代の遺物を含む粘性の強い堆積土で埋まっており、遺構は認められなかった。

(2) 遺構

土坑

119SK001 東西3.1m、南北2.55m、深さ約0.1mを測る不整形土坑である。埋土は褐灰色土の単一層で、埋土を除去すると数個のビットが確認されたがこの土坑に伴うものではなくそのものである。119SX045によって西側の一部が切られている。

119SK002 (Pla. 61) 東西0.95m、南北1.50m、深さ約0.15mを測る不整形土坑である。土坑底には凹凸があり、完掘後のプランをみると3～4基のビットないしは土坑が切り合っていたものとも思われる。埋土は上層で黒茶色土、下層で淡茶色土である。

119SK005 東西1.12m、南北1.40m、深さ約0.3mを測る略楕円形の土坑である。埋土は大きく3層に分かれる (Fig. 68, Pla. 61)。

119SK009 東西2.55m、南北1.68m、深さ約0.35mを測る。遺構の中央にコンクリート基礎があり、多くを破壊されている。

溝

119SD040 検出長8.7m、幅2.2～2.6m、深さ0.2m内外である。底部付近では2本の流れがあったようで、底中央がわずかに高い。底のレベルは僅かながら北側が高いことから、北から南への流れが想定できる。溝の振れはN-18°30'-Wで、北で西に大きく振れている。

その他の遺構

119SX025 検出東西長5.5m、同南北長3.7m、深さ0.1m内外の浅い落ち込み状を呈している。8世紀後半の遺物を最新とするが、主体は古墳時代のものである。

119SX045 検出東西長5.3m、同南北長12.4m、深さ0.5m内外の落ち込み状を呈している。随所に攪乱があり、完掘した部分は僅かである。8世紀後半の遺物を最新とするが、主体は古墳時代のものである。埋土及び出土遺物の傾向から119SX025と同一のものとみられる。なお試掘調査の際に西側に大きな谷地形が認められたが、これがその東側に該当するものと考えられる。

119SX015 (Fig. 68, Pla. 61) 南北0.8m以上、東西1.0m以上、深さ約7cmで略円形のビットである。西隅部分に柱痕跡と思われる暗灰黒色土が観察された。

119SX031 (Fig. 68, Pla. 61) 東西0.58m、南北0.72m、深さ約0.2mで略方形のビットである。中央やや東寄りに直径0.15～0.20mの柱痕跡が確認された。

119SX039 (Fig. 68, Pla. 61) 東西0.62m、南北0.90m、深さ0.27mで略楕円形のビットである。掘り方の西に偏って径約0.2mの柱痕跡が確認された。

119SX020

(Fig. 68)

焼土の堆積層で119SX045に切られるかたちで検出されたが、119SX045の一部分の可能性もある。堆積は東から西に向かって投棄されたような形状で、焼土を多く含む明赤茶色土の下に炭化物や骨片を含む暗灰色土が堆積している。各土層の性格は明らかではない。

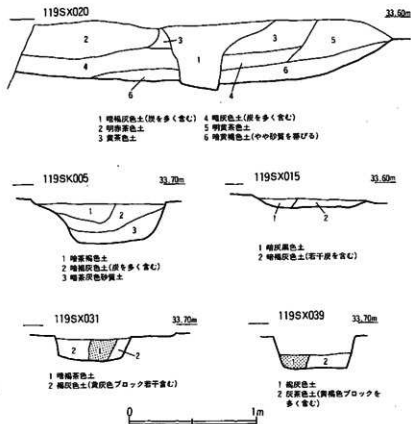


Fig. 68 第119次調査各遺構土層観察図(1/30)

構で、検出長6.2m、幅3.3mでさらに東へ広がっている。深さは0.3~0.4mで東に向かって徐々に深くなる。遺物は検出遺構中で最も新しく、中世から近代までのものを含んでいる。

3. 出土遺物

119SK001出土土器 (Fig. 69)

土師器

甕(1・2) 1は口径14.8cm。口縁端部内面を僅かにつまみ出す。体部の外面は細かなハケ目、内面はヘラケズリである。2は複合口縁部分である。口径17.8cmで口縁部は直立気味である。

119SK002出土土器 (Fig. 69, Pla. 62)

土師器

高坏(3) 口径18.0cm、器高15.9cm、底径13.3cm、坏部の高さ6.1cmを測る。調整は風化が進行し判別出来ない部分が多いが、口縁部付近はヨコナデ、脚内面はヘラケズリである。

119SK009出土土器 (Fig. 69, Pla. 62)

須恵器

蓋c 3 (4) 口径16.0cm、器高2.5cm、掴み径2.4cmを測る。天井部外面はヘラ切り離しの後、強めのヨコナデで仕上げている。

119SD040出土土器 (Fig.69、Pla.62)

緑釉陶器

碗(5) 口径13.1cm、器高5.1cm、高台径7.0cmを測る。須恵質に焼成され硬く焼き締まっている。内面の一部に明黄緑色に発色する釉が残存するものの大半が剝離している。器形は丸碗で外面の調整観察では多くを回転ヘラケズリにより整形した後、ヨコナデで仕上げている。高台はやや高めで貼付による。見込みには沈線がある。

119SX034出土土器 (Pla.62)

染付磁器

aは坏でくらわんか茶碗出現以前のものとみられる。bは筒形碗、cは皿、dは丸碗。eは印版手の碗で銅版刷りのものである。明治以降。

陶器

fは唐津系の大皿で17世紀以降の資料。古唐津には属さないものとみられる。gは壺で外面が暗黄緑色で光沢がある釉、内面は暗茶褐色に発色する釉を施す。在地産と思われる。hは明治期以降の土管の口縁部である。

暗茶灰色土層出土土器 (Fig.69、Pla.63)

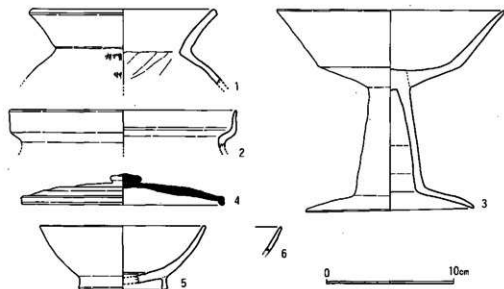


Fig.69 第119次調査出土遺物実測図(1/3)

陶器

椀(6) 建窯系の天目椀とみられる。器内は0.3cm程度。残存部分の全面に施釉され、釉は暗茶褐色で鈍い光沢がある。胎土は暗灰黒色で精良なものを用い、須恵質に硬く焼き締まっている。小片のため口径の復原には至らない。

これら以外に攪乱等から出土した資料をPl. 63に示したので参照されたい。

4、小結

調査面積も狭小で目に付く遺構も少ないが、土坑の一部に古墳時代前期に属するものが存在すること、西側の落ち込みにも同時代の史料が多く含まれていることから、この付近に古墳時代の生活痕跡を示す遺構が今後、発見される可能性が高いと思われる。

また溝119SD040は、南北方向ながら大きく西に振れており、大宰府政庁に近接しているものの類似する方向の溝はなく、性格を特定することは困難である。年代的には奈良時代の資料が主体を占めることからこの時代に開削されたと思われるが、緑釉陶器が出土することから平安時代まで何らかの形で機能していたものと思われる。なお資料中に龍泉窯系青磁と思われる破片が1点あり、調査段階の混入でなければ中世まで埋没時期が下る可能性もある。

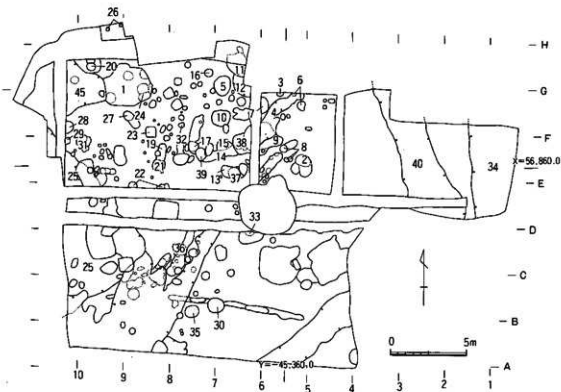


Fig.70 大宰府条坊跡第119次調査遺構略測図(1/250)

Tab.10 第119次調査遺構番号一覧表

S-番号	遺構番号	種別	地区
1	119SK001	土坑 褐灰色土埋土 (単一層)	古墳 G9
2	119SK002	土坑 黒茶色土埋土、下層の一部分淡茶色土	古墳 E5
3		ピット 暗褐色土埋土	古墳 F5
4		溝状窪み 4-9	奈良 F5
5	119SK005	土坑 8c後～	G6
6		ピット群	古墳 F5
7		ピット	奈良 F5
8		ピット群	古墳 E5
9	119SK009	土坑 4-9-38	奈良 F5
10		ピット 暗褐色土埋土 (混炭・単一層)	古墳 F6
11		土坑 暗褐色土埋土 7c後半以降の遺物	奈良 G6
12		土坑	奈良 G6
13		窪み	古墳 E6
14		溝状窪み	奈良 E6
15	119SX015	ピット 柱痕跡状の土層あり	奈良 E6
16		ピット	奈良 G7
17		窪み	古墳 E7
18		ピット 暗褐色土埋土 (単一層)	古墳 E7
19		窪み	中世? E8
20	119SX020	焼土層 S-45の一部分か?	古墳～ G9
21		ピット 暗褐色土埋土 (単一層)	古墳 E8
22		ピット群	古墳 D8
23		ピット 略方形、暗褐色土埋土 (単一層)	奈良 F8
24		ピット	古墳 F8
25	119SX025	窪み 西に延びている。古墳時代の遺物多い	8c後～ E9・10
26		ピット群	奈良 H9
27		ピット	古墳 F9
28		ピット	古墳 F10
29		ピット	奈良 E10
30		ピット 略方形	古墳 B7
31	119SX031	ピット 柱痕跡とみられる土層あり	古墳 E9
32		ピット	古墳 F7
33		ピット	古墳 C6
34	119SX034	段落ち	近代 D～F1
35		ピット 略方形、暗褐色土埋土 (混炭・単一層)	古墳 B7
36		ピット 略方形、暗褐色土埋土 (黄茶色ブロック混)	古墳 C7
37		ピット 略方形、暗褐色土埋土 (黄茶色ブロック混)	古墳 E6
38		ピット 略方形、暗褐色土埋土 (単一層)、9-38	古墳 E6
39	119SX039	ピット 略方形、柱痕跡状の土層あり	古墳 E6
40	119SD040	溝 8c後の遺物多い	奈良 EF2
41～44	欠番		
45	119SX045	窪み S-25と同一のものか、古墳時代の遺物多い	7c後～ G10

Tab. 11-1 第119次調査出土遺物一覧表

茶褐色土		S-7	
須恵器	器 坏、甕、蓋3	須恵器	器 坏、蓋3
土師器	器 坏、甕	土師器	器 破片
越前窯系青磁	碗；II-3 (1)	S-8	
瀬灰窯系青磁	碗；I (1)、皿 (1)	土師器	器 甕(古墳時代)
肥前窯系器	鳥付；鏡 (1)、大甕(印版手)(1)、鏡(印版手)(1)	S-9	
土製品	溜穴土管	須恵器	器 坏c、蓋2、蓋c3
弥生土	器	土師器	器 甕、蓋c
瓦	破片 (外周-布目、内周-ナリ)	瓦	器 破片
磚茶灰色土		S-10	
須恵器	器 坏、蓋1、蓋3、甕	須恵器	器 甕
土師器	器 甕	土師器	器 高坏、甕(古墳時代)
瀬灰窯系青磁	碗；I (3)	S-11	
白磁	碗；V×VIII (1)	須恵器	器 蓋1、甕
国産陶器	埴輪(1)	土師器	器 坏、甕
中国陶器	天目碗(建窯系)(1)	瓦	器 破片
肥前窯系器	鳥付；鏡 (1)	S-12	
瓦	甕(丸瓦(両目呷))	須恵器	器 坏、甕
S-1 褐色土		土師器	器 甕
土師器	器 甕(古墳時代)、甕(布留-古)	S-13	
S-2		須恵器	器 甕(古墳時代)
土師器	器 高坏、甕(古墳時代)	土師器	器 甕(古墳時代)
S-2 淡茶色土		S-14	
土師器	器 破片	須恵器	器 坏(古墳時代)
S-3		土師器	器 甕(古墳時代)
土師器	器 甕、破片(古墳時代)	S-15	
S-4		土師器	器 甕(古墳時代)
須恵器	器 甕	S-15 柱礎	
土師器	器 高坏、甕	土師器	器 破片
瓦	器 破片(両目呷)	S-15 ウラボシ	
S-5		土師器	器 破片
須恵器	器 甕	S-16	
土師器	器 坏c、甕	須恵器	器 破片
瓦	器 破片(両目呷)	土師器	器 破片
S-5 上層		S-17	
須恵器	器 甕	須恵器	器 甕(古墳時代)
土師器	器 坏c、甕	土師器	器 甕、破片(古墳時代)
瓦	器 破片(両目呷)	S-18	
S-5 中層		土師器	器 甕(古墳時代)
須恵器	器 蓋3	S-19	
土師器	器 甕	土師器	器 高坏、坏(中世?)、破片
瓦	器 破片	S-6	
S-5 下層		土師器	器 甕(古墳時代)
土師器	器 甕(古墳時代)	S-6	
土師器	器 甕(古墳時代)	S-6	

Tab.11-2 第119次調査出土遺物一覧表

S-20 暗褐色土		S-33	
土 師 器	破片	土 師 器	破片
土 製 品	焼土塊		
S-20 焼土層		S-34	
土 師 器	壺(古墳時代)	須 恵 器	坏c、壺c、甕
土 製 品	焼土塊	土 師 器	壺、破片
S-21		熊 泉 産 系 青 磁 焼	1(2)、III-2(1)
土 師 器	高坏(古墳時代)、甕	阿 波 産 系 青 磁 焼	1-1b(1)
S-22		白 磁 焼	I(1)、II(1)、IV-1a(1)、IV-1b(2) Ⅲ:III(1)
土 師 器	壺(古墳時代)	田 産 陶 器	甕(1)、大盥(唐津系-古唐津ではない)(1)
S-23		不 明 陶 器	破片(1)
土 師 器	坏、破片	肥 前 系 磁 器	糸付; 丸輪(1)、壺(1)、黄銅輪(1)、横(印版手)(1)、 坏(くらわんか以前)(1)
S-23 明褐色粘土		土 製 品	土壺
土 師 器	破片	瓦	平瓦(縄目切)、近代
S-23 暗褐色土		S-35	
土 師 器	破片	土 師 器	破片
S-23 暗褐色土		S-36	
土 師 器	壺	土 師 器	壺
黒色土器A	破片		
S-24		S-38	
土 師 器	壺	土 師 器	破片
S-25		S-39	
須 恵 器	瓶3、壺、甕	土 師 器	壺
土 師 器	高坏、壺、甕	S-39 柱板	
金 属 製 品	砥石	土 師 器	壺
瓦	銅破片		
S-25 下層		S-39 ウラゴロ	
土 師 器	壺(古墳時代)	土 師 器	壺
S-26		S-40	
土 師 器	壺	須 恵 器	坏c、甕3、甕
S-27		土 師 器	坏a、壺
土 師 器	破片	黒色土器A	板
S-28		熊 泉 産 系 青 磁 焼	1(1)
土 師 器	壺(古墳時代)	緑 釉 陶 器	碗①
S-29		瓦	壺 平瓦(縄目切、棒子切)
須 恵 器	破片	S-45	
土 師 器	破片	須 恵 器	坏、壺、甕1、甕
S-30		土 師 器	高坏、壺
土 師 器	壺	雑 乱	
S-31		須 恵 器	壺、甕
須 恵 器	壺	土 師 器	破片
土 師 器	高坏、破片	越 前 産 系 青 磁 焼	1-1(1)
S-32		熊 泉 産 系 青 磁 焼	1(1)
須 恵 器	壺(古墳時代)	田 産 陶 器	鉢(唐津系)(1)
土 師 器	壺(古墳時代)	肥 前 系 磁 器	糸付; 輪花坏(1)、丸輪(1)、そば割口(1)
		瓦	平瓦(縄目切)

IV. 自然科学分析

(1) 大宰府史跡第170次調査の自然科学分析

パリーノ・サーヴェイ株式会社

1. 井戸堆積物の花粉分析・樹種同定

(1) 目的

平安時代の井戸であるSE4290（8世紀末～9世紀初頭）、SE4295（10世紀後半）、SE4285（8世紀後半）を対象として、花粉分析ならびに樹種同定を行い、当時の環境や遺構毎の差異を調査することを目的とする。SE4290とSE4295は花粉分析、SE4285は検出された木材の樹種同定を行う。

(2) 試料

花粉分析試料は、SE4290とSE4295の底部からそれぞれ採取した粘質土2点である。樹種同定用試料は、SE4285から土壌ごと採取された試料1点である。

(3) 方法

a) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数する。

結果は、総花粉・胞子数から不明花粉とシダ類胞子を除いたものを基数として出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

b) 樹種同定

木口（横断面）・柱目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

Tab.12 大宰府史跡第170次調査
花粉分析結果

種 類	試料番号 SE4290 SE4295 S-61		
木本花粉			
モミ属	6	1	-
ツグ属	-	4	-
マツ属	33	63	-
スギ属	6	4	-
ヤナギ属	45	-	-
ヤマモモ属	1	2	-
クマシダ属-アサダ属	-	2	-
ハンノキ属	8	5	-
ブナ属	-	1	-
コナラ属コナラ属	2	9	-
コナラ属アカガシ属	83	74	-
レイノキ属	18	44	-
エノキ属-ムクノキ属	3	-	-
セツダン属	17	20	-
モチノキ属	1	-	-
ノブドウ属	2	1	-
グミ属	1	-	-
アジ科	4	-	-
エゴノキ属	2	-	-
スイカズラ属	3	-	-
草本花粉			
イネ科	29	35	-
カヤツリグサ科	-	2	-
ミズアオイ属	-	2	-
サナエタデ属-ウナギツカミ属	7	4	-
ソバ属	-	2	-
アカザ科	2	7	-
ナデシコ科	-	1	-
キンポウゲ科	14	1	-
アブラナ科	4	3	-
フクロソウ属	1	-	-
イチヒ属	1	-	-
キツネノゴマ属	1	-	-
ヨモギ属	12	4	-
他のキク属科	6	1	-
タンポポ科	1	-	-
不明花粉	6	1	-
シダ類胞子			
シダ類胞子	203	154	-
合 計			
木本花粉	235	230	0
草本花粉	78	63	0
不明花粉	6	1	0
シダ類胞子	203	154	0
総計（不明を除く）	516	447	0

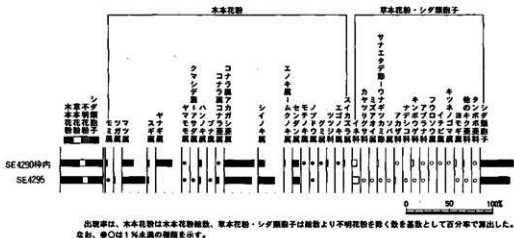


Fig.71 大宰府史跡第170次調査花粉化石組成

(4) 結果

a) 花粉化石

結果をTab.・、Fig.・に示す。SE4290、SE4295とも概ね同様な傾向を示す。木本花粉では、アカガシ亜属が多く、マツ属、シノキ属なども比較的多く認められる。草本花粉では、イネ科やヨモギ属などが検出されるが、出現率は低い。相違点は、SE4290ではヤナギ属が比較的多いが、SE4285では全く認められない点である。プレバラート内には微細な材片とみられる物質が認められた程度である。

b) 樹種同定

試料中には繊維状の植物組織は認められるものの、同定可能な木材組織を有する試料は認められなかった。そのため、今回は樹種を明らかにすることはできなかった。

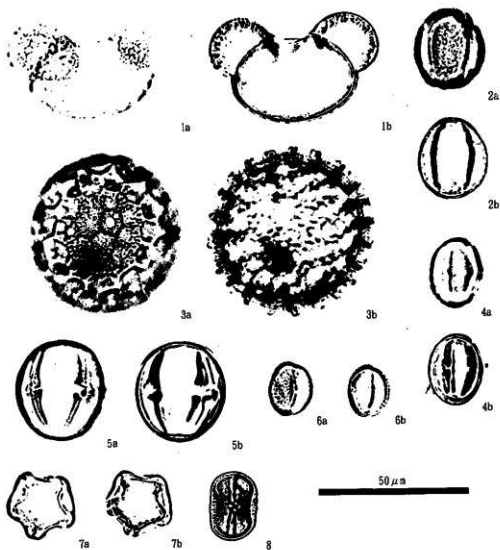
(5) 考察

2遺構の花粉分析の結果、木本花粉では、シイ類、カシ類が多く検出されている。この傾向は、これまで当社で行ってきた花粉分析結果のうち、木本花粉の割合が高い試料において共通してみられる傾向である。さらに、同様な組成が北九州市の寺内遺跡でも報告されている(畑中, 1191)。九州北部の古植生変遷をまとめた成果によれば、当時はシイ類、カシ類などの常緑広葉樹林が分布していたことから(Hatanaka, 1985)、今回の結果は調和的であるといえる。

2遺構の相違点であるヤナギ属は、局地的な植生を反映していると考えられ、SE4290では、近くにヤナギ属が生育していたものと考えられる。ヤナギは、栽培が容易で、よく植栽される樹木であるが、自生もする。今回の結果からは自生か植栽かは不明だが、植物利用を明らかにするために、試料を蓄積していくことが必要である。

SE4285から検出された炭化物の樹種を明らかにすることはできなかった。出土状況からし

て、おそらく燃料材であろうと思われるが、燃料材の可能性のある試料では、御笠団印出土地遺跡で時期不明の炭化材にクリ近似種が確認されている（未報告）。しかし、本地域での類例が少なく、現時点では本地域における過去の燃料材の用材選択の傾向、変遷、地理的差異等については不明である。今後さらに資料を蓄積していく必要がある。



- | | |
|-------------------|------------|
| 1. マツ属 | 2. コナラ亜属 |
| 3. サナエタデ節-ウナギツカミ節 | 4. アカガシ亜属 |
| 5. センダン属 | 6. ヤナギ属 |
| 7. ハンノキ属 | 8. キツネノマゴ属 |

すべてSE4290採集試料

Fig.72 大宰府史跡第170次調査花粉写真

2. 赤色物質のX線回折分析

(1) 目的および試料

8世紀後半のSD4292覆土の砂層より検出された土器表面赤色物質の材質を知る目的でX線回折分析を行なう。

(2) 分析方法

a) 試料調製

赤色物質は、土器表面より赤色部分をできるかぎり削り取り、メノウ乳鉢で粉碎し、74 μ m以下を全通させた。

b) 測定

この微粉碎試料を鉱物同定用スライドガラス(2.8 \times 4.9cm)にアセトンを使って直接塗布し、風乾後にガラス塗布定方位試料として次の条件でX線回折を行った。

装置：島津製作所製XD-3A

Target：Cu (K α)

Filter：Ni

Voltage：30KVP

Current：30mA

Count Full Scale：5,000 c/s

Time Constant：1.0sec

Scanning Speed：2°/min

Chart Speed：2 cm/min

Divergency：1°

Receiving Slit：0.3mm

Scanning Range：3~45°

(3) 結果

X線回折試験で得られたチャートに同定鉱物の略号を付し、添付した (Fig. *)。

X線回折によりきわめて多量の石英 (quartz)、少量のカリ長石 (potassium feldspar)、曹長石 (albite)、微量のカオリン鉱物 (kaolin minerals)、菱鉄鉱 (siderite) が検出される。

(4) 考察

赤色物質については、ベンガラ、朱などの赤色顔料がその材質として想定されたが、これらの存在を示唆するX線回折ピークは認められない。したがって、赤色部分を赤色顔料として捉えることは難しい。一般に赤色顔料の他に赤色を呈する物質として土壌などでは遊離含水酸化鉄があげられる。この酸化鉄は土壌中にもっとも普遍的に見いだされる金属酸化物で、鉄を含む一次鉱物が地表付近で二次的に風化、生成したもののほか、マグネタイト (磁鉄鉱) のように母岩由来のものを含む。特に二次生成物は、赤、橙、褐、黄色に土壌を着色する。したがっ

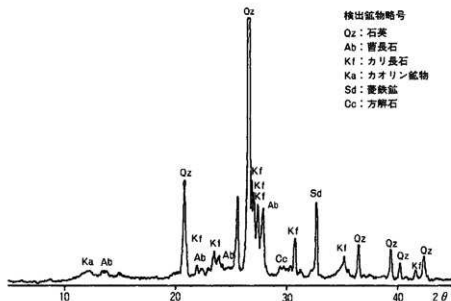


Fig.73 大宰府史跡第170次調査X線回折チャートおよび検出鉱物

て、赤色原因の可能性としてもっとも高いのは酸化鉄と思われるが、これらは量が少なかったり、結晶度が悪い場合にはX線回折による同定が困難であり、それを確実に証明するには土器薄片一顕微鏡による微視的な観察が必要である。

3. 昆虫同定

(1) 目的

SD4292砂層出土の昆虫遺体を同定し、古環境に関する情報を得る。

(2) 試料

SD4292砂層から出土した昆虫遺体1点である。

(3) 方法

単体で検出された昆虫遺体を双眼実顕顕微鏡下で形態的特徴を観察し、同定計数する。

(4) 結果

甲虫類の左上翅であるが、保存状態が悪く種類を特定することができない。

引用文献

Hatanaka Ken'ichi (1985) Palynological Studies on the Vegetational Succession the Wurm Glacialage in Kyushu and Adjacent Areas. Journal of the Faculty of Literature, Kitakyushu University (Series B), 18,p.29-71.

畑中健一 (1991) 寺内遺跡の花粉分析, 「北九州市埋蔵文化財調査報告書第106集 寺内遺跡第3・4・5・6・7地点-北方地区改善事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-」, p. 90-92,

北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室。

バリノ・サーヴェイ株式会社（1993）自然科学分析からみた人々の生活（1），慶応義塾藤沢校地理蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」、p. 347-370，慶応義塾。

(2) 大宰府史跡第170次調査出土資料の蛍光X線分析

中島恒次郎

1. 目的

大宰府史跡第170次調査からは、報告にあるように金属生産を想定できる各種用具や鉋滓が出土している。ここでは、各種生産用具に付着している金属ならびに鉋滓の金属種を同定し、どのような金属生産を行っていたのかを考える手がかりを掴みたい。肉眼観察によって金属種を主観的ながら推定できるが、鉛や生産用具に浸透した金属種までは同定するには困難である。そこで蛍光X線分析装置を使用して金属成分の同定を行った。分析対象とした試料は以下の出土資料である。

1. SB4260出土資料（トリペ）
2. SK4269出土資料（トリペ）
3. SD4258出土資料（トリペ）
4. 茶灰色粘土層出土資料（トリペ）
5. 茶灰色土層出土資料①（トリペ）
6. SI4305出土資料（トリペ）
7. SK4296出土資料（鞆羽口）
8. 茶灰色土層出土資料②（トリペ）
9. 茶灰色土層出土資料③（炉壁）
10. SD4292出土資料（鋳型）
11. SB4310d出土資料（炉壁）
12. SK4315出土資料（鋳型）
13. 茶灰色土層出土資料④（鉋滓）
14. 茶灰色土層出土資料⑤（鉋滓）

以上14点を分析に供した。

2. 方法

分析対象となる試料金属付着箇所が小さいことや非破壊分析を前提としなければならないこと、さらに定量分析を実施するための適正な標準試料の入手ができていないこと等から、今回の分析は定性を目的とした¹⁾。したがって分析に先立つ処理は、分析箇所の器体表面を無水アルコール（エテル・アルコール）を用いた表面洗浄のみにとどめた。分析装置は微小部エネルギー分散型蛍光X線分析装置（テクノス社製微小部蛍光X線分析装置TREX650）を用いた。分析条件は以下の通り。

【分析条件】

- ・ X線管電圧：40kV・X線管電流：3.00mA・コリメーター：0.30mm・フィルター：なし
- ・測定時間：300sec　・分析環境：真空

分析箇所は、各試料ごとに分析目的に適した箇所を設定した。

なお、分析に際し、0.30mmのコリメーターを使用したため、定性分析ではあるが対象となる分析試料の全組成を表現することはできない。したがって、あくまでも分析測定点の化学組成を表現していることになる。

3. 結果

1. SB4260出土資料（トリベ）(Fig.53-1)

分析測定点は、トリベ口縁部内面に付着する暗茶褐色部分ならびにやや下位に付着する赤茶色部分の2箇所を設定した。分析した結果、いずれも銅・鉄の energy-peak が顕著に見られ、次いで錫の energy-peak を検出した。銅・錫に関しては、坩堝本体には含まれない金属であることから、溶解金属と考えて誤りないものと考えられるが、鉄についてはトリベを構成する胎土中に含まれるため、今回の分析のみでは即断できない。

2. SK4269出土資料（トリベ）(Fig.53-3)

分析測定点は、トリベ体部内面に付着する淡茶色部分およびやや赤味のある淡茶色部分の2箇所を選んだ。肉眼観察では同一色であったことから、同一組成を持つものと考えていたが、底部に近い前者の点においては、鉄・銅・鉛・カルシウムの energy-peak を検出し、口縁部付近の測点においては銅・鉄の energy-peak を検出した。したがって、溶解金属としては、銅・鉛が考えられ、カルシウムについては、溶融剤としての添加物の組成が検出されたものと考えられる²⁾。鉄については、資料1同様に今回の分析では即断できない。

3. SD4258出土資料（トリベ）(Fig.53-4)

分析測定点は、トリベ口縁部内面に付着する淡茶色部分ならびに暗茶色部分の2箇所を設定した。分析の結果、下位に位置する淡茶色部分からは鉄・珪素の energy-peak を検出し、口縁端部の暗茶色部分からは、銅の energy-peak を検出した。したがって溶解金属としては銅が考えられる。なお鉄を検出した淡茶色部分には同時に珪素の peak を検出していることから、胎土の組成を導き出した可能性が高い。

4. 茶灰色粘土層出土資料（トリベ）(Fig.53-5)

分析測定点はトリベ内部に付着する暗茶色部分、黄茶色部分、黒褐色部分の3箇所を設定した。その結果、黄茶色部分からは鉄・鉛・銅の peak が見られ、暗茶色部分からは鉄・銅・鉛の peak が見られる。また黒褐色部分においても同様に鉄・銅・鉛の peak が確認できた。したがって溶解金属は銅・鉛が考えられる。

5. 茶灰色土層出土資料①（トリベ）(Fig.53-7)

分析測定点はトリベ内面に付着する青緑色部分、黒褐色部分の2箇所を選んだ。その結果、青緑色部分については肉眼観察で想定していたとおり、銅のみの peak を検出した。また黒褐色部分については鉄のみの peak を検出した。この場合胎土に含まれる珪素の energy-peak を検出していないことから、溶解金属として鉄を想定することに誤りは無いものとする。したがって溶解金属は銅・鉄ということになる。

6. SI4305出土資料（トリベ）(Fig.53-10)

やや大型のトリベで内面に黄茶色の金属が付着している。内面の底部近くに付着している黄茶色部分を選んで測点とした。分析の結果、鉄・銅・鉛の各 peak を検出した。この場合も資料5同様に珪素の peak が検出できていないことから、溶解金属として鉄・銅・鉛を考えると可能であろう。

7. SK4296出土資料（竈羽口）(Fig.54-17)

羽口挿入部分と考えられる箇所の外面に付着する暗茶色部分を測点とした。測定の結果、鉄のみの energy-peak を検出したことから、鉄が付着していると考えられる。

8. 茶灰色土層出土資料②（トリベ）(Fig.53-9)

ほぼ完形のトリベであり、内面に様々な色を呈する物質が付着している。分析装置の特性から、トリベ底部内面の分析が行えなかったが、口縁端部に付着している明黄灰色部分、明橙色部分、光沢のある暗赤色部分および暗黒色部分の計4箇所を設定した。その結果明黄灰色部分からは、鉄・珪素の peak が検出され、明橙色部分からは銅・鉄が検出された。また光沢のある暗赤色部分については、鉄・銅・珪素・カルシウム・ストロンチウムの5種が検出でき、暗黒色部分からは銅・鉄が検出できた。したがって想定できる溶解金属は銅と考えられ、溶融剤としてのカルシウム分を含んだ添加剤の投入が想定できる。なお光沢のある暗赤色部分と同様の資料を辻遺跡第1次調査出土資料でも分析を行っている（太宰府市教育委員会（1997））。結果は今回の分析同様カルシウムの peak を検出しており、同様の傾向がうかがえる。

9. 茶灰色土層出土資料③（炉壁）

分析測定点は、付着物が厚く固着した箇所を1点選んだ。色調は赤褐色を呈している。分析の結果、珪素・カリウム・カルシウム・鉄・銅を検出したが、前4種については固着物質の中に著しい砂粒の混入が認められるため、砂粒の組成を導き出した可能性が高い。したがって、溶解金属としては、銅のみが考えられる。

10. SD4292出土資料（鋳型）(Fig.54-20)

鋳型と考えられる土製品で、鋳型面と考えられる灰色部分および粒状に観察できる黒色部分の2箇所を選定した。その結果、珪素・鉄・鉛の3種の peak を検出した。珪素・鉄については、これまで記述してきたように鋳型本体の組成を導き出している可能性が高いが、鉛については鋳型に流し込まれた溶解金属の成分の一部と考えて間違い無いと考える。なお金属付着物として確認できたのは、粒状の黒色物質であり、他の部位については、鋳型面として露出して

いる状況であった。したがって金属の付着は想定していなかったが、分析によって鉛が検出できたことにより、肉眼では観察できないほどの鉛片の付着か、鋳型面に浸透していたものどちらかを想定することが可能であろう。

11. SB4310d出土資料（炉壁）

分析測定点は、付着物が厚く固着した箇所を1点選んだ。色調は黒褐色を呈している。分析の結果、鉄のみを検出した。したがって溶解金属は鉄と考えられる。

12. SK4315出土資料（鋳型）（Pla.55-21）

鋳型と考えられる土製品で、資料10のように明確に鋳型面と考えられる面は確認できない。したがって、分析測定点は黒色部分のみと、黄茶色箇所から黒色箇所へ変化する断面の移動分析を実施した。その結果、土器を分析した際の energy-peak と同様の結果となり、明確に金属付着を想起させるような結果は導き出せなかった。

13. 茶灰色土層出土資料④（鉢滓）（Pla.56-a）

14. 茶灰色土層出土資料⑤（鉢滓）（Pla.56-b）

両者とも、鉄のみの energy-peak を検出した。

4. 考察

ここでは、色調からみた付着物質の諸特徴と分析結果との共通点の有無および分析によって導き出された結果について記述する。

まず化学組成と色について相関性が見られるのかについて検討する。端的に述べると、色調と化学組成には大まかな傾向は認められるが、強い相関性は看取り難い。金属の酸化状態に左右されているためと考えられるが、黄色気味の物質については、いずれの結果からも鉛が検出されている（資料2・4・6）。またやや赤味がかった物質については銅が検出されている（資料1・2）。しかし同一色調を有する物全てから同一組成を検出しただけでなく、色による判別には躊躇せざるを得ない。

次に分析によって導き出された結果について述べる。14点の蛍光X線分析機による化学組成の定性分析を実施してきたが、トリベに付着している金属に、同一の傾向が見られた。試料1～6の体内内面中位に水平の色調変化が認められるが、この色調変化線より下位に鉛の検出が顕著であった。一方銅・鉄については、分析面全体に検出できたが色調変化線よりも上位に顕著な傾向を示している。生産用具内面における金属分布を調べるため、資料2について、Mapping分析³⁾を実施した。その結果、色調変化線より下位に鉛の分布が顕著となり、内面全体には銅・鉄が分布するという結果を得た。したがって、点による定性分析結果を裏付ける結果となったが、何に起因しているのかは、金属の原子量（ $Fe < Cu < Sn < Pb$ ）による差を物語っているとしか、現在のところ解釈できない。今後製品における金属組成の検討を踏まえた上で、溶解金属の均質性の状態を検討する必要がある。

なお鉛滓を今回2点分析しているが、鉄のみのpeakを検出したに止まった。あくまでも点による分析であることから鉛滓に含まれている全化学組成を反映している可能性は低いと考えるのが妥当である。したがって、トリベなどの生産用具に付着している金属の定性分析結果を踏まえて、今回の溶解金属の構成を考えるのが望ましい。今回の分析で想定できる主要な溶解金属は、鉄・銅・鉛・錫の4種が考えられる。

註

1) 現在のところ、以下の試料に関しての定量分析が可能となっている。

- ・地質構成物質（塩基性岩・酸性岩）および地質構成物質によって製作された遺物。
- ・ガラス製品（鉛-バリウムガラス）

ただし、分析装置の特性から非破壊の試料全化学組成の定量分析は不可能である。

2) 添加物に関しては、以下の報告に詳しい。また民俗例を記載した文献も参考になる。

高塚秀治・桂敬（1988）「鉄滓の成分分析からみたわが国古代の製鉄技術」『考古学と自然科学 第20号』

pp. 65-79

中山光夫（1991）「豊前小倉・室町遺跡の鑄鉄溶解炉について」『鑄造遺跡研究会資料』pp. 23-26

枚方市教育委員会・（財）枚方市文化財研究調査会（1990）『枚方の鑄物師（一）』この文献のp. 53に民俗例の記載がある。

3) Mapping分析の条件は、以下に記す。

【分析条件】

- ・X線管電圧：40kV
- ・X線管電流：3.00mA
- ・コリメーター：0.30mm
- ・フィルター：なし
- ・測定時間：300sec
- ・分析環境：真空
- ・分析間隔：0.3mm
- ・測定元素：銅・鉛・鉄・錫

引用文献

太宰府市教育委員会（1997）『辻遺跡発掘調査報告書』

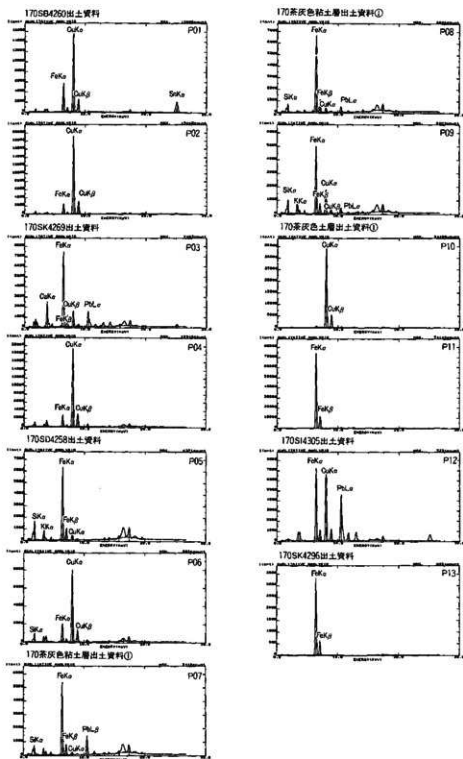


Fig.74 蛍光X線分析による元素のenergy-peak (1)
各分析チャート右上の番号(P01等)は、測定点の番号を意味する。

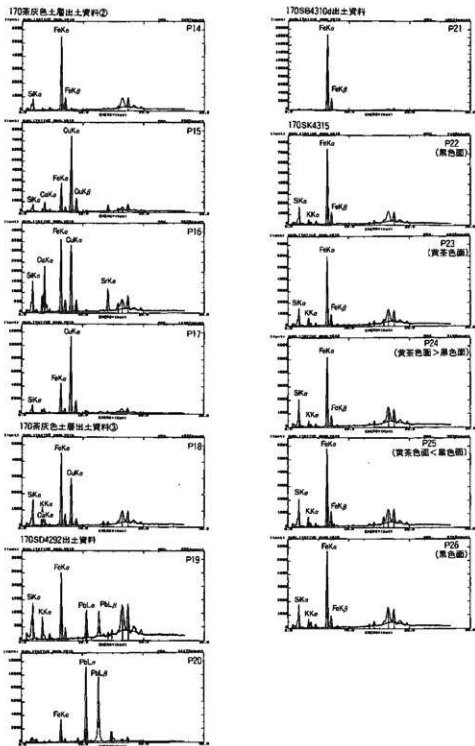
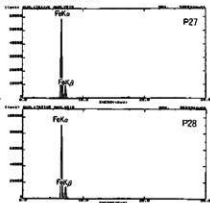


Fig.75 蛍光X線分析による元素のenergy-peak (2)

170茶灰色土層出土資料④



170茶灰色土層出土資料⑤

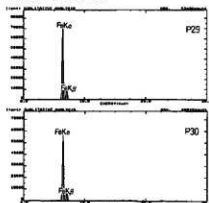
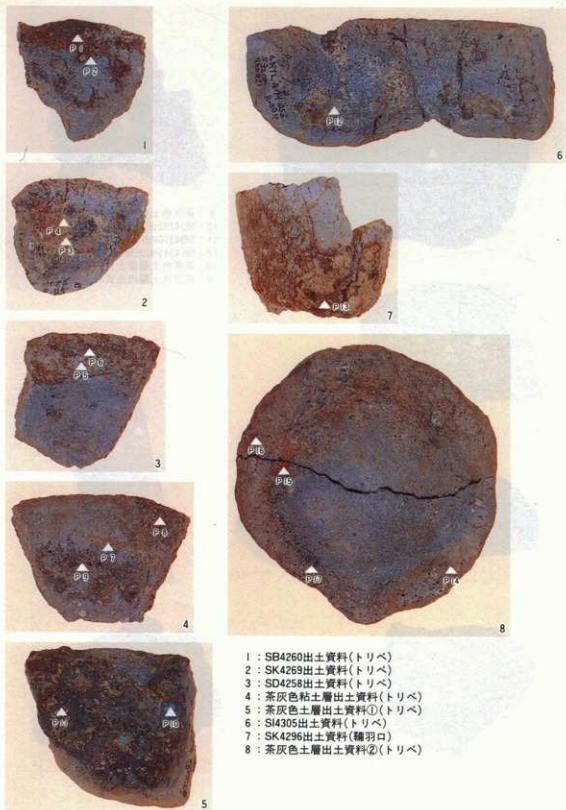


Fig.76 蛍光X線分析による元素のenergy-peak (3)



- 1 : SB4260出土資料(トリベ)
 2 : SK4269出土資料(トリベ)
 3 : SD4258出土資料(トリベ)
 4 : 茶灰色粘土層出土資料(トリベ)
 5 : 茶灰色土層出土資料①(トリベ)
 6 : SI4305出土資料(トリベ)
 7 : SK4296出土資料(穂羽口)
 8 : 茶灰色土層出土資料②(トリベ)

Fig.77 分析点(1)



9



11

- 9 : 茶灰色土層出土資料③(炉壁)
 10 : SD4292出土資料(鑄型)
 11 : SB4310d出土資料(炉壁)
 12 : SK4315出土資料(鑄型)
 13 : 茶灰色土層出土資料④(鋸滓)
 14 : 茶灰色土層出土資料⑤(鋸滓)



10



12-1



12-2



13



14

Fig.78 分析点(2)

V. 総括

学業院中学校敷地内における2件の調査を行って得られた所見を簡単にまとめておきたい。

大宰府条坊跡第119次調査では古墳時代の遺構と奈良時代の遺構が存在したが、密度は希薄であった。大宰府史跡第170次調査（以下170次とする）では奈良時代の範囲に考えられる多数の建物群が検出され、生産関係の遺物が多く出土した。これらはいずれも現在の中学校の背後あるいは東側にある丘陵（両者は連続している）の裾部分に該当する。

これに対してグラウンド内の試掘調査では遺構は皆無の状況で、谷地形にみられるような堆積が確認されたにすぎない。これらの所見を合わせると、170次の西側は北側の一部で大きな段差になり遺構が削平された可能性が強いが、総合的に捉えるとはほぼこの170次の範囲で遺構は途切れるように思える。しかし学業院中学校造成段階でどの部分が削平を受けたかが明確でなく、170次の遺構面下は砂層となり、やはり谷地形の堆積状況を示すものであることから、グラウンドの部分に当初から遺構は存在しなかったと言い切ることはできない。試掘調査ではグラウンドの西端に溝状の遺構と思しきものが確認され、隣接する水城小学校には「遠賀團印」が出土した地点が残されている（水城小学校のグラウンド部分も試掘したが、谷の堆積状況を示す所見を得たのみで遺構は確認されなかった）。

また、学業院中学校の南側では大宰府史跡の調査がいくつか行われているが、ここでは掘立柱建物をはじめとする奈良時代の遺構が多数確認されており、今次の調査とどのような関係になるのかは今後の課題としても、170次にみられたような整地が施されていれば、グラウンド付近にかつて遺構が展開していたと考えても不思議ではない。逆に小規模な谷地形を挟んで性格の異なる遺構群が展開していたとすることもでき、今後の詳細な検討が必要である。

さらに九州歴史資料館では第160次調査の北側の丘陵部を連続して調査しており、多くの成果を揚げつつある。また中学校の背後の丘陵には米木瓦窯跡が知られている。周辺の調査成果を含めて総合的に考えてゆく必要性を強く感じる地域である。

写真図版



昭和中期の学業院中学校(手前は水城小学校・上が西)
学業院中学校提供

本写真図版中の遺物写真右下にある番号は
以下のように理解される。

15-20……Fig.15の20番



大宰府政庁跡

大宰府史跡第170次調査地点上空から大宰府の平野を望む(西北西から)

Pla.2



調査区全景 (空中写真・左が北)



調査区中央部 (空中写真・左が北)



調査区北東隅部分 (空中写真・左が北)



調査区南東部 (空中写真・左が北)

Pla.4



北東部調査区全景（空中写真・上が北）



北東部調査区（空中写真・南から）



10-4-21 2002

調査区東半部 (南から)



10-4-22 2002

調査区東北部 (南西から)

Pla. 6



SB4260 (北から)



SB4260a



SB4260b

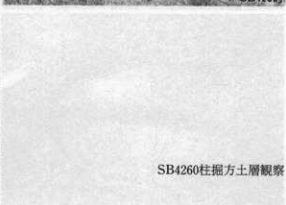


SB4260c



SB4260d

SB4260柱掘方土層観察



Pla. 8



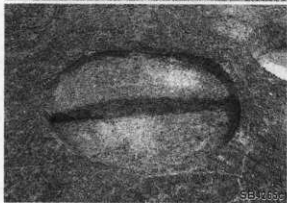
SB4265 (東から)



SB4265a



SB4265b



SB4265c

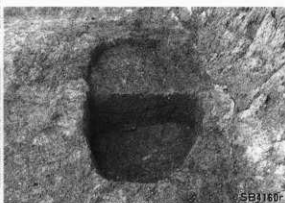
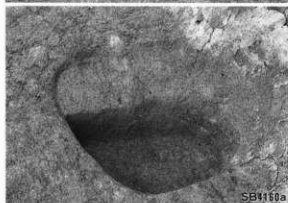


SB4265d

SB4265柱掘方土層観察



SB4265柱掘方土層觀察



SB4160柱掘方土層觀察

Pla.10



SB4280 (南から)



SB4280a



SB4280b

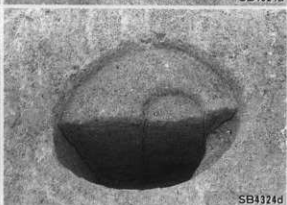
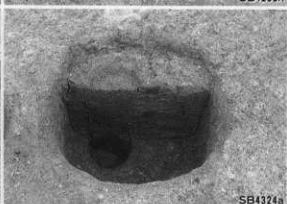
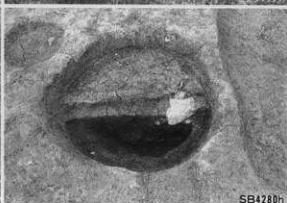


SB4280c



SB4280d

SB4280柱掘方土層観察



Pla. 12



SB4294 (東から)



SB4294b



SB4294c



SB4298a



SB4298b

SB4294・4298柱掘方土層観察



SB4300全景 (空中写真・上が北)



SB4300a検出状況 (掘方プランにかかる溝はSI4305壁溝)

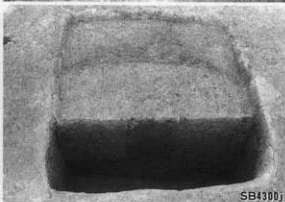
Pla. 14



SB4300a土層観察（南から）



SB4300b土層観察（北から）



SB4300柱掘方土層觀察

Pla. 16



SB4310 (西から)



SB4310a



SB4310b

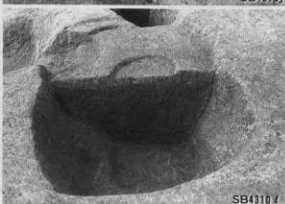


SB4310c



SB4310d

SB4310柱掘方土層観察



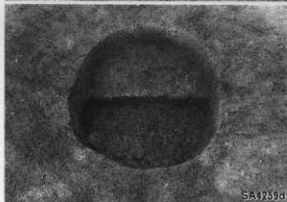
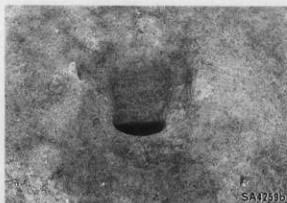
Pla. 18



SA4286・4287 (西から)



SA4291・4293 (西から)



Pla. 20





SI4305 (東から)



SI4305 (南から)

Pl. 22



SI4305土層観察 (南から)



SI4305土層観察 (東から)



SI4305電付近土層観察 (東から)



SE4270 (南から)



SE4295 (南から)

Pl. 24



SE4295細部 (南から)



SE4295細部 (北から)



SE4290 (西から)



SE4290 (南から)

Pla. 26



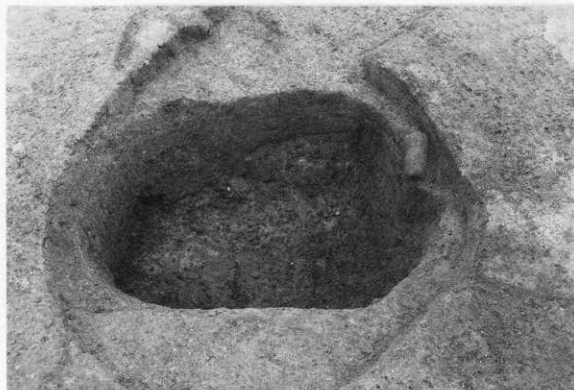
SE4290井戸枠細部 (南から)



SK4257 (左) ・ 4261 (南から)



SK4263 (南から)



SK4267 (北から)



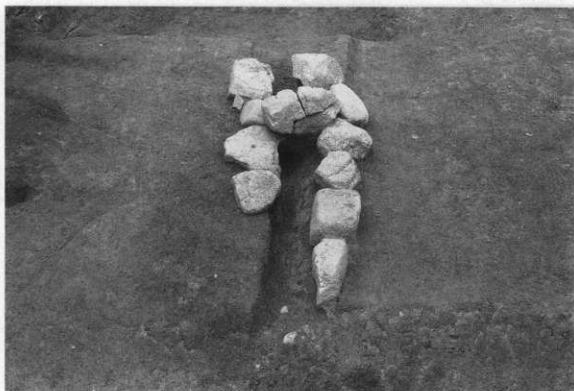
小溝群の状況（西から）



小溝群の南側の状況（北西から）



SD4292 (東から)



SX4256 (南から)

Pla. 30



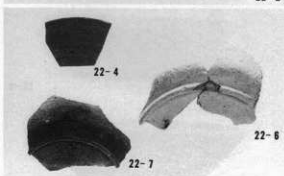
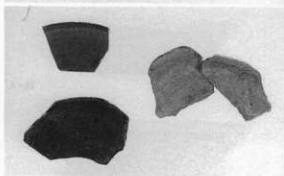
SX4264 (南から)



SX4281 (西から)



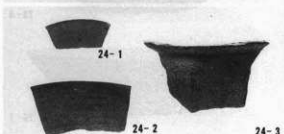
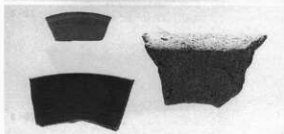
22-2



22-4

22-6

22-7



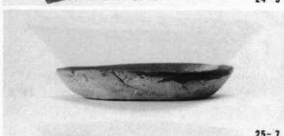
24-1

24-2

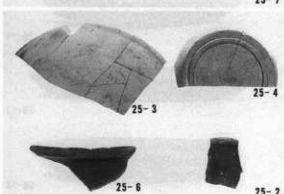
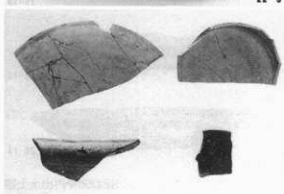
24-3



22-3



25-7



25-3

25-4

25-6

25-2

Pl. 32





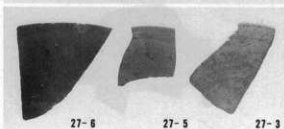
27-1



27-2



27-4



27-6

27-5

27-3

SE4290灰色土層・掘方出土土器



28-1



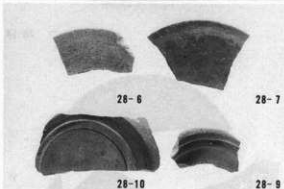
28-2



28-3



28-5



28-6

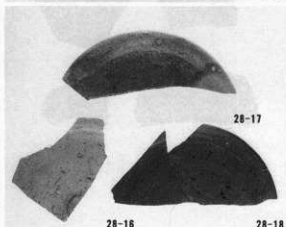
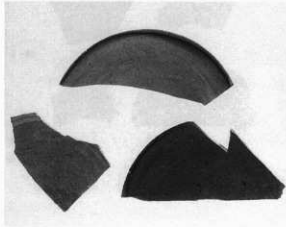
28-7

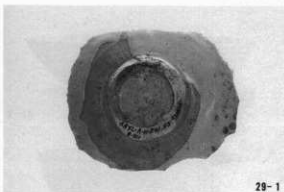
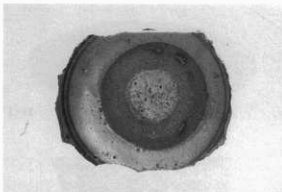
28-10

28-9

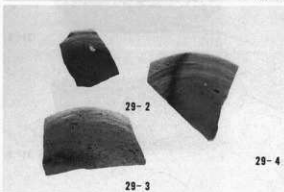
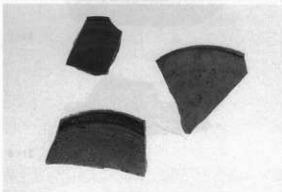
土坑出土土器

Pl. 34





29-1



29-2

29-4

29-3



29-5



30-1



30-2



30-3



32-22

Pl. 36



31-1



31-3



31-6



31-7



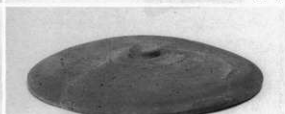
31-8



31-9



31-14



31-16

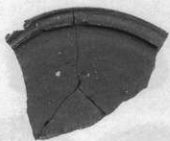


31-17



31-18

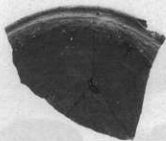
SD4292出土土器



33-1



33-2



33-3



33-4



33-5



33-6



33-8



33-9



33-10

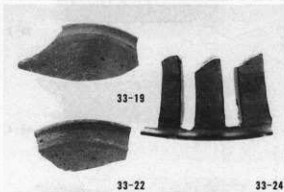
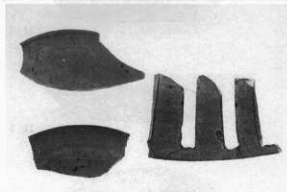
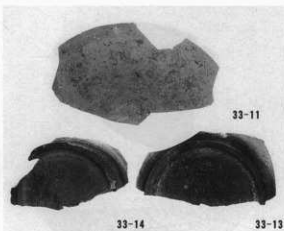
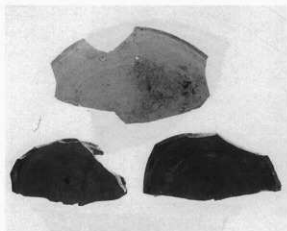


33-12



33-15







34-26



34-32



34-35



35-2



35-3



35-6



35-8



35-15

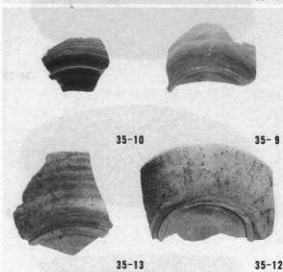
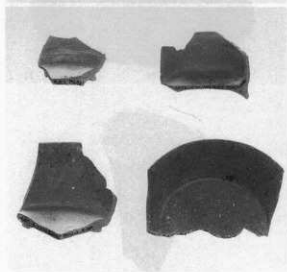
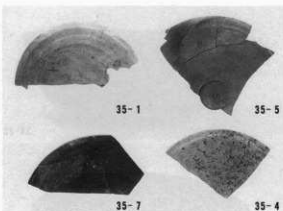
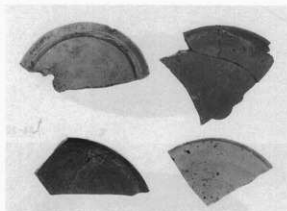


35-14



35-11

Pl. 40



35-16

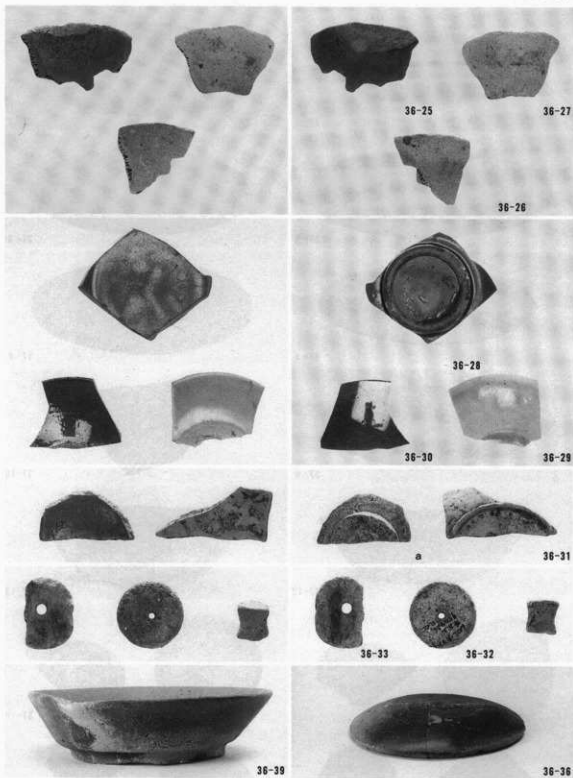


35-17



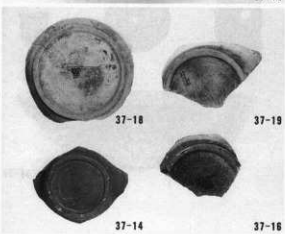
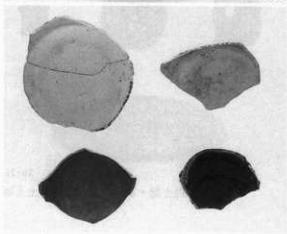
35-18

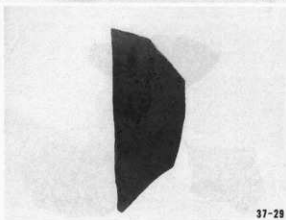
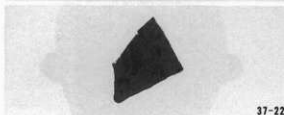
茶灰色土層出土土器



茶灰色土層・茶灰色粘質土層出土土器

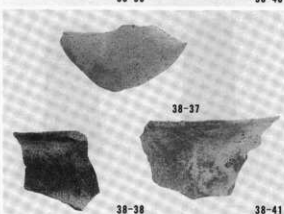
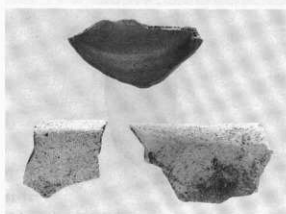
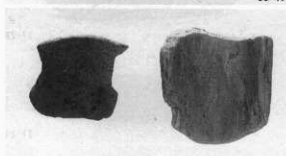
Pla. 42





褐灰色粘質土層出土土器

Pla. 44



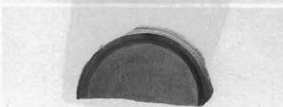
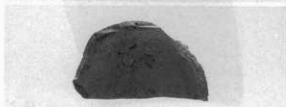
褐灰色粘質土層出土土器



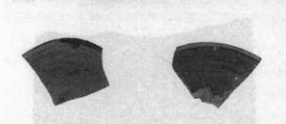
39-1



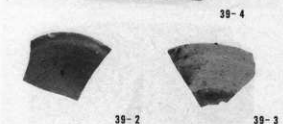
39-5



39-4



39-2



39-3

灰茶色粘質土層出土土器



39-7

攪乱出土土器

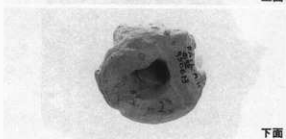


正面



側面

表土出土人形

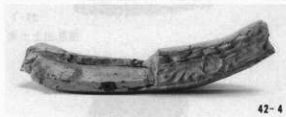
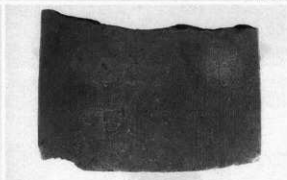
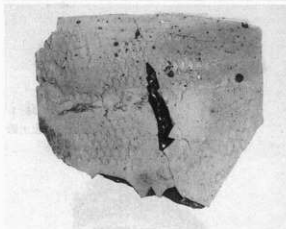


下面

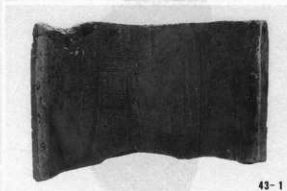
Pla. 46



42-2



42-4



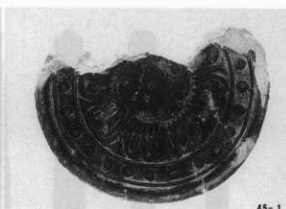
43-1



45-5



44-5



45-1

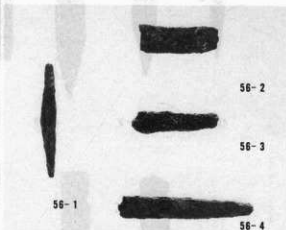
各地点出土軒瓦



45-3



45-4



56-2

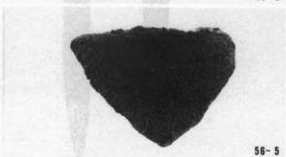
56-3

56-1

56-4



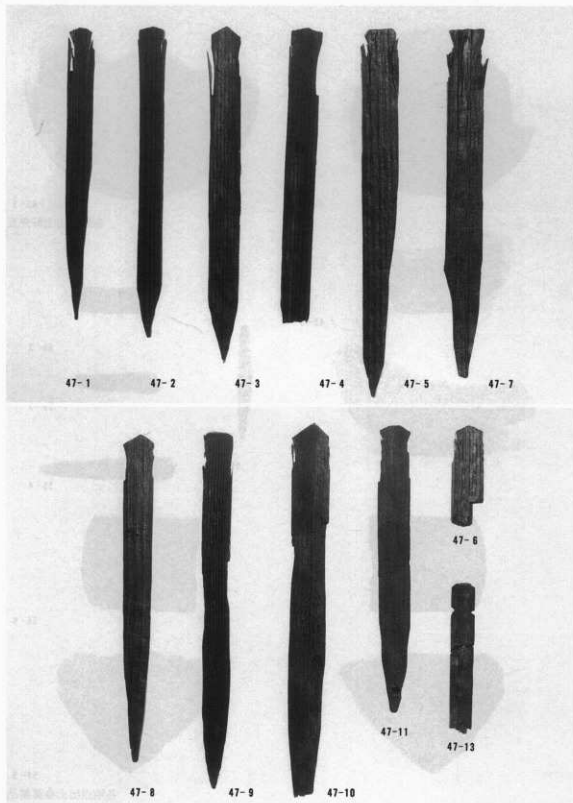
56-6

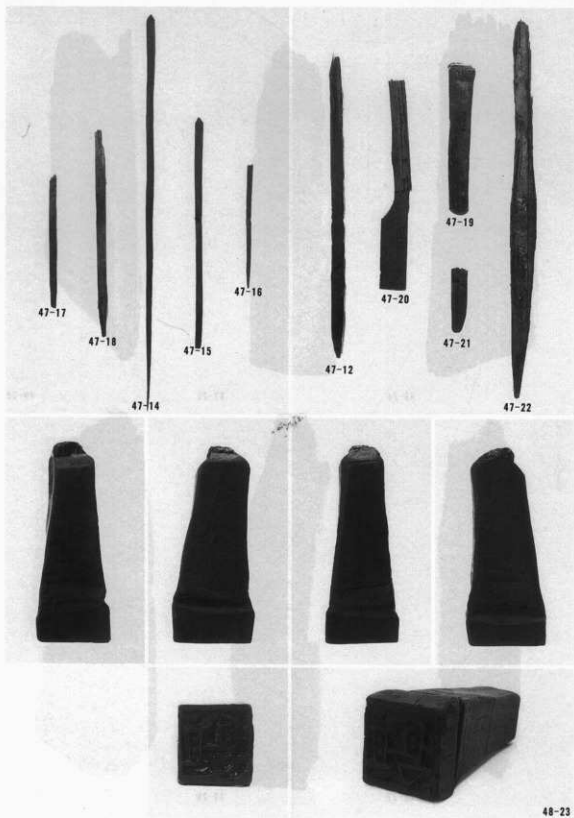


56-5

各地点出土金属製品

Pla. 48





Pla. 50



49-24



49-25



49-26



49-27



49-28



49-29

SE4290出土井戸部材



49-30



50-31



50-32



50-33



50-34



50-35



50-36



50-37

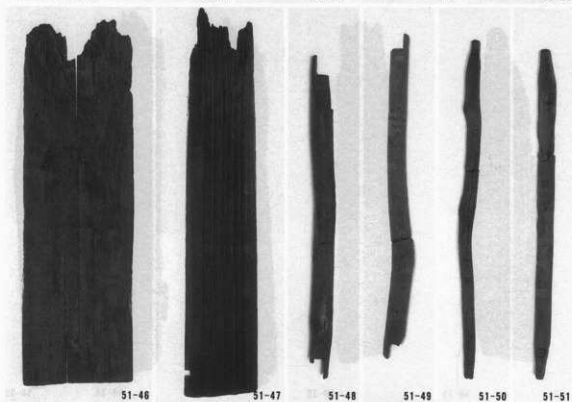
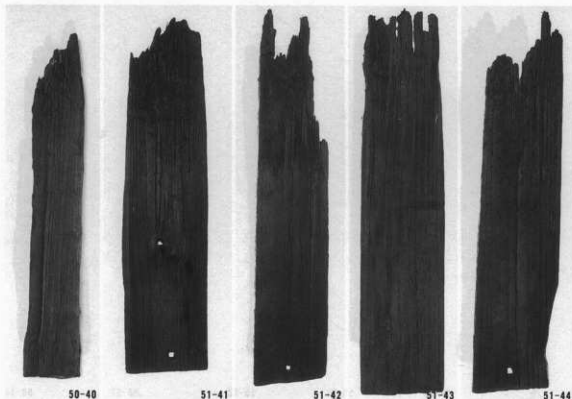


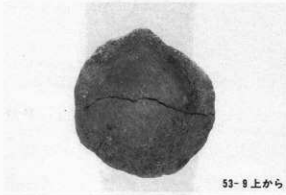
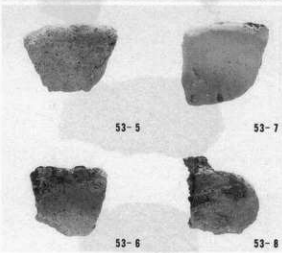
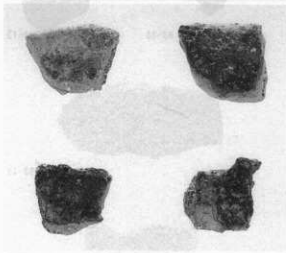
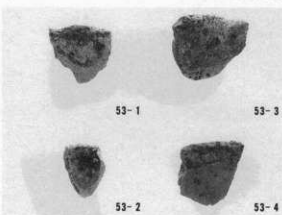
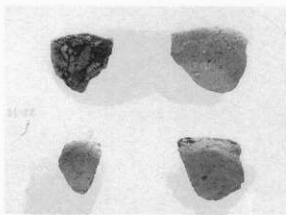
50-38



50-39

Pla. 52





53-1

53-3

53-2

53-4

53-5

53-7

53-6

53-8

53-9 上から

53-9 底から

53-9 正面

53-9 背面
生産用具

Pla. 54

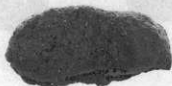


53-10



53-11

53-12



53-13



54-15

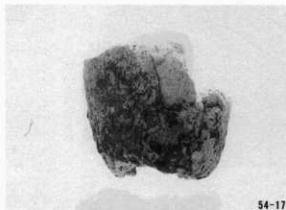
54-14



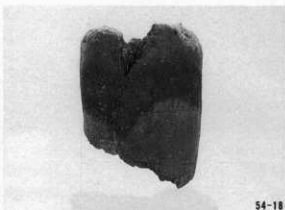
54-19

54-16

生産用具



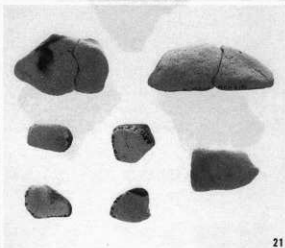
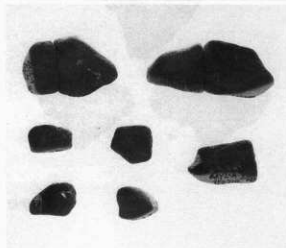
54-17



54-18

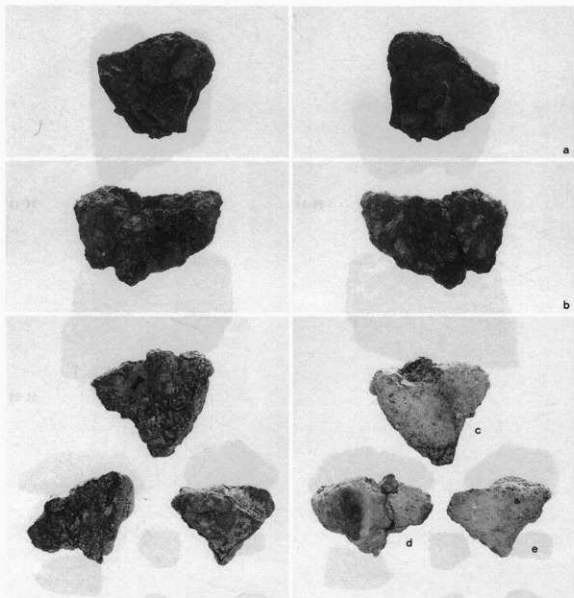


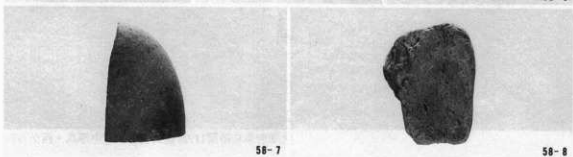
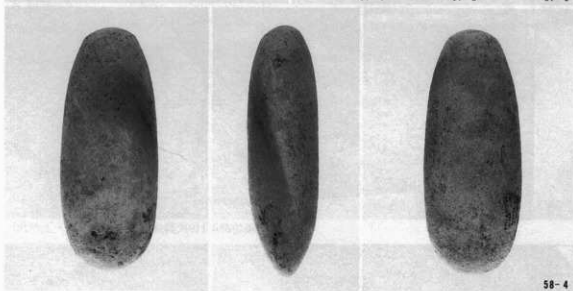
55-20



21

生産用具





Pla. 58



大宰府条坊跡第119次調査全景（空中写真・上が北）



大宰府条坊跡第119次調査全景（空中写真・西から）



〔真石中東〕 第119次調査跡跡116幅跡4 2007年

大宰府条坊跡第119次調査全景（南から）



〔真石中東〕 第119次調査跡跡116幅跡4 2007年

大宰府条坊跡第119次調査全景（南東から）



大宰府条坊跡第119次調査区西半部 (空中写真)



大宰府条坊跡第119次調査区東半部 (空中写真)



119SK002土器出土状況 (南から)



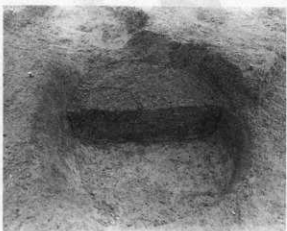
119SK005土層観察 (南から)



119SX015土層観察 (南から)



119SX031土層観察 (南から)



119SX039土層観察 (南から)

Pla. 62



69-3



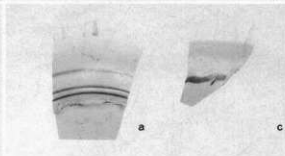
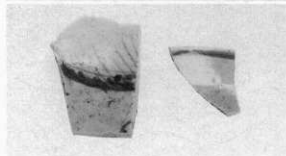
69-5



69-4



h



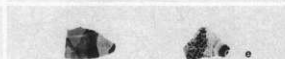
a

c



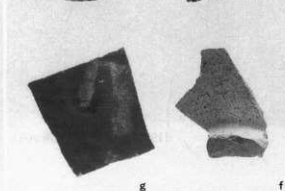
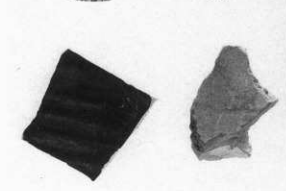
b

d



e

f



g

h

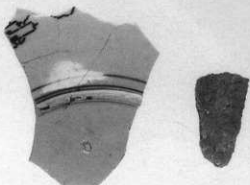
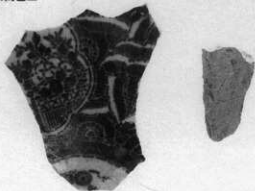
暗茶灰色土



69-6

すり鉢

茶褐色土



染付

土管

攪乱

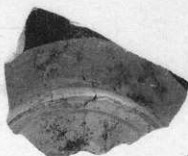


染付椀

染付丸椀

染付そば猪口

攪乱



唐津系鉢

大宰府条坊跡第119次調査出土遺物

大宰府史跡

太宰府市の文化財 第36集

平成9年3月

編集行 太宰府市教育委員会
太宰府市観世音寺1-1-1

印刷 株式会社チューエツ
福岡市博多区東比恵2丁目9番1号

